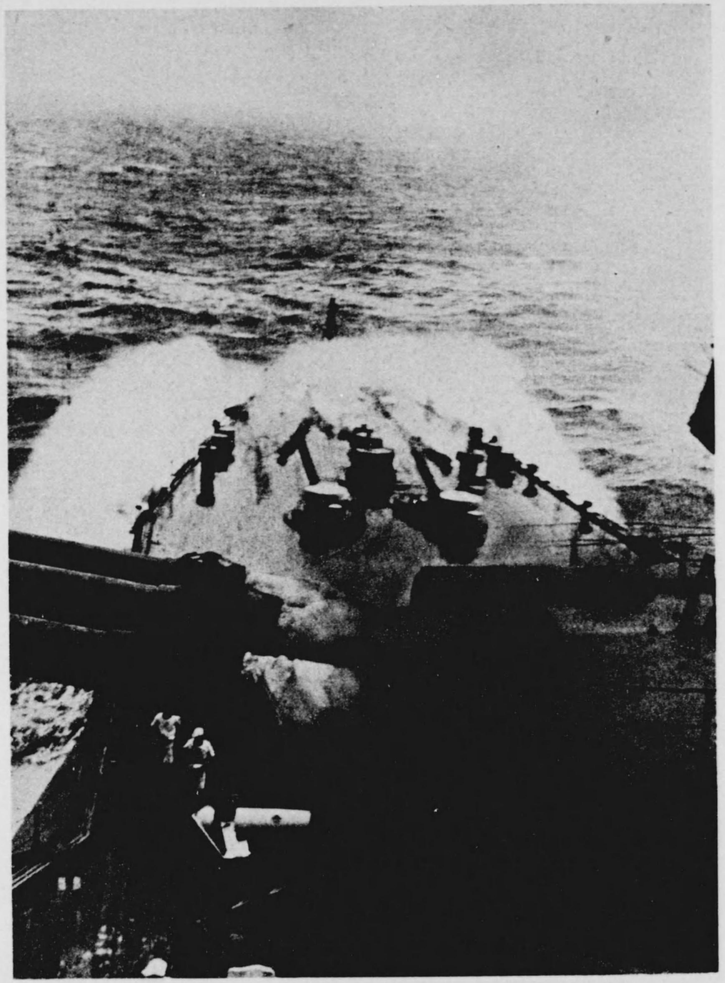
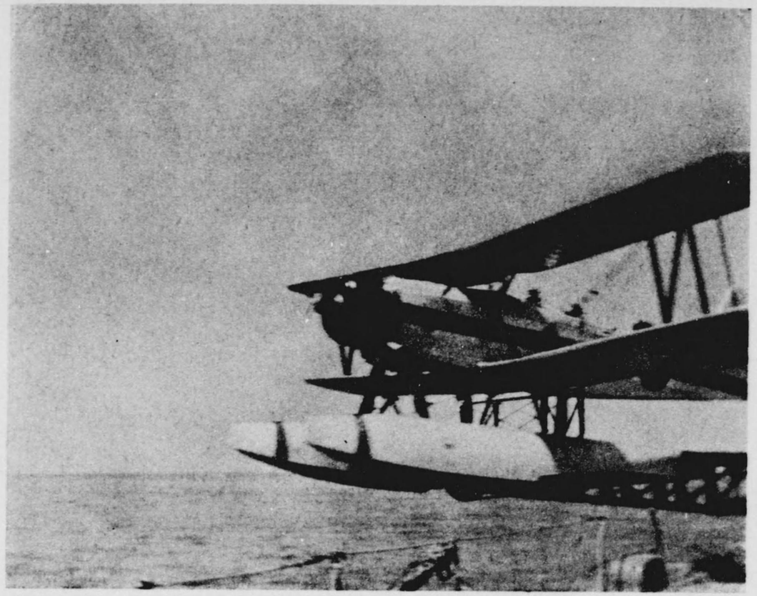


我が主力艦太平洋に出動

（四十七　眞寫）

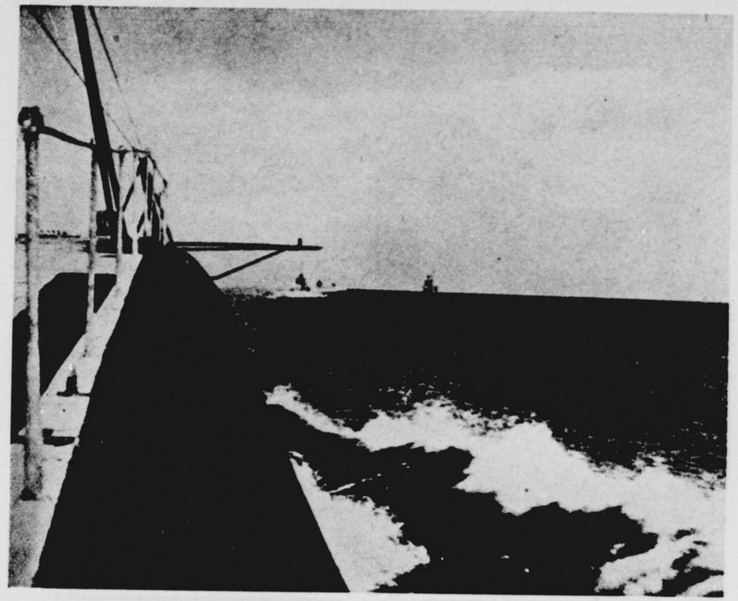


まさに飛び立んとする艦上搭載機

（三十七　眞寫）

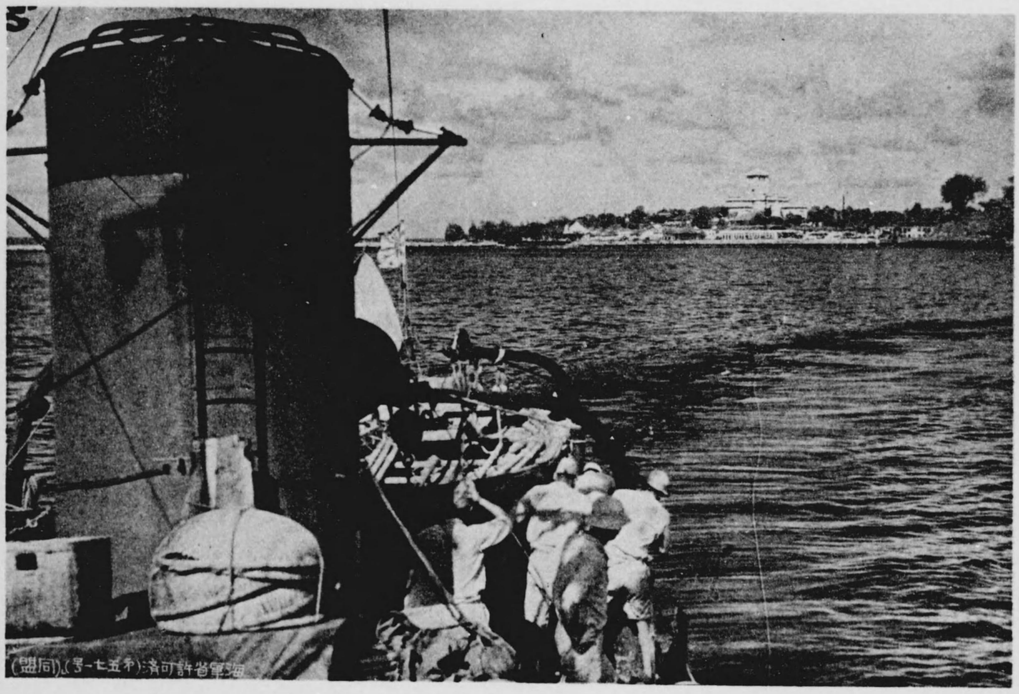
敵軍事施設に編隊爆撃

（六十七　眞寫）



艦水潛が我るむ索を餌好上洋

（五十七　眞寫）



ジョホール水道守備の我が艦艇〔昭南島〕

海軍航空部隊ワナワナ島附近の要地を爆撃〔ソロモン諸島〕

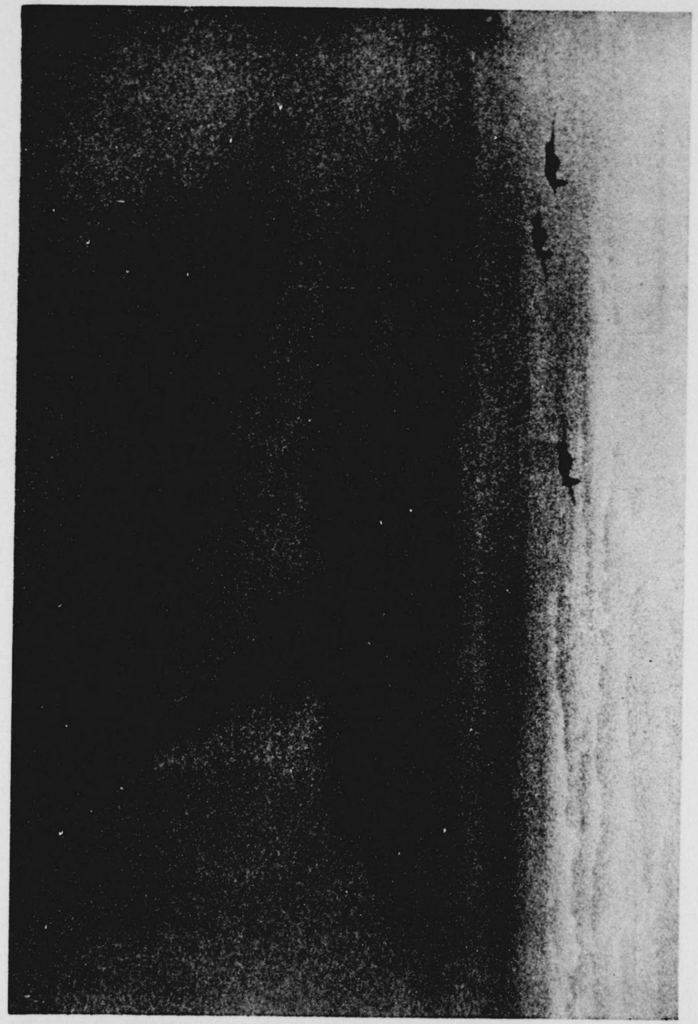
クリスマス島掃蕩の陸戰隊

南方〇〇に出動待機の水上機

〔島諸ンマダンア〕行敢陸上にーヤーレブトーボ隊部艇舟が我

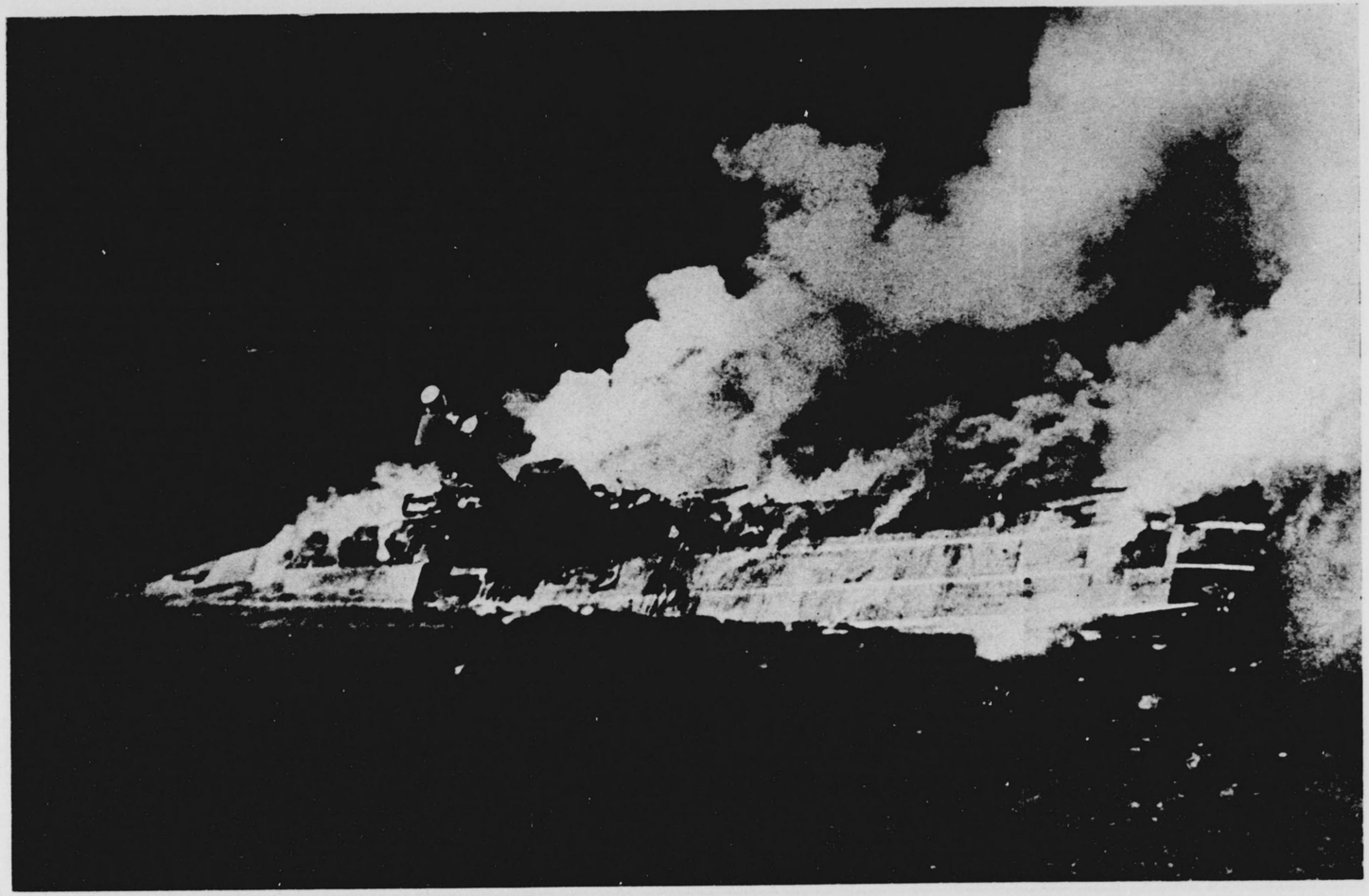
陸上前敵に市ブセ隊戰陸

〔戰作洋ドンイ〕那刹るすとんせ



〔雑誌ページ〕中命に船送輸業戦・船中船

（三十八　眞寫）



〔戰作洋ドンイ〕那刹ろすとんせ沒沈にさま火發りよ所ケ數りよに發爆大內艦・後最のスミーハ艦母空航英

〔戦海海域〕艦逐駆衛迫む便取をれそンウククーョ母空米はる十走遁でい史を脈大い太先中・前寸の撃突に隊護駆隊部空転

〔戰海海珊瑚〕雷空のめどとは沙

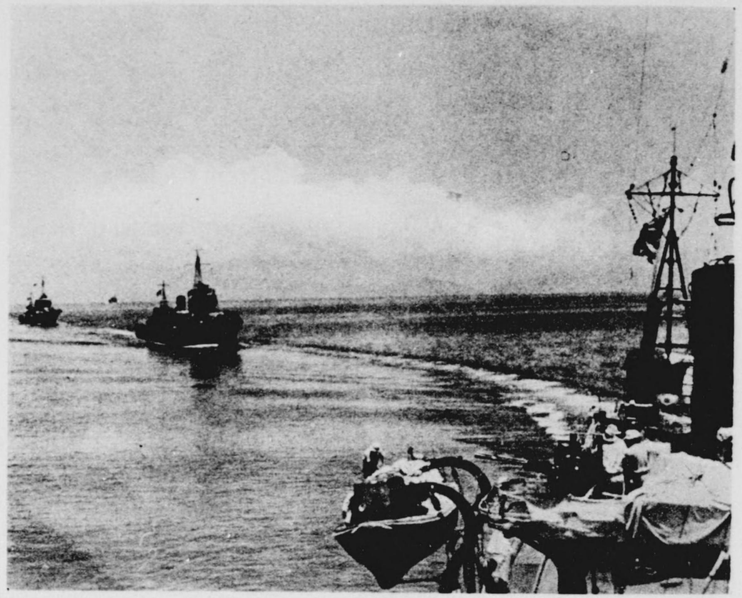
〔戰海海珊瑚〕跡の下投雷発が我は壊大のり 客左央中（隠右）カトラサ母転来る寸退艦連高いつし 潜艇を 海珊の死必

〔戰海海瑚珊〕雷空のめどとは波白のつ三前手ひ蔽を影艦煙水煙爆々奄息氣てけ受に艦全を彈中命・後最のガトラサ母航米

〔戰海海瑚珊〕敵の下投雷空於我上壁水ひり落在央中（圖右）ガトラサ母航米る寸遊整連高へつし張眞を藻彈の死必

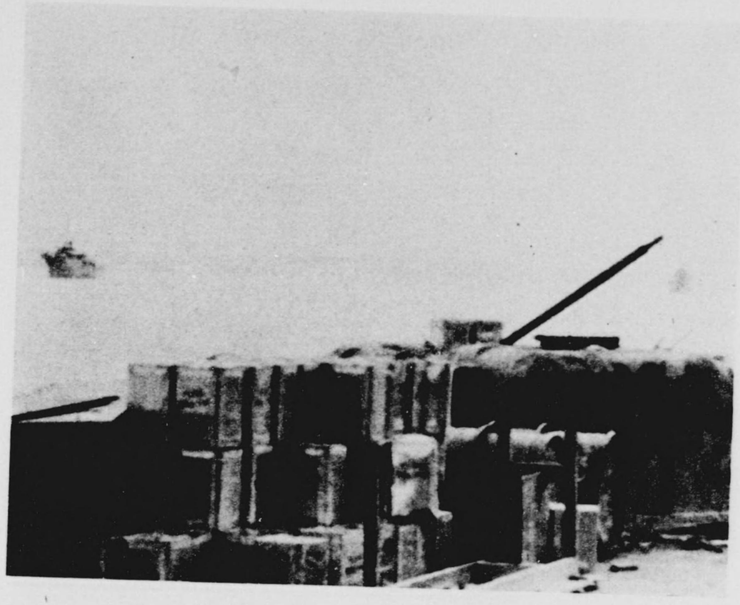
〔戦海海湖〕跡の光煤（詳不名嚴）艦敵は煤煙大き自央中・艦敵ふ遠け遠に艦巡の艦海ち我

（寫眞　八十八）



我が艦艇ス港入れて碇を灣ラニマ々堂

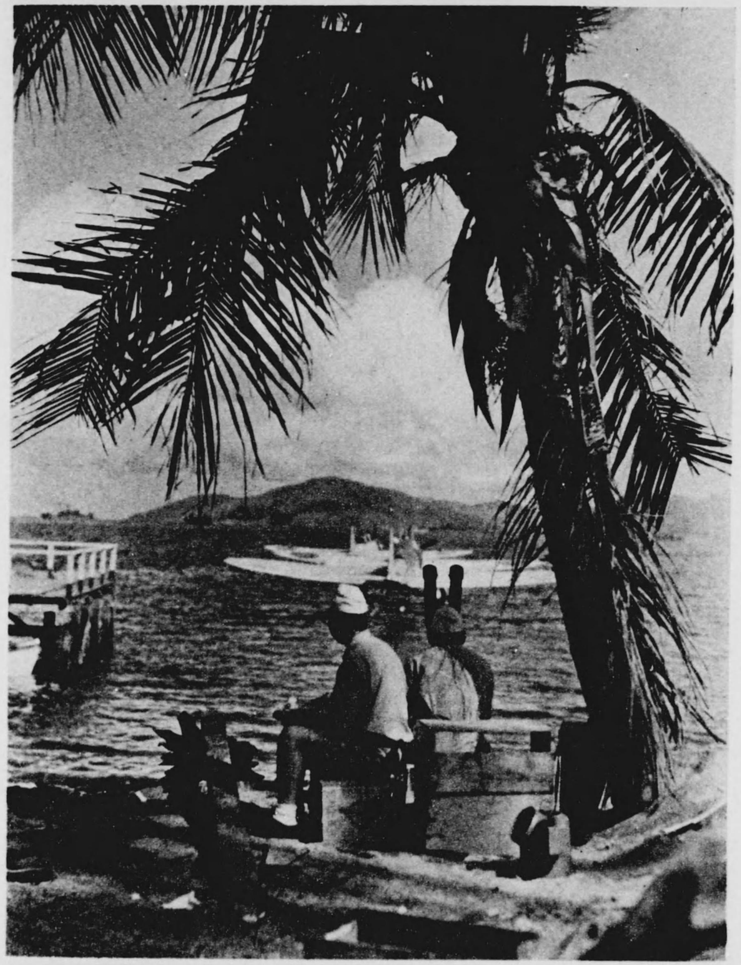
（十九　眞寫）



我が艦艇スラバヤ港に入港

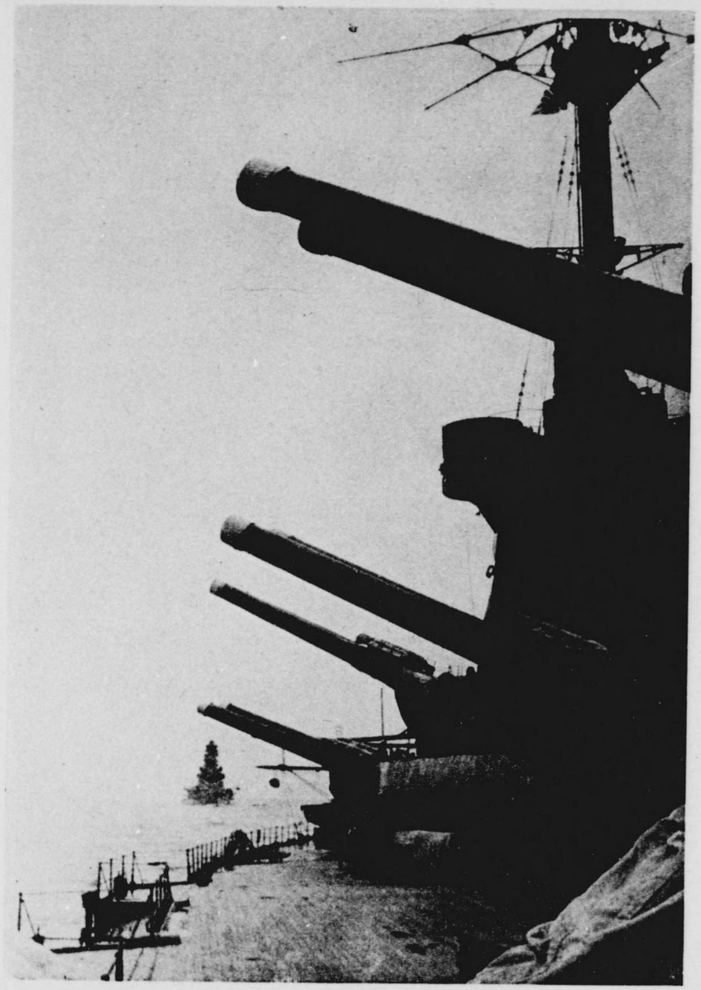
（九十八　眞寫）

〔地基〇〇〕隊部空航軍海の機待擊出



〔地基〇〇〕る成備準の動出・下一令命

機上より敵狀を撮影する海鷲



巨砲洋上を睨む

〔近附橋ーエウスーコ道水ルーホヨジ〕ナ港入に港軍ーダレセ襲雷が海

第二編　今次大戰果の原因

緒　言

大東亞戰爭は、いま征戰の中途にある、否、實はこれからが本舞臺である。隨つて未だ完全に勝敗が決したと云ひ得ないこと勿論であるが、しかし皇軍が香港、マニラ、シンガポールを占領し、ジヤバ、スマトラ、セレベス、ボルネオの諸島を攻略し、既にビルマのマンダレーにまで歩武を進め、ニューギニア、濠洲をも制壓して、遠く印度洋の海空を制した今日に於て何人も最早、これを單なる緒戰の勝利に過ぎずとは云ふまい。而して、その海戰に於ても、太平洋、印度洋を制壓せる現在に於て、敵のわづかになし得るものは、海のゲリラ戰に過ぎず、いつかは惹起さるべき主力戰についても、帝國海軍今日までの戰果に徵すれば、明らかにその勝敗の數を豫見し得る。この斷定は決して過言ではない、早計でもない、まさに世界戰略戰術家のひとしく首肯するところなるのみならず、敵、米、英、支自身、すでにこの事實を容認して、今更の如く、帝國海軍の威武に驚異の眼を瞠つてゐる。

更にこれをわが國内に見る——共に赫々の大戰果をあげし陸軍側に於てさへ、今次、海軍の齎らせる制先的戰勝の效果とその緊密なる協力とに對し嘆稱の辭を惜しまず、國民の感激また云ふばかりなきものがある。

思ふに、この大戰果たる、大御稜威のもと、天佑神助ある皇國海軍の、世界に冠絶する勇武の然らしめたところではあるが、更に仔細に、この大戰果の原因をたづねれば、およそ左の諸項に歸結しなければなるまい。

一、軍人勅諭精神の徹底
一、帝國海軍傳統の攻擊精神
一、世界に冠絶せる猛訓練

無敵海軍は一日にして成らず、まことに、わが海軍が今日の偉大を招來せし所以のものは、世界にその比を見ざる如上の諸項によつて儼然と打ち建てられたのである。然り、これは、まさしく世界にその比なきあくまで東洋的、日本的精神を以てその中心を貫かれた帝國海軍獨自のもの、斷じて他の追隨と模倣とを許さないものである。以下、この諸項に關し、少しく詳述しなければならぬ。

一、軍人勅諭精神の徹底

畏くも　明治天皇は、明治十五年一月四日、陸海軍軍人に對し、皇軍の本義と、忠節、禮義、武勇、信義、質素の五箇條を諭し給へる勅諭を賜つた。洵にこれは帝國軍人の眷々服膺すべき千古不磨の大寶典であり、國民みな兵たる帝國臣民の、以て遵守すべき聖典であるから、今事

新しく之を云ふを要せずと思ふかも知れぬが、特に今これを抽出して、今次大戰果の原因となす所以のものは、そこに特別の理由が存するからである。

今年一月、大本營海軍報道部々長前田稔少將は、「帝國海軍の決意」と云ふ題下に放送し、今次の大戰果を述べた後にかう云つてゐる。

「(前略)これらの大戰果は、帝國海軍が、過去幾十年の間、專ら精兵主義を以て、粉骨碎身、錬磨に錬磨を重ね世論に惑はず、政治に拘らず、一途にその本分に精進して來た忍苦の賜であつて、戰の勝敗は必ずしも數の多寡によらず、兵の精粗利鈍と、精神の强弱こそが勝負の岐れる最大の要件であることは、今も昔も全く同樣であることを如實に證明してゐると考へる。(後略)」

聽者は、果してこの放送を何と聞いたであらうか。もとより、聽者それ〴〵の立場と解釋によつて異なるであらうが、飜つて、これを高調したものの精神乃至これが主張の中心が奈邊にあつたかを考へる時、吾等は、何の躊躇もなく、「帝國海軍が過去幾十年の間、精兵主義を以て粉骨碎身、錬磨に錬磨を重ね、世論に惑はず政治に拘らず、一途にその本分に精進して來た忍苦の賜である」の一句こそ、あの相當長い講演の中心であつたと答へたい。否、更に、「世論に惑はず、政治に拘らず、一途にその本分に精進した」の一句こそ、就中、特に〳〵わが海軍が、聲を大にして、全國民の前に强調したかつたところではなからうか。恐らく、具眼の士は、みなこの一句をこそ肝に銘じて聞入つたに違ひない。

云ふまでもなく、この一句は、軍人勅諭第一條の、一、軍人は忠節を盡すを本分とすへしの中にある一句であり　明治天皇は、「抑〻國家を保護し國權を維持するは兵力に在れは、兵力の消長は是國運の盛衰なることを辨へ、世論に惑はす政治に拘らす、只〻一途に己か本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ、其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ」と諭し給ふたのである。爾來帝國軍人は、みなこの精神を體して、世論に惑はず政治に拘らず、たゞ一途、己が本分たる忠節を守り來つたのであり、陸海軍の教育も亦文字通りこの大本に則つて行はれたのであるが、顧みるに、日露戰爭後、大正年代に入り、更に第一次世界大戰のあとをうけたわが國は、世界大戰による好景氣の影響として、漸く明治以來の建設的苦難を忘れ、物質萬能の風潮に禍されたばかりか、大戰後世界に擡頭せる平和自由の思想を輸入して、舉世滔々、人みなその安易なる方向に走り、加ふるに、この狀勢の所產たる世界軍縮の毒波に對してさへも、敢然これを拒否するの態度をとらず、むしろ、これを歡迎するが如き國論さへ起り、つひに華府軍縮會議的結果を招來するに至り、甚だしきに至つては明治以來幾十萬の尊き犧牲に於て成れる滿洲放棄の愚論をさへ聞くが如き、恐るべき憂ふべき樣相をさへ呈したのであつたが、さすがにこの風潮はわが國論の根柢までを搖がすに至らず、この秋にあたつてよくこの世紀の狂瀾に抗しつゝ、つひに滿洲事變の勃發を契機として、這個の狂瀾を既倒にかへした大存在があつた。云ふまでもなく、そは、わが海陸軍である。即ちわ

が軍部は、かくの如き世の風潮のうちにあつても、なほよく、世論に惑はず、政治に拘らず、世紀の危機に處して皇國を泰山の安きにおいたのであつた。

さりながら、この一長にはまた他の一短のやむを得ざるものあり、滿洲事變を契機として、勃然昂揚せる愛國革新の思想は、かの五・一五事件を生み、ついで二・二六事件となつてあらはれ、所謂革新の大濤澎湃として脚下に押寄せ來り、爲めに國內も或はこの動搖に捲込まれるかとさへ看取されつゝ、つひに支那事變に突入したのであつた。この時、この際、帝國海軍はなほよく、儼然山の如く動かず、磐石不動、金剛不壞、あくまで靜まりかへつて、勅諭の精神たる軍人の本分を守りつらぬき、苟くも世論に惑ふことなく、政治に拘はることなく、たゞ一途、研究に次ぐに研究、錬磨に次ぐに錬磨を重ねつゝ、而かも默々として、猛訓錬と研鑽に餘念なかつた。宜なる哉、支那事變勃發するや、幾十年の研磨錬鍛はつひに結實した、而して更に今次大東亞戰爭に於て、戰史未曾有の大戰果を獲得した。

前田少將は、「世論に惑はず政治に拘らず、一途に軍人の本分に精進して來た忍苦の賜」と云つたが、まさしくこれは「忍苦」の二字によつてあらはさるべきもの、一面、滔々たる世の惡風潮に抗しつゝ、他面、國論の動搖常なきうちに、時に或は、海軍軟弱のそしりをさへうけつゝなほ毅然として、その本分に精進すると云ふことは、自信實力兼備せる帝國海軍なるだけに、これが忍苦でなくて何であつたらう。然し、これあるがゆゑに、不斷の研鑽が積まれ、世界無

比の兵器が生れ、實戰よりも激しき猛訓練が敢然として行はれたのであり、而して、その集積が、今次の大戰果をなすに至つたのである。若しかりに、當時の海軍にして、これと反對の風潮に陷つてゐたとしたら、そして全海軍を支配する空氣が、萬一にも所謂世論と政治とに拘泥してゐたとしたら、果して如何なる結果を招來してゐたことであらう。殷鑑遠からず、これを米國に見よ。その海軍高級軍人の多くは、所謂口舌の雄として、政治に走り、いたづらに空虛なる軍事評論を弄んで、脚下三尺の地の崩壞を氣付かなかつたではないか。

それを思へば　明治天皇の陸海軍人に下し賜はりたる勅諭の精神が、如何に尊くもまた適切な教訓であつたかに、思はず頭のさがるのを覺ゆると同時に、あくまでこの精神を堅持して動かず、いつ如何なる時代に於ても、この精神を一貫して、全海軍を率ゐ來つた帝國海軍諸先輩の努力の如何に大きかつたかを思はずにはゐられぬのである。

一、帝國海軍傳統の攻擊精神

ハワイ、マレー沖、スラバヤ沖等の海戰戰果は、過去數十年間、帝國海軍を貫いた傳統精神が勃然としてあらはれしもの、而かもその海戰の內容も亦あくまで純粹なる日本海軍的傳統に裏づけられたものである。故に、この傳統の理解なしには、この大戰果を理解することが出來ない。恐らく、この傳統精神を解せざるものには、今次大戰果は謎としか解されないであらう。

さるにても、この日本海軍の傳統精神とは、如何なる內容と眞髓とを有するものか、如何なる歷史を經て形成されたものか、こゝにこの世紀の奇蹟とも云ふべき今次海戰々果を解く鍵がある。一言にして云へば、そは、帝國海軍獨自の攻擊精神である、必勝の信念である。

卽ち、日淸戰爭以前、世界最年少の海軍として成長しつゝあつた帝國海軍は、逸早く、當時の新兵器たる魚雷に着目し、日淸戰爭勃發するや、敵巨艦への對抗上、日本獨自の水雷艇二十隻を建造し、これを以て、明治二十八年二月四日、威海衞夜襲を決行し、敵艦定遠ほか三隻を轟沈大破せしめ、以て敵の降伏を早からしめた。そして、この時に於けるわが水雷艇の奇襲戰法こそは、あくまで日本的性格に裏づけられた捨身の戰法であつて、この新兵器と純日本的捨身戰法との完全なる合致が、海軍攻擊精神の一因をなした。謂ふならば、魚雷は、わが捨身戰法によつて、完全にその性能を生かされたのである。爾來、この捨身戰法に於ける攻擊精神はわが海軍必勝の方策として、これが研究と演錬とには、いよ〳〵不斷の努力が重ねられ、兵器の發達、戰術の變化に卽應しつゝあらゆる部門に向つて徹底的に浸透し、これが昂揚のためには驚くべき努力が續けられたのである。而して明治三十七年二月八日、日露開戰の劈頭に於てまたしても、この捨身水雷戰術は旅順港の夜襲となつてあらはれ、一戰忽ち、敵戰艦二隻、巡洋艦一隻を轟沈大破し、こゝにわが海軍攻擊精神は、いよ〳〵物心兩面に於て發揮された。

時は至る、翌三十八年二月下旬、東鄕司令長官は、來るべき敵バルチツク艦隊に備ふるにあ

たり、參謀長加藤友三郎（後の首相）以下の幕僚と會し、想を練り、意を凝らして、こゝに將兵に對し一大戰策を授けた。即ちこれは、大將多年の研鑽に加ふるに、さきの旅順港に於ける實驗を生かし、更に本邦中古水軍の精神並に孫子以下の兵法を消化し、以て帝國海軍獨自のものとなした戰策であつた。而かもその麾下將兵に對し、「戰鬪の覺悟」として示されたものはかうである。

一、作戰の萬事警戒を最要とす。大敵を怖れず小敵を侮らず、常に敵の來らざるを恃まず、我常に待つ處あれば、決して不覺を執るべきものに非ず。古來往々實戰の後に悔事を殘すは、敵に乘ぜらるべき我の虛ありしを以てなり。油斷は大敵なり、寸時細事にも警戒を怠るべからず。

一、戰鬪に於ける士氣の消長は、戰果に關係すること頗る大なり。戰場の經歷少きものは大抵敵を強く見、我を弱く感ずるを常とす。これ敵艦内の慘事は我これを見る能はざるも、我の被害は常に心目に觸るゝを以てなり。血路を開きて逃出せんとする敵艦を見て、我に迫擊し來るものと誤り、あるひは敵が困憊の極、唯砲彈を亂射するを見て、我を猛射するものと認むる等の實例なきにあらず、特に戰酣にして、勝敗方に決せんとする際には、實際勝戰なるに自ら苦戰と感ずること多し。故に我苦戰するときは、敵はその數倍も苦めるものと觀念するを可とす。古の兵家、これを七分三分の兼合と戒む。即ち敵七分我三分と思ふ時が、實

際五分五分なりとの謂なり。

一、已に合戰するに當りては、防禦をいふの要なし。積極の攻擊は最良の防禦なり。假令非裝甲艦と雖も、我が猛火を以て敵の砲火を擊壓すれば、これ取りも直さず最良の裝甲を有するに等し。我が砲數少き場合に於ても、その照準發射迅速確實なるときは、恰も我が砲數を倍加せるが如し。黃海々戰に見るに、我の三發する間に彼一發するの比例なりし故に、我が一門は能く彼の三門と對抗するを得べし。況んや我が射擊の練度は、遙に敵に優るあるに於てをや。

一、戰術實施の要訣は、己の欲せざる處を敵に施すと同時に、敵より施されざるにあり。故に斯くされては苦むと思考することを、我より先づ施すこと肝要にして、常に機先を制せざるべからず云々。

即ち見る「合戰するに當りては防禦をいふの要なし」「積極の攻擊は最良の防禦なり」「假令非裝甲艦と雖も我が猛火を以て敵の砲火を擊壓する」「我に砲數少き場合に於ても、その照準發射迅速、確實なるときは恰も我が砲數を倍加せるが如し」等の條々は、あきらかに見敵必殺の攻擊精神を解說强調せるものであつて、今次海戰々果の一つ一つは、恰もこの訓諭の條々を證明せんがため特につくられたかの如く、當てはまるのである。例へば輸送船が敵潛水艦を砲擊して擊沈したるが如き、或は、敵潛艦の上にのしあげてこれを擊碎したるが如き、苟くも敵

を發見せんか、忽ちこれを襲ひ、之を撃滅せずんばやまぬ攻撃精神の顯現である。

而かも、この攻撃精神は、必然の事實として、必勝の信念を生み、こゝに、卓拔なる指揮統帥、精練なる術力、新鋭優秀の機力等の諸要素と合致して、信仰の域にまで到達してゐる。必ず撃つ、必ず勝つ、絶對不敗、絶對勝利——實にこの信念は全海軍鐵石の團結の上にうち建てられ、その用兵者たると技術家たるとを問はず、あらゆる部門、あらゆる任務が文字通り渾然たる一體となつて、この信仰的信念のもとに、その本務に邁進してゐるのである。

かつて、かの日露戰爭に於て、わが艦隊は、敵魚雷のため、「初瀬」をはじめ計三隻の戰艦を一擧に沈められたことがあつたが、この時にあつて、東郷司令長官は、あくまで攻勢積極を堅持し、攻撃に次ぐに攻撃を以て積極的作戰を敢行し、以て士氣を鼓舞すれば、麾下の將兵また必勝の信仰に燃えて善戰敢闘、つひに禍を轉じて福となしたるが如きは、もとより長官東郷大將の用兵よろしきによるとはいへ、また、たしかに將兵の必勝信念が信仰の域にまで達して居り、いかなることあるも敗れず、必ず勝つとの信仰に燃えてゐたからである。

しかしながら、近代の海戰に於ては、戰闘の或る時期に到れば、攻撃と防禦とは形の上に於てこれを明確に區分することが困難であり、戰術と戰略との限界も、新兵器——特に航空機、潛水艦の發達以來、之を明白に定め得ない場合が多く、而してまた、攻撃も終始一貫攻撃のみを續行するとは限らず、防禦も亦徹頭徹尾防禦のみに專念するわけもないので、結局、攻撃か

防禦かの區分は、その構想する戰略的意思が、積極的であるか、消極的であるかによつて決する外はない。即ちこの場合に於ても、わが海軍の攻撃精神は、その戰略的意思に於てあくまで積極であり、あくまで旺盛なる攻撃である。

總じて、歐米諸國は、この攻勢守勢の利害得失を仔細に比較研究し、守勢の利點もあはせをさめんとする傾向にあるが、帝國海軍は、あくまで旺盛なる攻撃精神を重視し、戰闘に防禦なし、攻撃こそ最良の防禦なりとなし、所謂索敵必戰を教へ、更に進んで見敵必殺主義となることと、ハワイ、マレー沖、スラバヤ沖等の海戰に於て明らかである。そしてこゝに、歐米戰術の到底理解し得ざる、あくまで日本的なるわが海軍獨自の戰法がある、面目がある。

一、世界に冠絶せる猛訓練

帝國海軍は、支那事變勃發までの十數年間、幾多變轉せる世相のうちにありながら、まつたく靜まりかへつてゐた。少くも、外觀はさう見えてゐた。されば國民一般も、海軍への關心に於て聊か缺くるところなきを得なかつたが、果然、支那事變の勃發となり、ひいて戰禍の上海に及ぶや、かの有名なる渡洋爆撃は、大暴風をついて敢行され、俄然國民はこの海鷲の壯擧に眼を瞠つた。爾來國民一般も、默々として行はれた海軍各部隊の猛訓練に、異常の關心を持つに至り、更に今次の海戰によつて、こゝにはじめて猛訓練の實體に接し、今更の如くそのたふ

とき努力と犠牲とに感謝崇敬の念を禁じ得ないのである。

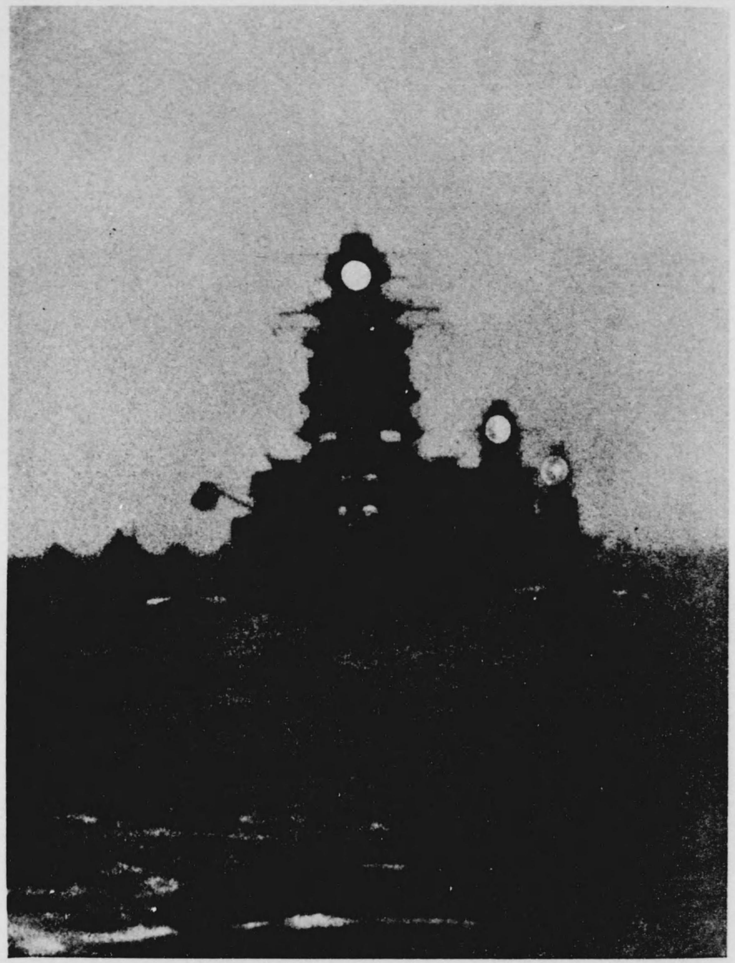
然らばその世界無比の猛訓練とは、如何なるものか。記述の便宜上、艦隊、主力艦（巡洋艦）驅逐艦　潛水艦　航空隊等の諸項に分ち、以下、之を詳述する。

艦隊

艦隊訓練は、一月下旬より四月までを第一期訓練とし、六月より八月までを第二期訓練とし、而して後、大演習となり、十一月を以て、その年度の行動を終るのであるが、その訓練は、綜合訓練と各部訓練とに分れ、而かもこの兩者を一體として該年度内に完成せしむることを目標としてゐるため、いきほひ、非常なる猛訓練とならざるを得ない。

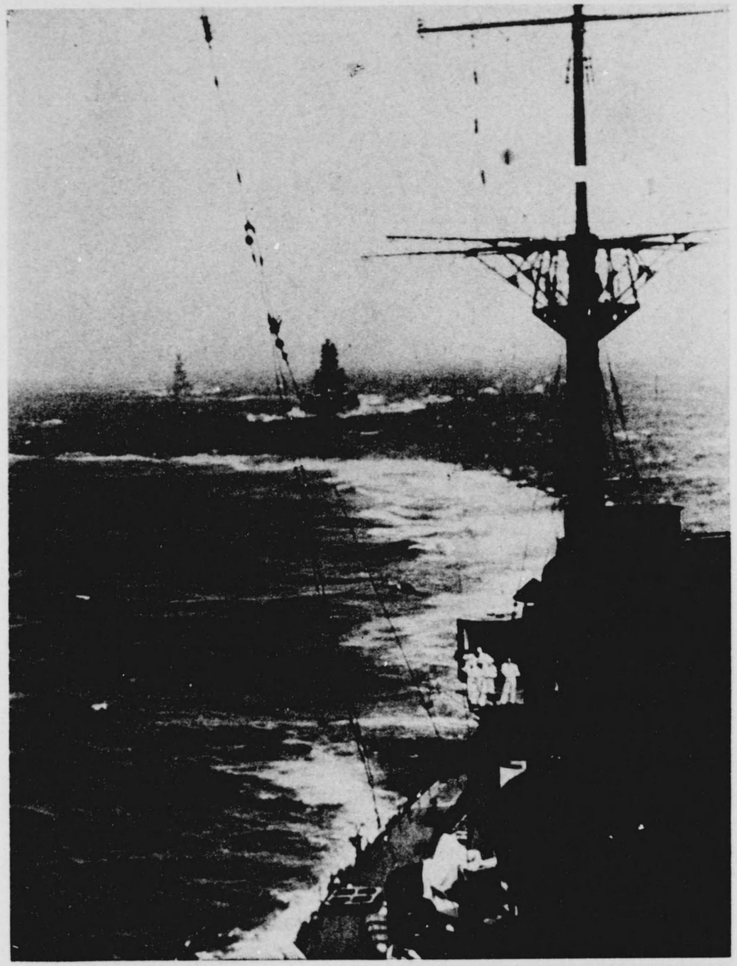
加ふるに、日に月に進歩發達する兵器とこれに應ずる戰術の變化改新があるので、如上の訓練時期區分も、事實に於てはなきも同然、一月下旬、母港を出發すれば、その後一年の大部分が、猛烈なる訓練に費され、その間の休養と云へば、月餘の訓練後に與へられる僅々兩三日間に過ぎず、その他は、殆ど寧日なく、演習につぐに演習、訓練につぐに訓練の連續である。

しかも、わが艦隊は、飽迄、治にゐて亂を忘れざる精神を堅持し、いかなる猛訓練をも物ともせず、如何に峻嚴なる命令も躊躇なく行はれる。

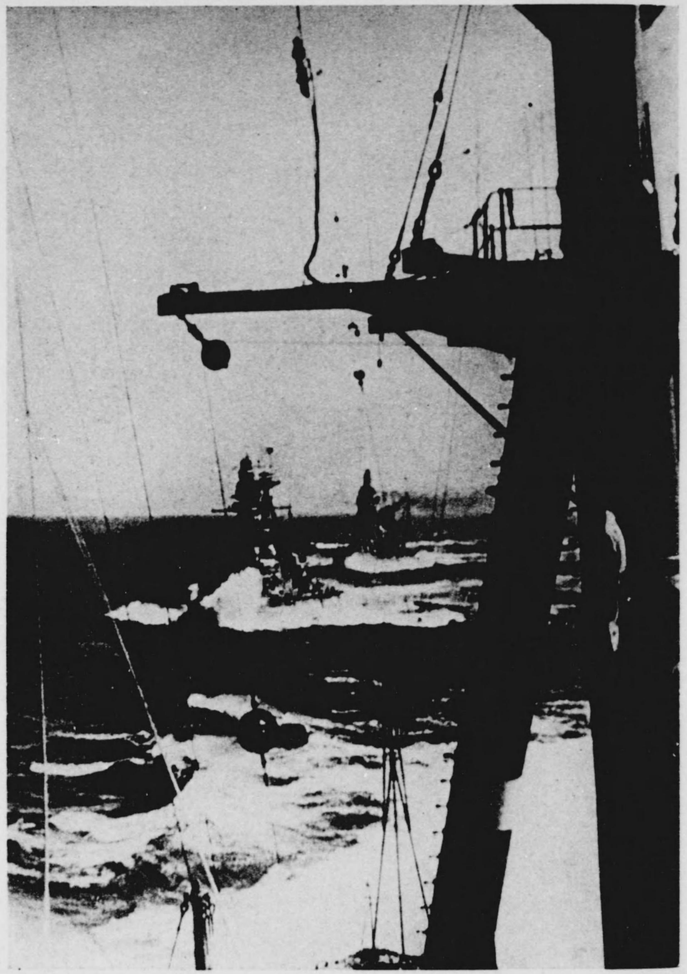


堂々暮薄の洋上を征く我が艦隊

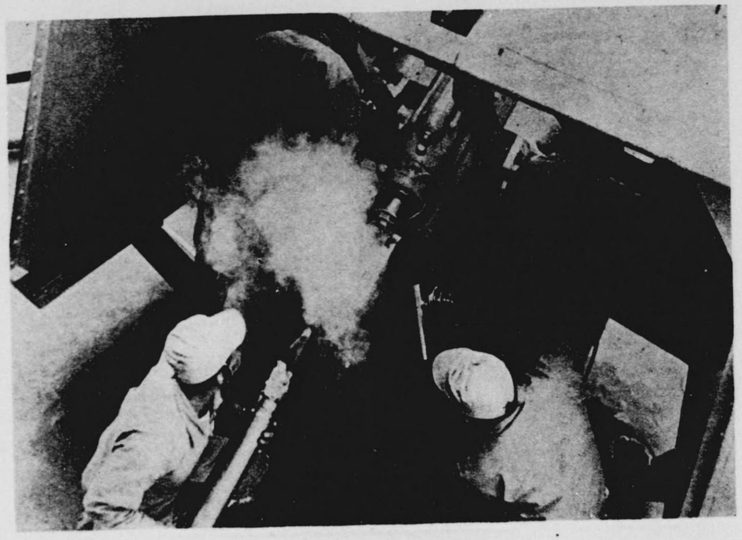
（寫眞　九十六）



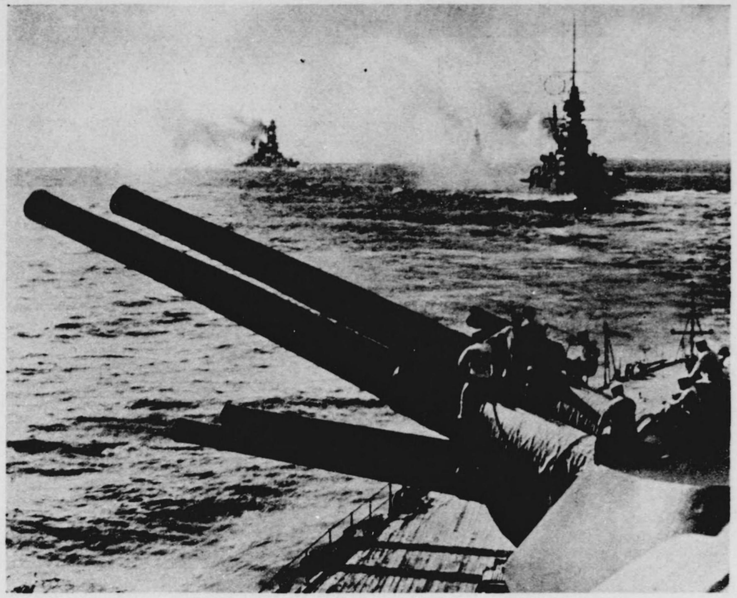
磨鍊隊艦の「戰實即練訓」



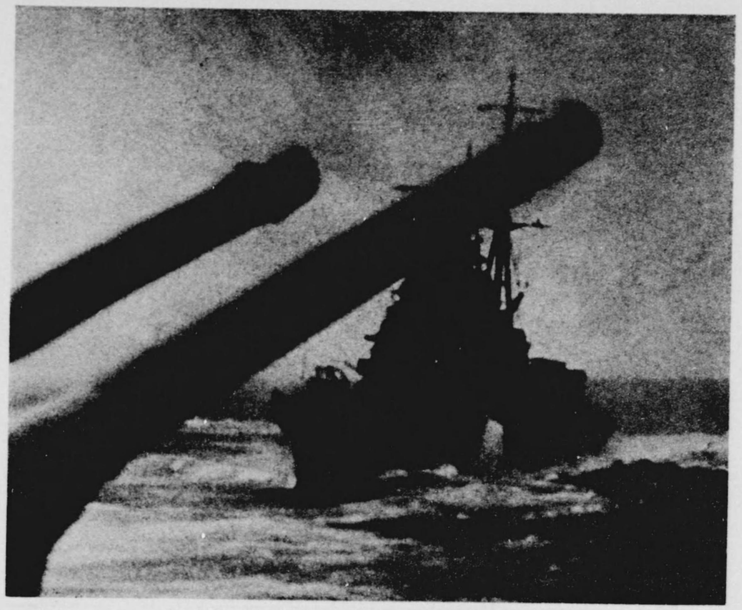
練訓隊艦てつ鐵を濤怒



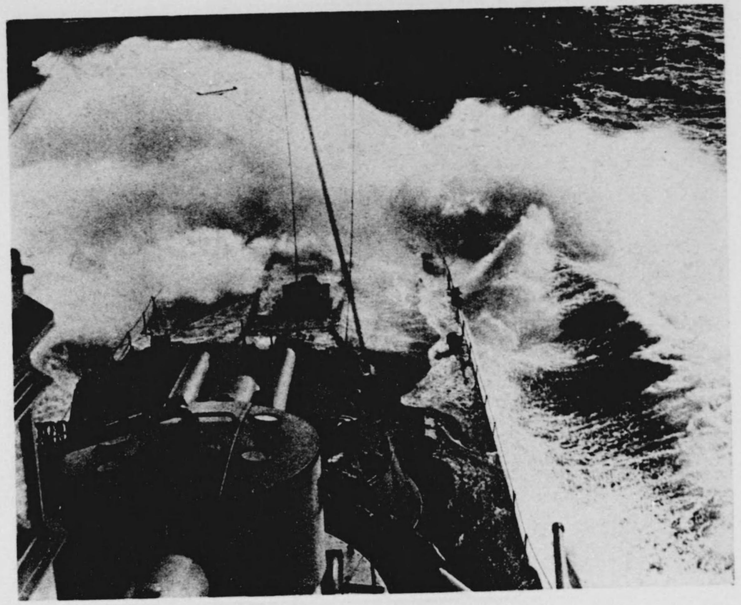
一發必中の實彈射撃



洋上萬里酷熱下の猛訓練



艦隊主力の戰鬪演習



全速怒濤を蹴つて驀進する驅逐艦

訓練　進航中の艦砲操作

（寫眞　百三）

この、治にゐて亂を忘れざる海軍精神は、もとより、軍人勅諭に根源すること勿論であるが、勅諭の御精神に基づいて、この精神を徹底せしめ、以て之を海軍精神の根幹推進にまで深化したものは、かの日露戰後に於ける「東郷訓辭」と、之を今日の狀態にまで具現した先輩の努力とである。卽ち、東郷大將は、日露戰爭の終熄と共に、威名武勳竝び輝ける聯合艦隊を解散するにあたり、左の如き告別の訓辭を朗讀した。

二十閱月ノ征戰已ニ往事ト過ギ、我聯合艦隊ハ今ヤ其任務ヲ結了シテ、茲ニ解散スルコトトナレリ。然レドモ我等海軍軍人ノ責務ハ決シテ輕減セルモノニアラズ、此戰後ノ效果ヲ永遠ニ全クシ、尙益〻國運ノ隆昌ヲ保持セン人々ハ、時ノ平戰ヲ問ハズ、先ヅ外衞ニ立ツベキ海軍ガ常ニ其武力ヲ海洋ニ保全シ、一朝緩急ニ應ズルノ覺悟アルヲ要ス。而シテ武力ナルモノハ艦船兵器等ノミニアラズシテ、之ヲ活用スル無形ノ實力ニアリ。百發百中ノ一砲能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我等軍人ハ主トシテ武力ヲ形以上ニ求メザルベカラズ、我海軍ノ勝利ヲ得タル所以モ、至尊ノ靈德ニ由ル處多シト雖、抑モ亦平素ノ練磨其因ヲ成シ、果ヲ戰役ニ結ビタルモノニシテ、若シ既往ヲ以テ將來ヲ推ス時ハ、征戰熄ムト雖、安ジテ休憩スベカラザルモノアルヲ覺ユ。惟フニ武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戰爭ニシテ、時ノ平戰ニ依リ其責務ニ輕重アルノ理ナシ、事アレバ武力ヲ發揮シ、事ナケレバ之ヲ修養シ、終始一貫、其本分ヲ盡サンノミ。過去一年有半彼ノ風濤ト戰ヒ、寒暑ニ抗シ屢バ頑敵ト對シテ生死ノ間ニ出入セシコト、固ヨリ容易ノ業ナラザルモ、觀ズレバ是亦長期ノ一大演習ニシテ、之ニ參加シ幾多啓發セルヲ得タル武人ノ幸福比スルニ物無ク、豈之ヲ征戰ノ勞苦トスルニ足ランヤ。苟クモ武人ニシテ治平ニ偸安センカ、兵備ノ外觀巍然タルモ

宛モ砂上ノ樓閣ノ如ク、暴風一過、忽チ崩倒スルニ至ラン、洵ニ戒ムベキナリ。

昔者神功皇后三韓ヲ征服シ給ヒシ以來、韓國ハ四百年來我統理ノ下ニアリシモ、一度ビ海軍ノ頽廢スルヤ、忽チ之ヲ失ヒ、又近世ニ入リ德川幕府治平ニ狃レテ兵備ヲ懈レバ、學國米艦數隻ノ應對ニ苦シミ、露艦亦千島樺太ヲ覬覦スルモ之ト抗爭スル能ハザルニ至レリ。翻テ之ヲ西史ニ見ルニ、十九世紀ノ始ニ當リ、ナイル及トラフアルガー等ニ勝チタル英國海軍ハ、祖國ヲ泰山ノ安キニ置キタルノミナラズ、爾來後進相襲デ能ク其武力ヲ保有シ、世運ノ進歩ニ後レザリシカバ、今ニ至ル迄、永ク其國利ヲ擁護シ、國權ヲ伸張スルヲ得タリ。蓋シ此ノ如キ今古東西ノ殷鑑ハ、爲政ノ然ラシムルモノアリト雖、主トシテ武人ガ治ニ居テ亂ヲ忘レザルト否トニ基ヅケル自然ノ結果タラザルハナシ。我等軍人ハ深ク此等事例ニ鑑ミ、既有ノ錬磨ニ加フルニ戰後ノ實驗ヲ以テシ、更ニ將來ノ進歩ヲ圖リテ時勢ノ發展ニ後レザルヲ期セザルベカラズ。若シ夫レ常ニ聖諭ヲ奉體シテ孜々奮勵シ、實力ノ滿ヲ持シテ放ツベキ時節ヲ待タバ、庶幾クバ以テ永遠ニ護國ノ大任ヲ全クスルコトヲ得ン、神明ハ唯平素ノ鍛錬ニ力メ、戰ハズシテ既ニ勝テル者ニ勝利ノ榮冠ヲ授クルト同時ニ、一勝ニ滿足シテ治平ニ安ンズルモノヨリ、直チニ之ヲ褫フ。古人曰ク、勝テ兜ノ緒ヲ締メヨト。

何といふ含蓄に富める大文字であらう。言々句々、躍動し來つて、犇々心奥に迫るものがある。曰く「武力ナルモノハ艦船兵器ノミニアラズシテ、之ヲ活用スル無形ノ實力ニアリ」曰く「百發百中ノ一砲能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我等軍人ハ主トシテ武力ヲ形以上ニ求メザルベカラズ」曰く「武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戰爭ニシテ、時ノ平戰ニ依リ其責

務ニ輕重アルノ理ナシ」曰く「過去ノ一年有半……觀ズレバ是亦長期ノ一大演習ニシテ……豈之ヲ征戰ノ勞苦トスルニ足ランヤ」曰く「神明ハ唯平素ノ鍛錬ニ力メ、戰ハズシテ勝テル者ニ勝利ノ榮冠ヲ授ク……」

さながら、四十年前、既に今日あるを期して諭せるの觀がある。

帝國艦隊の猛訓練は、實にこの「東郷訓辭」を體して、實行されるのである。

元來、戰場にはたらく戰爭心理なるものは、おほむね、平常心理よりもマイナスであるが、このマイナスを除去するには、訓練によるより外はない。而してその訓練にも、精神訓練と技術上の訓練とがあり、この兩者が完成されゝば、實戰となつてもマイナスとならず、平素の訓練と同樣の心境を以て戰に臨み得るやうになり、生來の弱者をも強者となすことが出來るのである。

然らば、謂ふところの艦隊猛訓練とは何を意味するか。若し、之を、月月火水木金金の言葉によつて表現される不休不斷の訓練のみを意味すると解するものあらば、それは大いなる誤りである。「東郷訓辭」が、艦隊訓練に望む眞意は訓練卽實戰の精神である。卽ち、訓練は單に之を訓練として了らしめず、飽迄之を實戰として錬磨する處にこそ、帝國海軍獨自の訓練が存在する。

然るに、これを世界列强海軍の訓練に見れば、彼等の訓練は文字通りの訓練であつて、それ

以上に出でず、その目標とするところも、實戰ではなくて、單なる成績――つまり艦隊成績の向上にある。畢竟彼等の目標とする成績の向上とは、例へば、競點射擊乃至一般のスポーツの如く、たゞ成績を競ふにとゞまり、ひいては、成績のための訓練、訓練のための訓練に墮さざるを得ない。茲に、わが海軍の訓練と列强海軍訓練との根本的な差異がある、懸隔がある。

而して、この訓練卽實戰の猛訓練を驅つて、更に一層徹底せしめ、訓練をして實戰以上たらしめたのは、かのワシントン軍縮會議に於て、我に迫つた英米の暴戾である。

すなはち、ワシントン會議に於て、わが國は、英米により、五、五、三、の比率を强制されたが、この時にあたり、加藤寛治大將は「艦船に制限はつけられても、訓練に制限はつけられまい」となし、昭和元年十二月、聯合艦隊司令長官に就任するや、文字通りこれを艦隊訓練に具現し、實戰より激しき訓練を以て、自ら計畫指導すること滿二年に及んだ。

旣にして、訓練卽實戰であり、訓練目標が實戰にある以上、これに隨伴する危險は當然のことであるが、盛夏に際し、南方の要地奄美大島に於て行へる耐熱訓練の如き、續いて起れる、美保ケ關沖夜襲訓練の衝突事件の如き、やむを得ざる出來事とは云へ、この艦隊訓練に捧げたふとき犧牲であつた。

而かも加藤寛治大將は、美保ケ關沖衝突事件の直後、その摩下に與へた訓示に於て、

「諸官はこの事の爲めに意氣沮喪することなく、ます〳〵最善をつくして、愈ゝ保安上敢感なる處置に修

熟すると共に、わが海軍の爲め、絶對必要なるこの戰鬪訓練に全力をつくすやう切望してやまぬ。」

と述べ、いよ〳〵この戰鬪訓練の徹底を期したが、一面、このたふとき犧牲に悲痛やるかたなく、一書を友人某氏に贈り、

「(前略)五三の比率に對する海軍將兵の悲憤は、遂に今回の一大犧牲を甘受せしむるに至り、吾人をして殉職者に尊敬の念を生ぜしめた。やむにやまれぬ武人の本懷とは、眞に今回の事故であらうと、返す〳〵も士氣の未だ衰へざるを喜ぶ」

と述べたと云ふ。以て、その戰鬪訓練の激しさを推し得べく、さきの東郷訓辭は、この加藤訓練によつてます〳〵その光彩を放つに至つた。

しかしながら、すでに其の訓練目標を實戰におく以上、實戰である限りその實戰目標は、更に極限されなければならぬ、換言すれば、戰鬪はたゞ漠然として戰鬪たることは出來ない、そこには必ず、その戰鬪の主體たる目標乃至相手方を必要とする。わが艦隊訓練も亦たしかにこの相手方卽ち對象を持つてゐた。

大本營海軍報道部課長平出大佐が、大東亞戰爭宣戰大詔渙發一ケ月目の記念放送に於て、

「ハワイ海戰に參加した或る部隊の一部が、なつかしい某基地に歸港した時の話であるが、それを傳へ聞いた某基地の市民は、感激のあまり相抱いて泣いたと云ふことである。それは、その市民達が、戰爭の始まるまでと云ふもの、朝となく晝となく、夜となく、血ににじむ猛烈な訓練を續けてゐたのを誰れよりも

よく知つてゐたからである。そこの飛行場は、摺鉢の底のやうな處にあり、周圍は山また山の峨々たる峻嶺である。その峻嶺の上空から、眞逆樣に、所謂釣瓶落しの猛烈な急降下爆撃の訓練を毎日々々續けてゐたのである。しかもこの訓練は、朝市民がまだ起きぬうちから始まり、朝食は飛行機の中でとり、午前の訓練が終ると晝食を取りに歸つて來る。だが、この晝食も飛行機の中で食べる。夕食もまた同樣であつて、三度の食事を飛行機でとるといふくらゐ、時間を惜しんで、だゞ一途に、(敵を叩き落すまでは死なぬ)と云ふ信念の下に血みどろの訓練をしたのである。」

と述べてゐるのは、明らかにこの間の消息を物語るものである。何を相手方とし、誰れを對象として實戰的訓練をなしたかは、おのづから明らかである。

然らば、艦隊訓練を形成する主力艦、巡洋艦、驅逐艦、潛水艦、航空隊等の戰鬪訓練は如何にして行はれるか。以下順をおふて解説しよう。

主力艦(並に巡洋艦)

艦隊の根幹は主力艦にある。而して、主力艦の主力艦たる所以は、何よりも先づその砲戰威力にあるので、この任にあたる砲術長、射手、旋回手、測敵手、砲塔員、彈庫員、火藥庫員等は、射撃指揮官(砲術長)を中心として、正眞正銘、渾然一體となつてこれが操作に從ふのである。

云ふまでもなく、砲戰の要諦は、敵の機先を制すること、短時間に出來るだけ多數の命中彈を發射すること、而してこれを永く持續することにある。語簡なれどこれが實行は極めて難い。

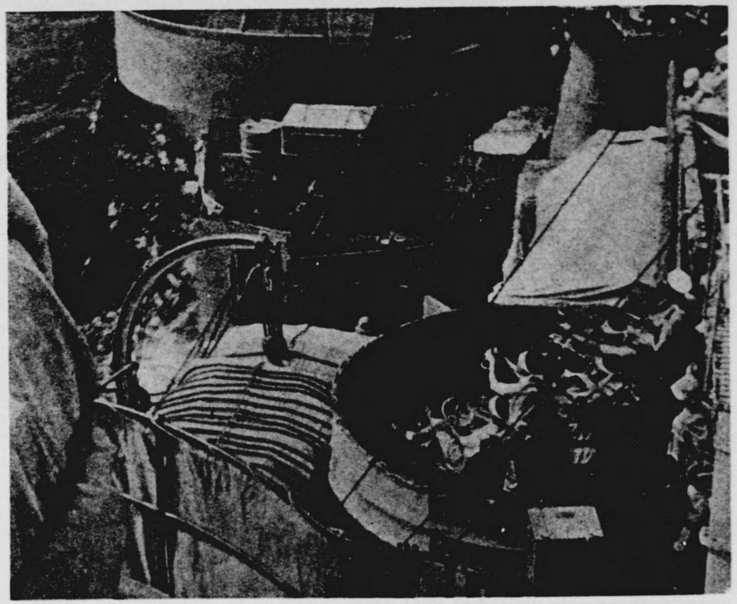
總じて、最近に於ける主力艦の主砲は、射程が非常に長く、隨つて、敵艦影が水平線上に露出するを待つて射撃するなどと云ふことは殆どない。即ち、煙突の煙、マストの尖端——その程度の發見によつて、一彈を射ち、而かもその初彈を絶對に命中させる。これが第一條件であり、若しこれが逆になつて、最初に敵の第一彈を受けんか、複雜微妙の機構をもつ戰艦は、そのいづれの部分に故障が起つても、爾後の戰鬪力を弱められること勿論である。故に、この初彈必中は絶對的である。

次いで、その要諦の一つなる、必中彈の持續、換言すれば、百發百中の繼續であるが、これとても、動搖常なき海上に於て、敵味方共に馳驅しあひながらの射撃である以上、先づ敵艦の距離、速力、進路の測定を要する。(これを測敵と云ふが) これを分秒の速さで行ひ、敵艦の來る位置を正確に測定すれば、直ちに先づ照準射撃、そしてその彈着を觀測し、修正して、よし、となると、いよ〳〵「射ち方始め」であるが、この射ち方はじめの號令を下すまでの砲術長の苦心は到底筆舌のつくすところでないと云ふ。即ち、刻々測敵長の報告する射撃準備資料(射撃諸元)と、砲術長自身の彈着觀測、或は友軍機による補助觀測——是等を綜合判斷して各砲臺へ號令を傳へる。

射手は方位盤を睨みつゝ左手で砲身の仰角修正のハンドルを廻し、旋回手は砲身を左右へ修正する。以上の氣合合致したる瞬間、間髪をいれず「射ち方始め！」で、〇〇サンチ〇門の巨砲一齊に火を吐くのだ。隨つて、この間の技術には、文字通り技神に入る底の熟練が要求されるのである。

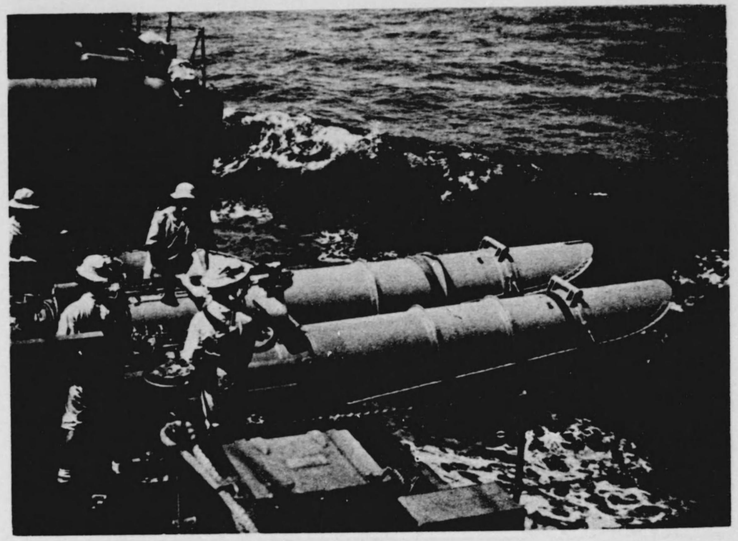
主力艦の砲術長になるには、まづ驅逐艦の砲術長からはじまつて、輕巡の測敵長、發令所長と、血のにじむやうな苦心と過程とを經て、中巡、大巡の砲術長をつとめあげる、この間の精進十五年乃至二十年、朝食前の練習から夕食後に至るまで、一般士官が柔劍道をやつてゐる別科時間にも、砲塔にへばりつき、さて夜になれば探照燈の光りをかけて夜戰の訓練である。而かもこの間、また絶えず砲の整備につとめ、一滴の油、一本のネヂにも細心な注意を拂ひ、微妙な神經をはたらかし、あらゆる場合に、すべてを知悉して、これをわが五體の如く自由自在に操作し得るまでの錬磨を積むのだ。寢てもさめても、頭は、彈をあてることばかり、船さへ見れば、本能的に、「目測距離何米」と云ふやうになつて來る。

また、射手は、一秒の十分の一ほどの速さで、而かも確實に引金を引かなければならぬ。ここにもまた一軍の勝敗が賭けられてゐるので、その訓練はこれまた言語に絶してゐる。彼等は一年に五六萬回引金を引く。そして二十年乃至二十五年の後、やうやく主力艦の射手となれるのだ。

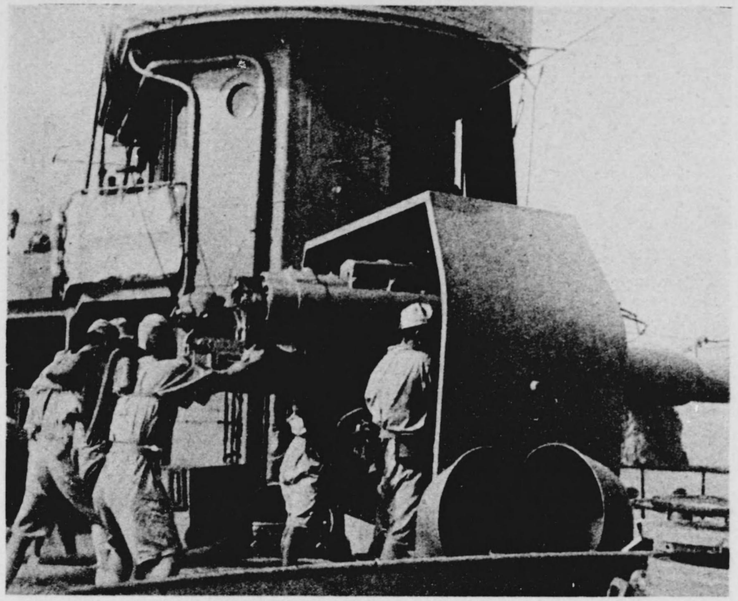


進航中の對空猛訓練

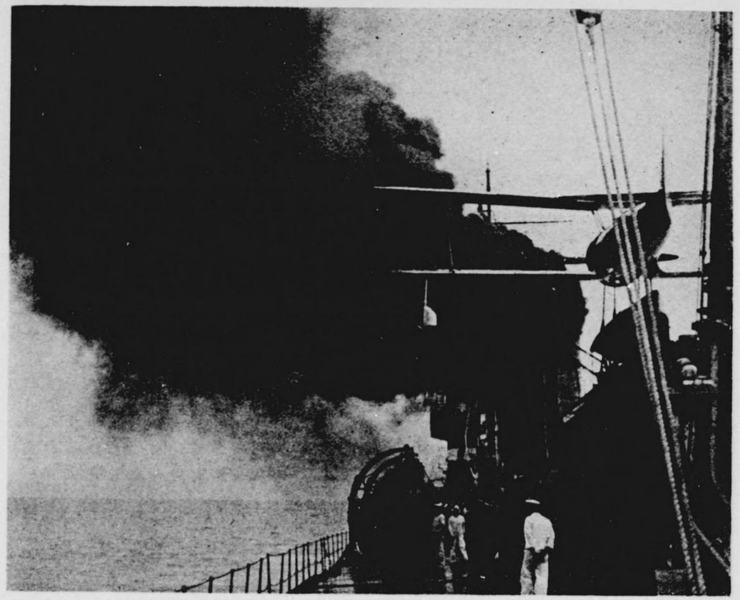
（四百　眞寫）



練訓射發雷魚るけ於に上海那支南

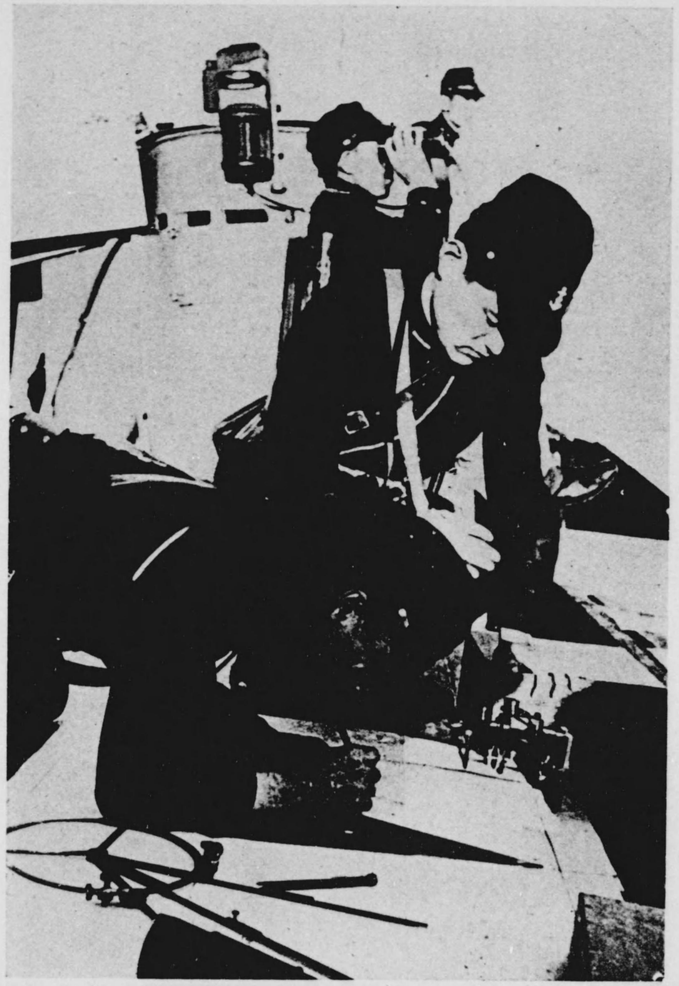


練訓鬪戰の砲備



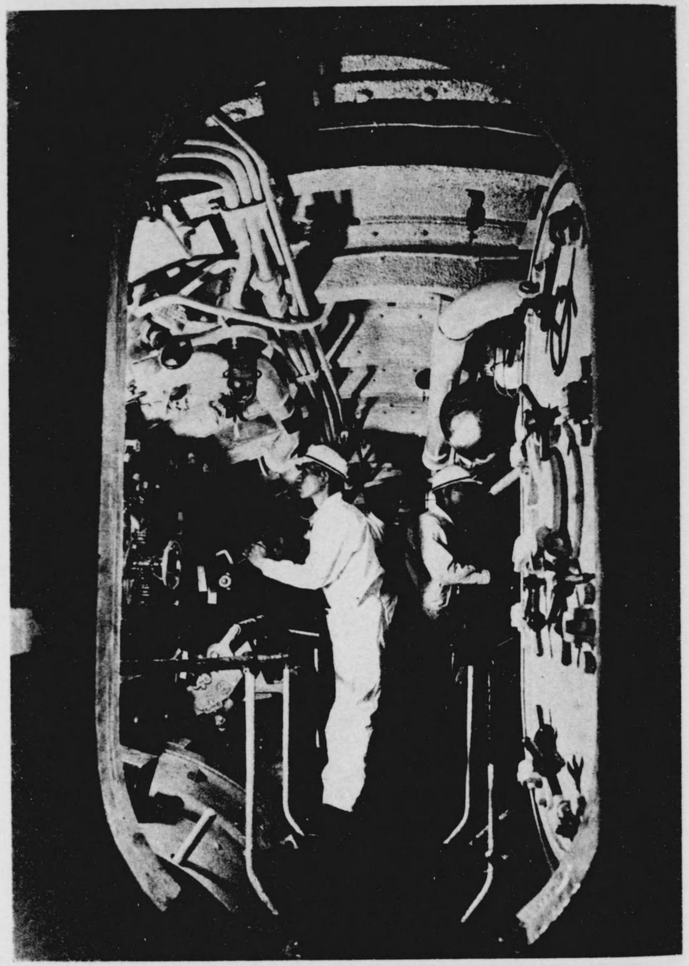
戰鬪配置の艦隊演習

心身錬磨の銃劍術

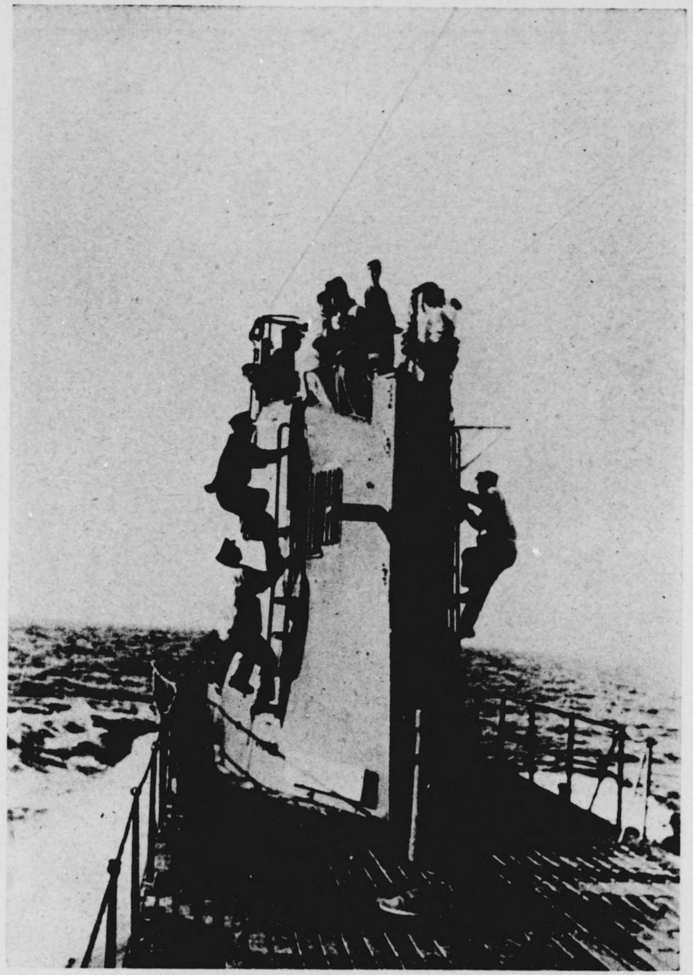


海上測定の我が艦艇

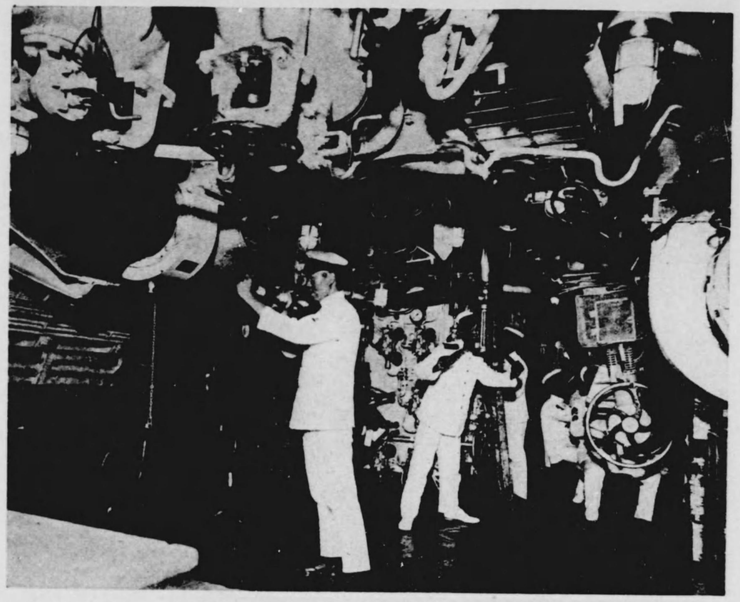
防毒面をつけて對空演習



酷熱の中に操作する潜水艦乗員



浮上航行する潜水艦の猛訓練



潜航中の艦内操作

（三十百　眞寫）

また、これを測敵手の例に見れば、ひまさへあれば、檣頭にのぼつて測距機を覗く。眼鏡のピントを合せてははづし、はづしては合せ、微頭微尾距離をよむ訓練、而かも、眼鏡の把挺を絶えず動かしてゐる結果は、右手五本の指先がつぶれて了ふと云ふ狀態である。

その他、砲塔員、彈庫員、火藥庫員の鍛錬もみなこれと同樣で、たとへば、砲塔員は實彈射撃の前日など、盛夏、百度以上の彈庫にありながらその準備のため一睡もしない。何故なら、この實彈射撃は、艦隊訓練年度終りの腕だめしとして、平素猛訓練の試驗をこの一回にかけてゐるからである。

即ちこの實彈射撃にあたつては、砲術長は、演習開始前、小さな撃針を一つ一つ明るみに出して點檢し、砲塔内の神棚に白鉢巻をそなへて全員默禱、その白鉢巻をしつかと巻いて射撃に出る。

こゝに至つては最早、演習などと云ふものではない、殺すか死ぬかの眞劍勝負、その一彈に全心全靈を捧げつくすのである。さればこの實彈射撃が終れば、全員、疲勞その極に達し、口もきけぬ程へト〳〵になるのであるが、更にまた猛訓練は、次年度演習を目ざして息つくひまもない――わが主力艦砲戰威力の世界に冠たる、また故なしとしない。大東亞海戰に於て、わが驅逐艦はその日頃の砲力を發揮する機會を得たが、主力艦はまだ其の砲戰威力發揮の機會を與へられぬ。しかしわが主力艦が、長き沈默を破つて火を吐く時こそ、米英全主力潰滅の日で

ある。

驅逐艦

驅逐艦の襲撃實況を見た飛行將校が述懷した。「これは飛行機よりも危險だ」と。何さま飛行機は、危險を感ずれば、上下左右に避けられるが、艦は、左右にしか避けられぬからである。また曰く「よく暗闇が見えるものだ」と。驅逐艦にとつて、夜襲は最も重要な任務なので、月なき闇夜、無燈の敵を追襲肉迫する訓練に於て、驅逐艦乘りは闇夜を見得るやうに眼を馴らすのである。

元來驅逐艦は、敵の虚をついて海上を疾驅し、又、魚雷、爆雷、大砲等によつて、主力艦を護り、敵の潛水艦及び飛行機の攻撃を防ぐ一方、出でては哨戒もすれば、敵主力への奇襲も敢行するといふ、さま〳〵の任務と能力を持つてゐるので、驅逐艦水雷戰隊の訓練はまた格別である。

およそ、驅逐艦が、敵を必殺する方法と云へば、何よりもまづ敵に肉迫することであるが、しかしその肉迫の方法に於て、かつての水雷戰隊は、バラ〳〵に襲ひかゝつたのであつたが、今日では、敵の虚に乘じて一度にドツと襲ひかゝる包圍戰法をとつてゐる。然し、その時は、

敵も全速、我れも全速、われの全速を以て敵の全速に肉迫するのだから、其處にさま〳〵の困難と危險が伴なふ。たとへば、眞暗闇の海上に發見した敵影が、向ふを向いてゐると思ふと、意外にも實は此方を向いてゐて、而かも急速に此方に近づいて來ると云ふやうな危險の事がしばしばある。そしてこの場合、敵が主力艦であつたら高速三十ノツト、此方も同じ三十ノツトの高速だから、その走り寄る速さは物凄く、分秒瞬電の差で、驅逐艦は主力艦の巨體に衝突しなければならない。事實、かう云ふ種類の犧牲も度々あつた。

また、驅逐艦が敵に近づかうとすれば、敵は探照燈で目つぶしをしようとする。それを避けつゝ而かも敵を的確に把握する。この瞬間の判斷は、平素からの眼の訓練で、これを海眼と云ふが、つまりこれは、一つのかんである。そして、そのかんを修得するには、實驗もない理論もない、たゞひたむきな訓練によるより外はない。

市村久雄中將の談によれば、「土佐沖の夜襲演習の時、こちらが全速で走つてゐると、突如、闇の中から敵驅逐艦が全速で走つて來た。向ふも驚いたらしいが、此方は横からどてツ腹を突き刺されて了ふ、アツと云ふ瞬間、無意識で舵をとつたので、全速を出してゐる此方の艦の艇の發射管より高く立つてゐる波の上に、敵艦の艏が乘つて、次ぎの瞬間、まさに、のしあげる寸前で、すれちがつたことがあるし、また、これは畫だつたが、舷々相摩して驅逐艦がすれちがつた時、アツと云ふ間に、兩艦の甲板上、砲や發射管わきにゐた兵が、相互の波でザザーツ

とさらはれたこともあつた」（朝日新聞所載）

かの美保ケ關沖の犧牲――輕巡と驅逐艦蕨との衝突事件や、北海道沖に於て、猛烈な低氣壓と戰つて出した殉職事件など、みなかう云ふ猛訓練の貴い犧牲なのである。

尤も、かくの如き戰鬪訓練は、艦種の何たるを問はず、みな、異常なる緊張を以てなされる電擊的動作ではあるが、就中、最も俊敏を要する驅逐艦に於て特にさうなのである。訓練の苦しい所以も亦こゝにある。

それにも拘らず、乘員達が、その猛訓練に一言の不平ももらさないのは、實に彼等の指揮官こそ、精神的にも肉體的にも、艦中最大最苦の勞働をつゞけてゐると云ふ事實を、乘員達は知り過ぎる程よく知つてゐるからである。實際、一度出航ともなれば、指揮官は「自ら艦橋に立つて、飯を食ふひまもなく、何十年驅逐艦乘りをしてゐても、寢卷を着ることもなく、疲れゝば外套をかぶつて、艦橋の椅子にうたゝねするのがせい〳〵である。而かもそれが二晝夜、三晝夜と續く爲めに、眼は充血して眞赤になり、足の裏は膨れて踏みつける度びに非常な疼痛を覺えて來る」と云ふのだが、しかし乘員一同が、この血の滲むやうな勞苦の狀を、皆まざ〳〵と目擊して居るがために、こゝにはじめて、指揮者の一擧一動が、闇の中にも、無言のうちにも、乘員全部に對し、打てば響く以心傳心が生れるのである。

【註】美保關沖衝突事件

昭和二年八月二十五日海軍省公報

昨二十四日聯合艦隊夜間演習中、午後十一時二十分、美保關（島根縣）の北東、約二十マイルの地點において、第五戰隊軍艦神通と第一水雷戰隊驅逐艦蕨と衝突、蕨は約十五分の後沈沒し、神通は前部錨鎖庫に浸水あり、軍艦金剛に曳かれ舞鶴に回航、又第五戰隊軍艦那珂は驅逐艦葦と觸衝、葦は船體の最後方の一部を切斷せられしも、應急修理の上、軍艦阿武隈にて曳船、那珂は損害輕微、自力にて舞鶴に回航中である。又、那珂御乘船中の博義王殿下には御異狀あらせられず。

聯合艦隊司令長官加藤寛治大將のステートメント（昭和二年八月二十六日午前九時發表）

今回の事件に多數の部下と艦とを損傷したことは、長官として恐懼の至りである。しかしながら、こゝに考へて頂きたいことは、我々としては、ベストをつくして訓練をやつた。最も眞劍な訓練と絕對保安とはなか〳〵兩立しがたいものである。戰艦も驅逐艦も近來夜間戰鬪の最新戰術をつくしてやつて居つた。從つて困難な作業はもつとも眞劍に行はれてゐた。一秒間二十米の高速力を出して、アッと思つた刹那は三十米と云ふ有樣であつた。故に一面また今度の遭難は、不可抗力と云ひ得るものである。尙遭難者捜査については全力をあげてつとめてゐる。

聯合艦隊司令部發表（昭和二年八月二十六日）

遭難現場は水深八十尋、美保關地藏崎北方二十海里の海面にして、衝突當時に於ける遭難艦は、總員夜間戰鬪配備についてゐたので、機關部員を除く他の者は全部、あるひは艦橋にあるひは大砲に、あるひは水

雷發射管について甲板作業に從事してゐた關係上、蔵にあつては、衝突と同時に誘發せるかまの爆發にあつて、星一つなき暗夜波浪激しき海上に一大火柱が立つたかと思ふやいなや機關部員は軀體の兩斷と共に全滅し、その他は殆ど海中にはね飛ばされたものゝ如く、葦は衝突と同時に切斷して沈沒した。後部にありしもの全部その職に殉じたもので、潛水艦等の場合と異り、乘員は多く離散漂流するを常とする關係上、附近海面を極力搜査しても沈沒艦を引上げても、艦内に死體は殘つてゐないと認めるのが妥當だと思はれる。即ち遭難者は粉微塵になつて四散した樣子で、全然不明となり、漂流物を引上げることは出來るが、沈んだ死體が浮き揚がるのは、二十四時間後だから現場の海岸から北上する微弱な潮流に沿ふて係員目下見張中である。

潛水艦

海軍艦船の運航は、いづれも複雜精密な機械によつて組立てられてゐるが、就中、潛水艦は海軍機械科學の精粹を集めてゐると云つても、過言ではなからう。

事實、艦内すべてが機械であり、何處へ行つても、ベントまたベントである。試みに潛水艦訓練――戰鬪訓練中に於ける艦内狀況を摘記して見ればかうである。

「司令塔下の發令所では、水雷長が、眞水、重油、食糧等の重量表を凝視しつゝ、各タンクへの移水を命じて居り、横舵手と潛航手は、得度計を見つめてつゝ舵を握つて居る。傳令は、

ひつきりなしに艦長の命を傳へ、その命令のたび毎に、ベントが開閉され、またその報告は、發令所を通じて、艦長に報告される。前後部の魚雷發射管室では、聯管長が、發射部員とともに、一發必中を祈りつゝ發射管を睨んで居り、電動機室では、電機長が、急がしく部下の間をかけまはつてゐる。」

朝、日の出前に潛航して、日沒後に浮上する生活が、幾十日と續く。勿論、その間一切太陽を見ることが出來ない。――潛水艦乘員の忍苦も亦筆舌につくしがたいものがある。

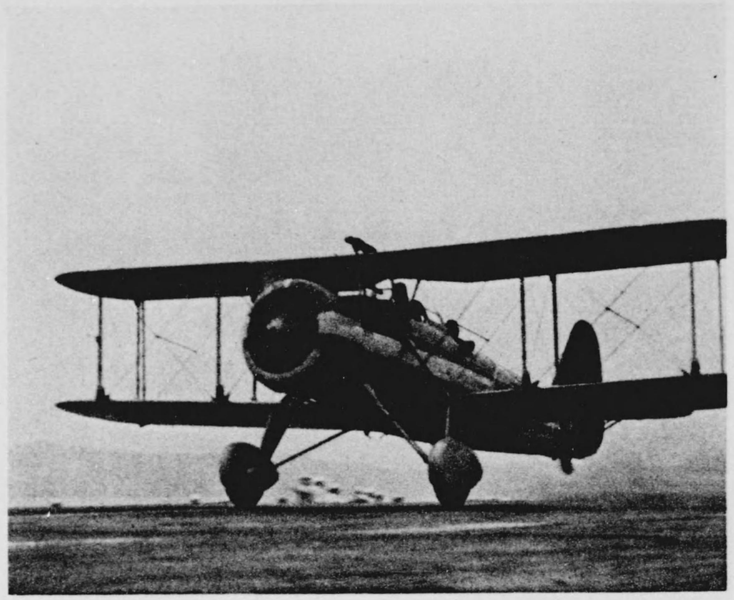
こゝに帝國海軍潛水艦の今日に至る過程を顧みれば、今日までに、およそ三つの段階を經てゐる。

即ち日露戰爭以後、大正に至る頃までがその第一期、次ぎに、潛水艦が、實用として、艦隊と共同動作をなし得るに至つた時代が第二期、そしてその後、潛水艦が兵術上の一要素として獨立した時代即ち今日が第三期とならう。而して、その第一期時代の訓練と云へば、朝、軍港を出て港外で訓練し、夕刻に歸ると云つた日歸り訓練に過ぎなかつたと云ふが、第二期時代に及んでは、艦も大きくなり、その訓練も艦隊と一緒になり、更に第三期の今日では、大洋に於ける獨立訓練となつてゐる。

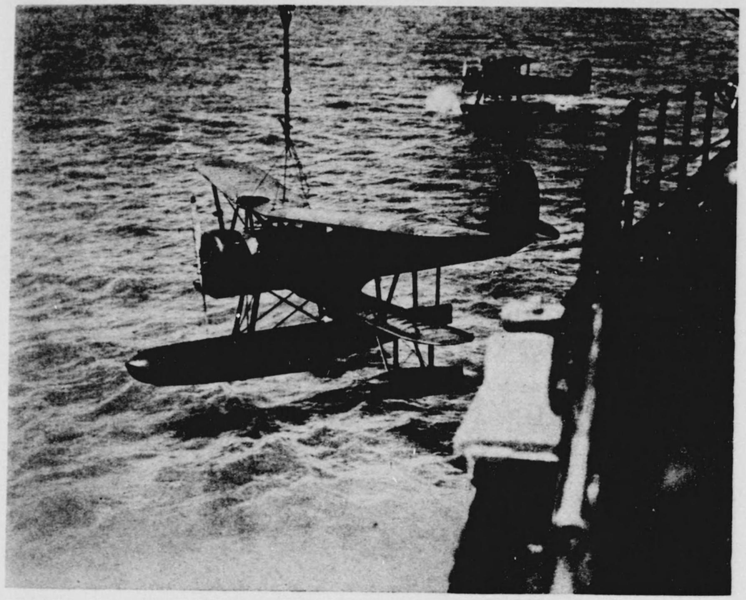
しかし、わが潛水艦は、この第一期以來大東亞戰爭の勃發に至るまで、驚くべき猛訓練を積みつゝあつたにも拘らず、その實戰威力を發揮する機會を與へられなかつた。即ち、第一次世

界大戰に於ても、潛水艦は出航準備だけで中止となり、大正四年、かの二十一箇條條約を支那に提出したときにも、潛水艦だけは、取殘されて、全艦隊の出動を見送つたに過ぎず、近く支那事變の勃發に際しても、潛水艦だけはその壯途に加はらなかつた。けれどもなほ、わが潛水艦は、潛水艦の出動する時こそ國家命運の賭けられる秋なりと覺悟し、いよ〳〵ます〳〵猛訓練に精進したのであつたが、時は來たる今次大東亞戰爭の勃發——眞にこの一戰こそ、文字通り帝國命運の賭けられる時であつた。果然、わが潛水艦は、敵が誇稱する航空母艦レキシントンに立向ひ、海底にあること〇〇日、幾重にも取卷く敵艦艇の警戒線を突破して、必中の魚雷よく巨艦を海底の藻屑とした。

わが潛水艦發達途上の犧牲として、明治四十二年十二月に起つた佐久間艇長の六號艇事件及び豐後水道衝突事件は既に餘りに有名であるが、六號艇にはその前年にも同じやうな事件が起つたのである。當時艇長心得であつた寺島讓中將(現遞相)の談によれば「佐久間艇長の六號艇は、神戸沖に催される觀艦式に參加すべく、播磨灘を航行してゐたが、ひどい荒天のため航行することが出來ず、やむを得ず一旦、小豆島に避難した。しかし觀艦式の時間に遲れてはと、無理をおして出航した。然るに荒天更に甚だしく、天幕は破れ内燃機部に水が入る、そこで母艦豐橋が曳航しようとすれば綱が切れると云ふ始末、遂に手のつけられぬことになり、やむなく波のしづまるまで深度六尋の鹿ケ瀬の淺瀨に潛沒した。するとそこは潮流が速いので艇は沈



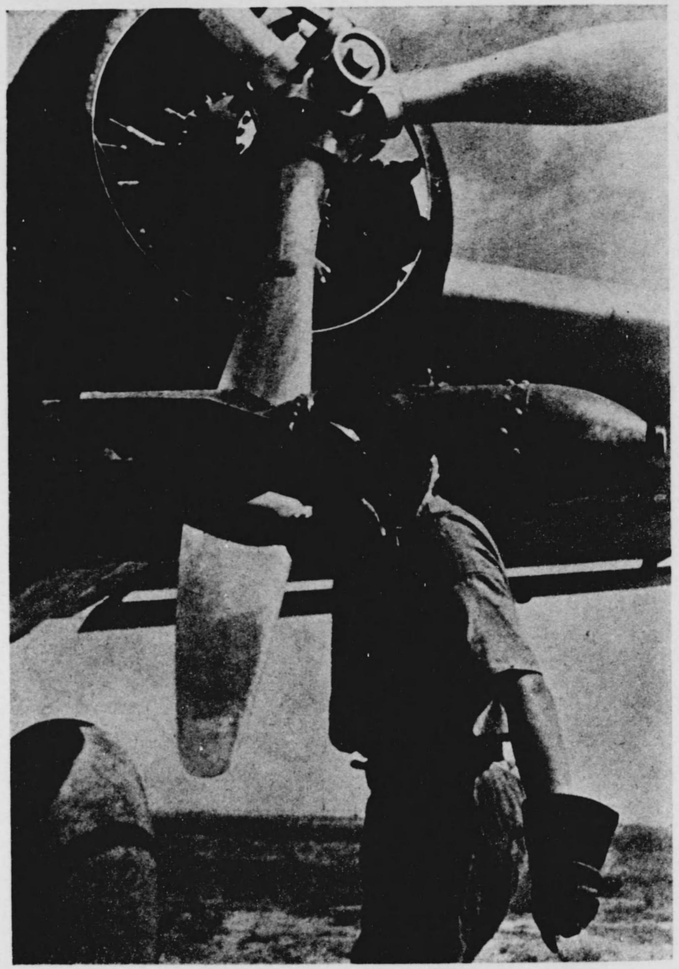
海鷲猛訓練に赴かんとす



機上水の始開練訓

海驚の機銃射撃

撓みなく猛訓練は續く水上機の出發



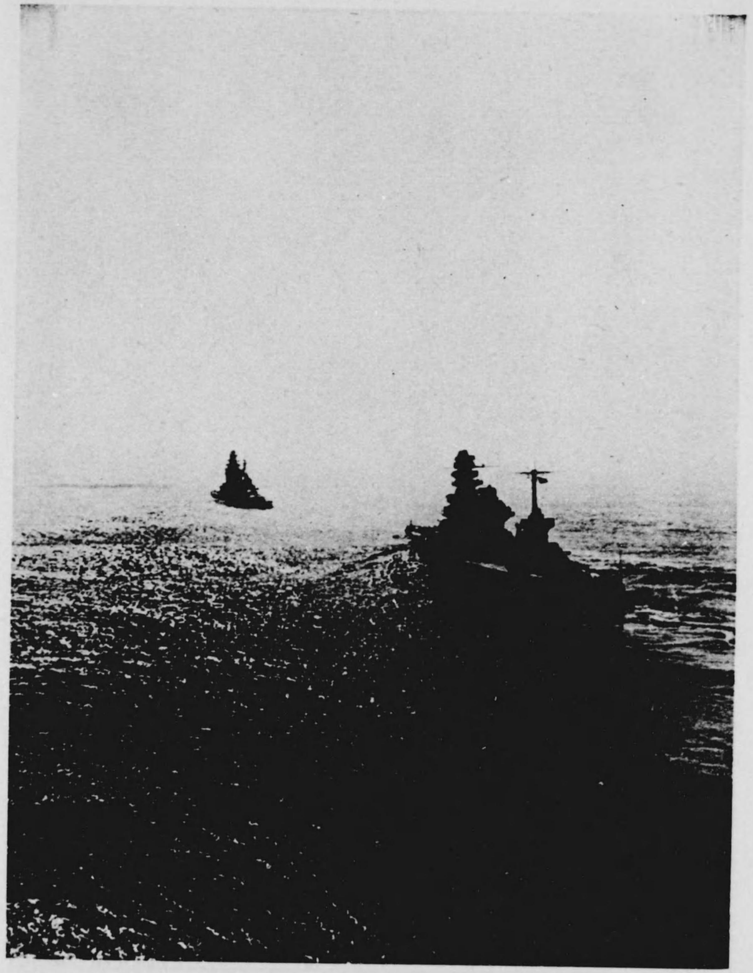
爆撃訓練に巨弾の積み込み

夕闇に鵬翼を休む

（十二百　眞寫）

猛訓練終へて宿舎に向ふ

（九十百　眞寫）



艦力主が我ろす港歸

（寫眞　百二十一）

下しながらグン〳〵流され、六尋どころか、いくら沈んでも底につかず、驚いて急速浮上しようとしたが、これも徒勞に終り、つひに艇は二十六尋まで沈んで漸く海底にとまつた。當時の艇の沈下限度は百フイートだつたので、壓搾空氣を全開しても、なほ水壓で艇は歪んで楕圓形になつたりして、何時つぶれるか知れない。ビッチ・チエンは張り切つて、モーターもポンプも動かず、手押ポンプで水を出しても却つて水は增すばかり、艇内の電燈は全部消え、眞暗闇の中で、乘員十一人は懸命の努力を試みたが無駄であつた。かくて呼吸は困難になり、暗闇の艇内には苦しさうに彈む呼吸が滿ちてゐる。死は、疾うに覺悟してゐるが、艇を救ひたい一心から、海底の暗闇の中を手さぐりでなほも沈着な努力をつゞけた。ところが沈下後五時間を經た夜の十時十七分、突然『ポンプきゝます！』と云ふ叫びが艇内に響いた。瞬間、猛烈な速さで艇は浮上し、それから一晩海上に漂つて救はれた」と云ふのである。

かゝる犧牲があつて後、從來の潛水艇は潛水艦となり、第一次世界大戰に於ける獨逸潛水艇の活躍を經て、わが潛水艦訓練はます〳〵猛烈さを加へ、當時第二艦隊參謀たりし加藤寛治大佐の指揮下に、帝國潛水艦の名は、漸く世界にとゞろいて來た。而かも、ワシントン軍縮會議以後、五、五、三比率の劣勢を補ふ道は、潛水艦作戰にあり、との目標のもとに、猛訓練は更に一層の拍車をかけ、從來晝のみに限られてゐた行動を晝夜に擴大し、太平洋上、寢てもさめても、潛水艦は、いつも、主力艦を狙ひつゝ、如何なる荒天も物とせず、高速度で、複雜なジ

グザグ航路をとる敵主力を發見すれば、直ちに潛沒、潛望鏡は殆ど出さず、まつたくカン一つで水中を盲目航進し、いよ〳〵敵主力が避けられぬ位置に來たと思ふ時、突如、浮上して必殺の魚雷を發射する——而かもそれが、期間を限られてゐる訓練演習だけに、相手の警戒はむしろ實戰以上に嚴重なのだから、それを突破するのは生命がけだ。一歩誤れば、頭上の敵と衝突しなければならないのだ。

また、この潛水艦が幾日も潛沒沈下してゐる時には、艦内のロッカーや抽出しの空氣を吸つて頑張ることもしば〳〵、若し一度び南海の荒天にでも遭遇せんか、たよりに思ふ蓄電池や室内を冷す冷却機にも故障が起り、溫度はグン〳〵上昇し、濕度は九〇パーセント以上になる。濕度が九〇パーセントになれば、人體はまるで長湯のあとの如く、ふやけ、機關室では、靴の中に汗が水溜りの如くたまつて來る。而かもその苦痛に堪へながらの任務遂行だ。まさにこれは人間業を絶した忍耐である。そしてまた、浮上航行となつても、司令塔の信號兵は、如何なる荒天にも波をかぶりつゝ頑張り、全身鹽漬けのまゝ航行し、艦橋にある見張員は、海水の槌をうけて身體を叩きつけられることもしば〳〵である。かくの如き困難を克服しつゝなほかつ沈着に、この地味な任務を遂行するわが潛艦乘員の訓練モットー——それは堅忍不拔の四字である。そしてこれは、日本人の身心だけがなし得る堅忍不拔なのである。

【註】豐後水道　伊號第六十三潛水艦衝突事件

昭和十四年二月三日午前十一時海軍省公表

昨二日未明豐後水道に於ける艦隊演習中伊號、第六十三潛水艦は僚艦と衝突のため沈沒せり、目下全力をあげて救難作業中。

昭和十四年二月六日午前十一時海軍省公表

遭難イ六十三號潛水艦に對し、艦隊に於ては各方面と協力し、全力をあげて救難作業を實施しつゝあり、只今までに判明せる所によれば、生存者六名生死不明八十一名なり。

航空隊

わが海鷲のハワイ、眞珠灣攻擊を目擊したアメリカの一新聞記者は、その時の狀況を次ぎの如く書いてゐる。

「眞珠灣に目のあたり見た日本軍の威力は、私をして、アメリカの日本認識が半世紀以上もおくれてゐたことを痛感せしめた。われ〳〵は、アメリカ政府要路者と同じく、過去五年にわたる支那大陸の戰爭が、日本の軍事、政治、經濟力に重大な消耗と疲弊とを齎らしたと信じてゐたが、事實は、この五年の歲月こそ、すくなくとも、日本の軍事力を世界無比たらしめたのである。その攻擊武器の優秀さ、戰鬪力の旺盛さ、戰鬪的氣魄の充實、かうしたもの

は、過去五年間に、支那大陸に於て鍛へ上げられたものでなくて何であらう。中にもその敢闘精神は、凄絶と云はうか、悲壯と云はうか、形容の言葉を知らない。火を吐く機體を操りながら、阿修羅のやうな猛攻をつゞけ、今は最後と知るや、一團の火焰となつて目的物に突込んで行く日本軍獨特の自爆を、滿身の血が逆流するやうな氣持で目前に見た。そして感じた、日本軍の自爆は、決して生命を輕んずる自暴自棄の猪突ではないと云ふことを。これこそ日輪と共に育つたサムライの國の軍人のみがなし得る崇高にして嚴肅な戰ふ心の現はれでなくて何であらう。」

火を吐く機體を操りながら阿修羅のやうな猛攻をつゞけ、今は最後と知るや、一團の火焰となつて目的物に突込んで行く日本獨特の自爆――これこそは、わが海鷲精神の眞髓であり、この精神を徹底させるための教育が、技術の猛訓練とともに、驚くべき精神教育となつて行はれてゐる。たとへば、これを少年航空兵の例に見ても、少年航空兵は、十五歳の少年達であるが一年間の精神教育によつて、彼等は、生命をいらないと考へるやうになり、大君のためには、いつでも平然として生命を棄てると云ふ考へ方になる。そしてその後更に一年の教育によつて、彼等は、自分の敵を倒す前には死んではならぬ、と考へるやうになる。即ち、生命を棄てて戰ふと云ふのは精神狀態としてまだ初歩なるもの、敵を倒すまでは、どんなことがあつても死んではならぬと云ふ境地に至つて、はじめて積極的な力が湧いて來るのだ。而かも、十七八

歳紅顏の少年航空兵が、この心境になると云ふのは、その素質に於て日本人なればこそであるが、これが教育法の徹底味も亦見のがすことは出來ない。わが海鷲魂の鍛錬目標は實にこゝにある。

試みに、少年航空兵教育の徑路を辿つて見れば――豫科練習生（少年航空兵）は先づ身體檢査に二週間かゝる。內臟の檢査は勿論、回轉椅子にのせて椅子をグル〳〵まはし、その時直立させて、果してうまくバランスがとれるか、否かを試驗する。次いで眼球震蕩の程度、片眼での距離の判定等々、その嚴密な地上檢査に合格すると、今度は、同乘飛行による適性檢査――飛行機は、操縱桿を眞直に、兩脚をキチンと踏揃へておきさへすれば眞直に飛ぶものだと說明されて、上空で飛行機をまかせられる。そして更に宙返り、垂直旋回、若しそんな時、機體にしがみつくやうのことがあればもう落第である。

更にまた、目かくしをして片足で前後に歩かせるなど、あらゆる難關を突破して、やうやく少年航空兵になると、これから二年間の基礎教育で、體操に學科に寧日なき訓練を經て、同乘飛行にまで漕ぎつけるが、さて、その操縱員の訓練で最初の二、三日は、あの大きな飛行場が見付からぬと云ふ。かうして同乘の教官から捧で頭をつゝかれながら、一ケ月もすると、いよいよ單獨飛行――勿論、離着陸だけであるが、その飛行機の兩翼には、旗をつけ、この機には初歩の練習生が乘つてゐるから、他機は注意を要す、と云ふしるしにしておく。そしてこの旗

がとれる頃になると、高等飛行の練習に入る。しかし、相變らず同乘教官から、頭をコツ〳〵やられながら、中間機、實用機と進んで卒業となる。かくして、それ〴〵の基地に配屬され、爆擊機、偵察機、戰鬪機など水陸それ〴〵の實用機による訓練をうける。而かも、この訓練は實戰的訓練である。

次ぎに偵察員の訓練は、洋上航法、通信術、洋上に艦船をさがし出す訓練等、偵察員としての訓練もまた容易のことではない。

さりながら、以上の訓練は、その形に於ては、陸軍航空と同樣の徑路をとるやうに見受けられるかも知れない。けれども、航空機が、海洋の上空に於てする行動は、陸上上空に於ける行動と全く異なつた特殊條件がともなふと云ふことを見のがしてはならない。卽ちその差異の第一は、海上には全く目じるしがないと云ふことである。

陸上上空の飛行ならば、山、川、町、道路等の目じるしがあるので、その上を飛ぶのは、初めての所を飛ぶにしても活動が非常にらくであるが、海上は、何と云つても見渡す限りの青海原、何度同じところを飛んでも、初めての場合と少しも變らぬ注意力と緊張味と勞力とを必要とする。隨つて、海洋上空の航空は、すべて天體觀測により、計器、無線連絡等によつてのみ行はれなければならないが、これらの航法を完全にこなしきつて、自分の基地なり、母艦なりから飛び出し　攻擊目標の上空に達し、攻擊任務を了へて、またもとの場所にかへり得るほど

の技倆に達するまでには　種々の危險にも遭遇し、尊い犧牲も覺悟しなければならない。そしてそれが、母艦の艦上機の場合には、特に危險率が多い。何故ならば、母艦の場合は、以上のほか、更に發着そのものに最も高度の熟練を必要とするからである。云ふまでもなく母艦の飛行甲板は、大きい母艦でも幅二〇米ぐらゐ、長さ二〇〇米前後しかないのだから、たとへ特殊の方法が講ぜられるにしても、これを廣大な陸上飛行場に於ける發着に比べて、その困難の程度に大きな差異がある。而かも母艦は、波にゆれながら走るのだから、特に着艦の際に危險が多く、たとへば、機の方で正確に着艦したつもりでも、その瞬間母艦が波にゆり上げられゝば機は甲板に激突したと同じ結果を生む。また同じ瞬間、母艦が左右に傾けば、機は一方の車輪だけが早く甲板に接觸して　機體は急廻轉する。

更にまた、洋上航空が、陸上航空に比して困難な點は、目標の捕捉がむづかしいと云ふことである。たとへば、敵艦ありの報告に接して出動しても、その目標地點へ達するまでには、既に敵艦は移動してゐるのだから　これが發見は容易なことでなく、首尾よく發見したとしても、敵艦船は高速で走つて居り、而かも彼れは、發見されたと氣がつけば、直ぐジグザグに體をかはすから、爆彈乃至魚雷の命中は極めて困難になる。洋上の爆擊が、陸上の建築物乃至陣地等の攻擊に比して、一層の困難と危險とが伴なふのもこの爲めである。」

第三編　今次大戰果の世界海戰史に占むる地位

緒　言

吾等は第二篇に於て、大東亞海戰今日までの大戰果が、何によつて招來したかを、概略ながら、明らかにし、これによつて、來るべき艦隊主力決戰の豫想をもほゞなし得ると信じてゐる。

果して然らば、斯くの如くして戰ひ勝ちし大東亞海戰は、これを世界海戰史の上に見るとき、如何なる地位を占むべきか、はたまた、戰史上の海戰に比して、如何なる特徵を有するか。即ち、近代海戰の典型として、戰史上の海戰より如何なる發展をなしたか、是等の諸項を究明することは、今次大戰果の意義を正當に認識し、これが眞實を的確に把握することであり、ひいて、今後戰はるべき海戰の構想を明知することである。

もとより、大東亞海戰は、未だ艦隊主力決戰の域に到達してゐないとはいへ、今日までの戰果のみを以てしても、既に今後の豫想をなし得る程に顯著なりしこと、何人もこれを首肯するところであり、そしてまた、今日までの海軍戰果の一つ〳〵だけでも、戰史上の海戰に匹敵し、或はそれ以上でもある。

依つて吾等は、以下、世界海戰中の著名なるもの、就中その戰略戰術の上より、而してまた國家興亡の上より見て特筆すべき諸海戰を叙し、これと大東亞海戰とをその比較關聯に於て考究し由つて以て、今次大戰果の眞意義を認識把握しようと思ふ。

英西海戰

西暦一五八八年五月、西班牙王フィリツプ二世は大小艦船百二十八隻を以て、所謂無敵艦隊を編成し、これに兵三萬を搭乘せしめ、一擧に英國を攻擊せんと企てた。これが英西海戰の發端である。

當時西班牙は、コロンブスのアメリカ大陸發見によりその勢力を增大し、更にコルテス、ピサロ等の遠征によつて北はメキシコ、南はペルー、チリーを占領し、南北新大陸の大部分をその領土となし、或はマゼラン一行を遣はして世界新航路發見に努力せしむる等の結果、太平洋中の諸島及び、フィリツピン等もまた西班牙の領有となり、西班牙の勢力は愈々强大に赴いたのである。

こゝに於て、フィリツプ二世は、宇内統一の野望を抱くに至り、その野望實現の第一歩として、當時、西班牙が奉ずるカトリツク教に對し、新教の爲めに鬪ひつゝあつた和蘭を彈壓せんとし、更に和蘭を援助する新教國英國をも攻擊して、宗教的にも、武力的にも、英國を壓倒せんと企てた。

フィリツプ二世の無敵艦隊編成は、かくの如く英國攻擊を目標として行はれたのであるが、

この大艦隊準備中、そのまさに成らんとする矢先の一五八八年二月、西班牙にとつて容易ならぬ不幸が起つた。それは、大艦隊完成の曉に、必然總司令官たるべきサンタ・クルーズ侯の病死である。こゝに於てフィリツプ二世は、陸軍の勇將メヂナ・シドニヤ公を艦隊總司令官に任命すると同時に、英國の準備成らざるに乘じ攻擊せんとして、四月早々必ず英攻擊に出發すべしと命じたのである。世界海戰史上の冒頭に、最大の悲劇として記されるに至つた無敵艦隊の全滅は、この畠違ひの陸將司令官採用と、攻擊を急ぎしための準備不足とが、重大原因となつたのである。

而して、フィリツプ二世の命令に曰く「大艦隊の方略は、なるべく海戰を避けて、和蘭海岸に達し、そこよりパルマ侯の率ゐる陸軍三萬を乘船せしめ、これを無事英國本土に護送すべし」また曰く「英國海軍恐るゝに足らざるも、軍隊護送のためには、必要の場合以外、絶對に開戰すべからず」と。

これを以て知る、フィリツプ二世は海軍存立の目的を知らざるもの、當時、殆ど類例なき大艦隊を派遣しながら、一擧、敵海軍を擊破して海上權を掌握し、然る後に英本土を攻略する策に出でずして、單にこの大艦隊の目的を陸軍護送のみに置いたのは、正に重大なる戰略の錯誤であつて、これまた無敵艦隊全滅の原因であつた。

しかし、西班牙大艦隊の威容そのものは、實に堂々たるもので、軍艦大小八十三隻、運送船

四十五隻計百二十八隻に、大砲二千四百三十一門を搭載、兵員三萬の大陣容を誇つてゐたので英國はこの大艦隊を目して「ザ、インヴィンスィブル、アルマダ」即ち無敵艦隊と呼び、當の西班牙はこれを「フエルシシマ、アルマダ」即ち最幸艦隊と名付けたのであつた。

グラーブリーヌの海戰

かくて一五八八年五月二十日、威容成れる無敵艦隊は、リスボン港を出帆し、英國攻擊の大壯擧に向つたのであるが、出航後間もなく暴風雨に遭遇し、艦隊の一部分が吹流されるといふ戰前の不吉を喫した。そして六月九日豫定の集合地たる西班牙北西端のコールニヤ港に入つたが、早くも艦隊首腦の意氣沮喪蔽ふべくもなかつた。

然るに一方英國に於ては、西班牙大艦隊出動の報に、上下一致大いに奮起して義勇兵の志願は忽ち五萬餘を突破し、商人、富豪もまた所有船舶を提供して、海軍勢力の不充分を補つた。當時の英海軍勢力を見れば、その艦船總數は百八十隻を有し、數に於ては西班牙より多いが、質に於て遙かに劣り、軍艦中五百噸を超える大艦は僅かに十四隻、千百噸僅かに一隻に過ぎなかつた。然しながら英國海軍の强味は、人及び戰術にあり、艦隊の士氣また大いに昂つてゐた。かくて、見敵必擊の意氣凄く、ブリマウス軍港に集中、イギリス水道の入口を扼し、部將シーモアの一艦隊はドーヴア海峽北方ダンケルク附近の警戒に當つたのである。

一五八八年七月十一日、一方コールニヤ港を出發した無敵艦隊は、首尾六海里に亘る大半月形の縱陣を以て一路英本土に向け進航、七月十九日夕、始めて英海岸を北方に認め、二十一日イギリヌ水道に入つた。

待ち構へた英國艦隊は、直ちに無敵艦隊に攻擊を開始した。而かも英艦隊は陣形を構へず、その小艦の敏捷性を利して、或は敵艦の先頭に現はれ、忽ち側面に轉じて襲擊、または後尾に廻つてこれを衝くなど、出沒自在の戰法を以て大いに無敵艦隊を苦しめたのであつた。

西班牙無敵艦隊は、この英國艦隊の攻擊に應戰しながら、あくまでフィリップ二世の嚴命を遵奉して積極的戰鬪に出でず、寧ろ英艦隊の攻擊より逃避せんとする如く、尙も前進を續ければ英艦隊いよ〳〵これに猛擊を加へ、この日の接戰八時間に於て、西班牙艦隊數隻を擊沈したのであつた。

而して翌十三日以後の數日間は、格別の會戰もなく、英艦隊は無敵艦隊と絕えず接觸を保ちつゝ、時々これに砲擊を加へるに過ぎなかつたが、ダンケルク附近に於て味方陸軍と連絡すべく一意前進を續ける無敵艦隊が、七月二十七日カレー沖に碇泊するや、こゝに英艦隊は大攻擊を決意し、二十八日未明、火船八艘を放つて燒討の奇襲を敢行した。爲めに無敵艦隊は三隻の大艦を失ひ、三隻を漂流、一時大混亂を來したため、司令長官メヂナはこの襲擊より避退すべく全艦隊に出航を命じたので、こゝにまたグラーブリーヌ沖（カレーとダンケルクの中間）の

大決戰となつたのである。

グラーブリーヌ沖の大海戰は二十九日午前九時、英艦隊の攻擊に依つて開始されたが、この時に於ても英艦隊の攻擊は奔放自在を極め、ドレーク、ホーキンスの率ゐる一艦隊は左翼に無敵艦隊を壓し、シーモアの艦隊は右翼からその後尾を衝き、三方一齊に、大縱陣をなす西班牙艦隊に肉薄、左右から中央に向つて追ひ詰め、縱橫無盡の猛襲を續行して敵艦隊を四分五裂に擊破したのであつた。

この戰に於て西班牙側の蒙つた損害は軍艦十六隻のほか多數の損傷艦を出し、死者四千人を算したが、これに比し英國側は軍艦に損失なく、死者二、三百人程度の僅少なものであつた。

而かも、この海戰に致命的打擊を受けた無敵艦隊は、辛くもダンケルクに於て陸軍と連絡し、慘憺たる狀態に於て歸國の途中、スコツトランド北岸、オークニー諸島附近に於て、北海の荒波に尠からぬ漂流船を出し、またアイルランド航行の際に暴風雨に遭ひ、沈沒する艦船これまた少からず、溺死者八千人を出す等、散々の損害を蒙り、更に加ふるに艦船內に惡疫流行し、一萬人の病死者を出した。かくて無敵艦隊がコールニヤに歸港した時には、出航當時の艦數の大半を失ひ、殘る六十四隻も悉く損傷艦といふ有樣であつた。

第一次蘭英戰爭

西班牙無敵艦隊が、英艦隊の襲擊による致命的損害を受けて以來、西班牙の海軍はその當然の結果として衰微の一途を辿つたが、一方强敵西班牙を屠つた英國の國運は　愈々これより開けんとした。然るに、こゝに不思議な現象は、これによつて實質的利益を收めたのは、當の英國でなく和蘭であつたといふことである。

と云ふのは、元來、英國は、中世以來農業を主として來た國で、その海上進出の歷史は比較的新しく、爲めに國民の上下を通じて、海上に對する認識が充分でなかつたのに反し、和蘭は狹隘な國土の上に資源を持たず、その生存權は勢ひ海上に向ふより外になく、夙に歐洲各地は勿論、遠く外洋貿易に於て、既に先鞭をつけてゐたからである。爾來和蘭の海外に於ける利益は數十年に亙つて掌握されたのであつた。

然しながら、英國にしても、和蘭と同樣その國土は狹隘なる一小島國である上に、貿易上の地位に於ても、和蘭以上の好位置を占めてゐる關係から、到底この不自然な狀態を默過する筈はなく、こゝに英國對和蘭の海上爭覇戰が起つたのである。

卽ち一六五一年、クロムウエルが政權を握るや、彼は早くも英國將來の大發展が一に懸つて

海上にあることを喝破し、直ちに海軍力の擴張を開始し、次いで航海條約を發布して、英本國及びその植民地に對する和蘭の貿易を完全に排除したのであるが、その結果として起つたのが一六五二年より一六五四年に至る第一次蘭英戰爭であつた。

この戰爭は洋上戰のみに終始し、英國は天與の地形を利用して北海以西に對する和蘭の輸送貿易を封鎖し、和蘭はこれに對し、優勢なる海軍力を以つて、自國商船隊を護衛し、これを拿捕撃滅せんとする英國艦隊との間に、屢々ドーヴア海峽に於て、次ぎの如き海上戰が繰返されたのである。

ドーヴアの海戰

開戰は一六五二年五月二十九日、ドーヴア海峽に於て蘭英艦隊が相接し砲火を交へた。その勢力は、和蘭艦隊四十隻に對し、ブレークが指揮する英國艦隊はその約半數に過ぎなかつた。

然し英國側はその大艦と巨砲とに於て、和蘭側に優り、その實勢力は、必ずしも劣つてはゐなかつたが、このドーヴア海戰に於ては、兩國艦隊とも頑强勇敢に鬪ひ、夜に及んでも遂に戰は決しなかつた。

ケンチシユノツクの海戰

ドーヴア海戰の結果は、艦勢の優位な和蘭側によつて、一應海上權を獲得された形となつたが、この時和蘭本國に於ける黨爭の結果、艦隊司令官の更迭をみ、新たにジヤン・デ・ウイツトが指揮官となるや六十四隻の艦隊が編成され、同年十月再び海峽に出動し、ノース・フオアランドの東北ケンチシユノツクに於て、ブレークの率ゐる六十八隻の英國艦隊と遭遇、一大海戰が行はれた。

戰は午後三時より日沒に及んだが、この時英國側には一隻の損害もなかつたに反し、和蘭側は一隻は燒失し、二隻は捕獲され、而も十數隻の軍艦は闇夜に乘じ逃走する有樣で、こゝに於て海上權は再び英國側の手に歸した。

ダンジエンスの海戰

和蘭はケンチシユノツクの敗戰により、一時商船の出港を禁止したが、何分貿易が國家の生命であるので、再び非常な努力を以つて、艦隊の整備擴充に邁進し、同年十二月マルチン・トロンプを起用して敗將デ・ウイツトに代へ、約九十隻の大艦隊を編成し、ダウンス水道にある英國艦隊を襲撃せしめ、自國商船五十隻の出航を掩護せんとした。

即ち十二月九日、トロンプの率ゐる艦隊は、グツトウイン・サンド後方に英國艦隊を發見してこれを襲へば、ブレークの率ゐる英艦隊、またこれに應じ、三十九隻の劣勢であるにも拘ら

ず、敢然としてこれに應戰した。折しも、風強くして行動意の如くならず、双方ともにドーヴア附近に假泊するのやむなきに至つたが、翌十日正午頃、トロンプは西北の強風に帆を上げて、英國艦隊に迫り、午後一時頃ダンジエンス附近に於て双方砲火を交へるに至つた。

戰は相當の激戰を演じたが、四時半頃に至り、英國艦隊は敗退、ドーヴアに向つて遁走したのである。この海戰に於て和蘭側の損害は一隻に過ぎなかつたが、英國側は三隻を失ひ、その旗艦トライアンフは大損害を受けた。

かくて海上權はまたしても和蘭側が掌握するところとなり、蘭將トロンプは旗艦の檣頭に箒を掲げて、海上を淸掃する意を現はし、イギリス海峽を我物顏に横行濶歩したのであつた。

ポートランド沖の海戰

英將ブレークは、このダンジエンス敗戰の責を負つて辭意を表したが、英國政府は却つて之を激勵するとともに、急遽軍艦の修理に努め、更に新艦の建造に勵むなど、只管艦隊の擴充强化を計り、翌一六五三年二月、捲土重來の意氣物凄く、精鋭八十隻の艦隊を率ゐて、イギリス海峽を西進、一擧に和蘭艦隊を屠らんとした。

恰もこの時、トロンプの率ゐる和蘭艦隊八十隻は、ビスケー灣より東洋歸航の商船二百五十隻を掩護して歸路にあつたが、二月二十八日、はしなくもイギリス海峽ポートランド沖に待ち

構へし英國艦隊に遭遇して、こゝに海戰戰術上特殊の意義を持つポートランド沖海戰の火蓋が切られたのである。

戰鬪は實に三日間繼續して行はれたが、第一日の遭遇戰は、双方とも頑强に戰ひ勝敗は容易に決しなかつた。卽ち英國艦隊は三隊に分れて和蘭艦隊をむかひ擊たんとしたが、トロンプは敵陣形の整はぬ内に、早くも攻擊命令を發し、輸送船隊を風上に避退させた。かくと見るやブレークはその快速を誇るフリゲート數隻をして和蘭輸送船を襲はしめんとすれば、トロンプは急遽戰鬪を中止して專ら輸送船團の掩護につとめた。

この日の戰に於て英蘭ともに數隻を失ひ、死傷多數を出し勝敗がなかつたとは云ひ條、概して云へば、和蘭側に不利な點が認められた。當日は風强く波浪高かつた爲め吃水淺き蘭艦は動搖甚だしかつたに反し、英艦は新造艦多く、また艦も砲も大きかつた爲め、戰鬪上優勢を持し得たのは事實である。

かくて兩艦隊はその夜海上程遠からぬ所に相對峙し、翌日の決戰を期したのであるが、トロンプはその夜軍議の結果、防禦體制を執ることに決し、輸送船團を護衛しつゝ歸航するの行動に出でた爲め、それと見たブレークは矢庭にこれが追擊行動に移り、三月一日のワイト島沖及び二日のビーチー・ヘット沖に於て、遮二無二、和蘭艦隊を攻擊した。

而かも和蘭艦隊は前回のダンジエンス海戰以來、彈藥その他軍需の補充充分ならざりし爲め、

擊力旺盛なる英國艦隊の前には到底敵すべくもなかつた。

かくて損害は、和蘭側に甚だしく、軍艦十一隻、商船三十隻を喪失したが、こゝに注目すべきは、この海戰後に於て兩軍指揮官は、各々その海軍本部に對し「戰鬪中は確固たる戰鬪體形を整へるに非ざれば勝算なし」との報告をなし、更にまた英國側ブレーク、ヂーン、モンクの三提督は「縱陣を以つて戰鬪中の最良なる陣形とする」てふ海戰々術上の一規程に署名したことである。卽ちこのポートランド沖海戰は、海戰々術發展の端緒を開いたと云へるのである。

ノース・フオアランドの海戰

數ヶ月前まで英國近海を横行濶步した和蘭艦隊が、ポートランド沖海戰に於て、かくも見苦しく敗退したことは、吾等をして直ちに「油斷大敵」の敎訓を悟らしめるが、然しながら、和蘭もまた、決してこの一敗に屈するものでなく、一六五三年五月、トロンプは再び百餘隻の大艦隊を率ゐ、商船二百隻を護衞してドーヴアに向ひ、陸上を砲擊して英商船を捕獲した。

この報によりモンク及びヂーンの英國艦隊は急遽和蘭沿岸より回航し、六月十五日テームス河口ノース・フオアランド附近に於てトロンプの艦隊と砲火を交へた。英艦隊百十五隻、蘭艦隊百四隻であつた。

戰は正午より午後五時頃までに及び、遂に和蘭側の退却戰となり、英國艦隊はこれを追擊す

ること數時間、夜に及んで、ダンジエンス附近に假泊した。損害は英蘭ともに數隻を失つたが、大勢は英國側に有利であつた。

而かも翌十六日に至るや、ブレーク艦隊の來援もあつて、英艦隊は益々優勢を示した。こゝに於てトロンプは、折柄の强西風を利して、英國艦隊の包圍陣を脫せんとしたのであるが、オステンド、スロイス間の淺瀨附近に至り、俄かに風凪ぎ、爲めに和蘭艦隊は混亂に陷り、英國艦隊の猛擊を浴びたのであつた。當日の戰鬪に於て和蘭側は約二十隻の軍艦を失ひ、その內十一隻は捕獲の憂目に遭つたが、英國側には一隻の損失もなく、若干の損傷艦を出したに過ぎなかつた。

英將ブレークはこの勢ひに乘じ、百二十隻の大艦隊を以つて和蘭海岸封鎖を行つたが、偶々軍艦內に傳染病が發生し、更にまた暴風雨頻りに來るなどあつたため、遂に封鎖を斷念し歸國のやむなきに至つた。

カトウイク・スケヴエニンゲンの海戰

一方和蘭政府に於ては、再度の敗戰にも屈せず、その戰備に邁進し、新艦隊を編制して一部をトロンプの指揮下にミューズ河口に配し、他の一部はウイツト・デ・ウイツトを司令官としてテクセルに置き、英國艦隊の歸國を知ると同時に、トロンプはデ・ウイツトの艦隊と合併す

べく八月六日、八十八隻の艦隊を率ゐてミューズ河を發しテクセルに向つたのである。

然しこのトロンプの出動を知つた英國艦隊司令官モンクは、八月七日大艦九十隻、小艦二十六隻を率ゐて直ちに攻撃に出で、翌八日午前テクセル附近に於てトロンプ艦隊を發見した。しかもトロンプが英國艦隊の優勢なるを見て、南方に退くのを、モンクは快速艦をして追撃せしめ、午後五時頃カトウイク附近にこれを追迫し、直ちに砲撃を開始した。しかしながら、和蘭艦隊は意外に善戰して損害なく、つひに夜に入つた。當時テクセルにあつてこの砲聲を聞いた和蘭提督デ・ウイツトは暗夜に乘じ、二十四隻の艦隊を引具して出動し、翌九日午後五時、英國艦隊の眼前に於てトロンプの主力と合併したが、この日風烈しくして開戰に至らず、明けて十日午前六時半、つひに第一次蘭英戰爭最後の一戰として有名なスケヴエニンゲンの海戰の火蓋が切られたのであつた。

實にこのスケヴエニンゲンの海戰こそは、蘭英兩艦隊がその全力を傾倒して戰ひ、その激鬪、早朝より夕刻に及び、遂に英國側の大勝に終つたのである。

而して和蘭側の損失は、軍艦十三隻を喪失したと云はれたが、軍艦損失よりも尙一層の大損害は、同海戰に於て名司令官マルチン・フアン・トロンプを失つたことで、戰ひ半ばにしてトロンプ戰死と聞くや、和蘭側全軍士氣の動搖甚だしく、帆をあげて逃走せんとするもの二十數隻に及び、これが蘭軍敗戰の一大原因となつたのである。

斯くの如く第一次蘭英戰爭は、海上戰を以つて終始したが、このスケヴエニンゲンの海戰は、交戰兩國をして漸く和平を議せしめる動機をなした。卽ち一六五四年四月十五日、ウエストミンスターの講和條約に於て、和蘭はつひに英國の前に屈服した。

第二次蘭英戰爭

第一次蘭英戰爭終了後十一年、一六六五年に至り、再び蘭英兩國が相戰ふに至つたのは英提督モンクが、これを露骨に公言した如く、端的にいへば英國が和蘭の商業權奪取を必要としたからであつた。

卽ち英國は、ウエストミンスターの條約によつて、和蘭に少からぬ打擊を與へたものの、それにも拘らず和蘭の貿易は益々發展を續け、英國は依然としてその後塵を拜する狀況なりしを爲め、英國は再び武力によつて和蘭に一大打擊を加へんとしたのである。

然るにこの時、フランス王ルイ十四世は、その間に立ちて、漁夫の利を占めんとし、蘭英國交の危機に際してその仲裁を試みた。而してその仲裁も空しく、愈よ第二次蘭英戰爭の勃發するや、彼れは和蘭と同盟を結び、更に丁抹とともに英國に宣戰したが、何ぞ知らん、その目的は、兩國をして相戰はしめ、その疲弊を俟つて己が野心を滿たさんとしたのである。

ローウエストフトの海戰

一六六四年十二月二十九日、英提督アリンは、ジブラルター海峽に於て、和蘭輸送船隊を襲撃した。これに端を發したのが、第二次蘭英戰爭である。

當時、英艦隊勢力は、ヨーク公の指揮下に三十門以上の大艦八十隻、小艦二十九隻、火船二十一隻で、總兵員二萬一千人、砲四千百九十二門の堂々たる一大艦隊であつた。

これに對する和蘭艦隊は、第一次戰爭後に於て、その艦數、艦質ともに一大進歩を示し、司令長官ワツセナール・バロン・フアン・オブダームの下に三十門以上の大艦九十七隻、小艦十三隻、これに搭乘せる總兵員二萬一千六百餘、砲四千八百六十九門で、英國側に劣らぬ大艦隊であつた。

然し、和蘭艦隊司令長官ワツセナールは、一六六五年五月二十三日、折柄暴風雨に惱まされて被害甚だしき英國艦隊を發見したに拘らず、何故かこれを攻擊せず、爲めに國會より敵攻擊の强制命令を受けた。而して六月十一日に至り、英國海岸ソールベー、ローウエストフト間に於て、再び英國艦隊と遭遇したが、和蘭艦隊は風上の有利な地位にあつたにも拘らず、ワツセナールはまたしても攻擊に出でず、却つて風に向つて脫出せんとした。それと見て、英國艦隊はこれに追迫し、翌十二日五海里の間に接近したが、尙もワツセナールはその好機を捕へて攻

擊せんとせず、十三日午前二時半、兩艦隊はローウエストフトの北東十八海里附近に對峙すること一時間餘、漸くにして砲擊を開始したのであつた。

戰は曉闇より夕刻に及び、激戰は數度に亙つて行はれたが、午後三時頃和蘭側旗艦の爆發により、司令長官ワツセナールは戰死し、指揮官を失へる和蘭側は遁走艦續出して、再び英國側の大勝に歸した。この海戰に於て英國側の損害僅かに軍艦二隻、提督二人、兵員八百であつたに對し、和蘭側は大艦十七隻、提督三人、兵員約四千人を失つたのであつた。

四日海戰

然し、ねばり强き和蘭は、ローウエストフトの敗戰後に於ても、尙孜々として海軍力再編成に努力を傾け、敗戰十日にして早くも商船護衞の爲め一大艦隊を出動せしめる程であつた。偶偶當時アメリカより歸航の艦隊を率ゐつゝあつた和蘭提督デ・ロイテルは、これを邀擊せんとする英國艦隊を、計略を以つて欺き、八月六日堂々として和蘭北端のエムス港に歸着した。かくて稀代の名將デ・ロイテルは八月十六日、新たに和蘭艦隊司令長官として、祖國の運命を擔ふこととなつた。

而かも、一方英國側は、チヤールス二世の王政稍ゝ明識を缺き、軍艦の修理も放棄され、艦隊また各地に分散して無爲に過ごす狀態にあつたため、蘭將ロイテルこの機を逸せず、一六六

六年六月五日、オステンド附近のウイーリンゲンに麾下艦隊を集結し、英國艦隊がダウンスにあるを知るや、十日風を得て出動し、先づノースフオアランドに向つて進航し、敵を攻撃せんとしたのである。

この時、英國側は佛國艦隊邀撃の爲め、先鋒部隊を海峽の西口附近に分派中であつたが、しかし、英將モンクは直ちに殘餘艦隊約六十隻を引具し、優秀なるロイテルの八十餘隻に應戰したのであつた。而してこの海戰は、その戰鬪の長時間に亙りしこと、及び參加艦船の多數なりしことによつて、世界海戰史上著名なるものであるが、戰は六月十一日より十四日まで、四日間繼續したので、世に四日海戰と稱せられてゐる。

海戰第一日は和蘭艦隊の强靱なる抵抗により、英國艦隊は幾分不利な點が認められ、第二日は兩艦隊互に接近戰を交へたが、和蘭側の部將トロンプ（名將トロンプの子）が過急に敵艦隊の風下に出で、抜け駈けの功名を焦つた爲め、却つて陣形の不統一を缺き、その優勢を充分に發揮し得なかつた。

第三日に至つて英國艦隊は、つひに退却戰に移つた。即ち英將モンクはプリンス・ルパートの來援まで避逃せんとし、和蘭艦隊は極力これを急追せんとしたが、各隊の陣形整はざるに加へて、艦速遲く、爲めにその目的を達することが出來なかつた。

然るに同日午後に至り、ルパートの率ゐる二十三隻の英國艦隊が到着してモンクと合併する

や、英艦隊六十隻、和蘭六十四隻となり、その勢力相伯仲した。かくて第四日目の決戰は同海戰中最も熾烈を極め、遂に和蘭側の大勝となり、英國側は霧に紛れて、辛うじて全滅を免れたのであつた。

その日、英國艦隊は風下に集結し、開戰と同時に風上に出でんとしたが、その前衛部隊と中央主力隊との間に間隙を生じた時、蘭軍の部將フアン・ネスこの間を突破し、また後衛トロンプの艦隊は、英艦隊後陣の列間に突進して、その一部は主力に肉迫、フアンネスはこれに續いて、英艦隊の風下に出で、距離を離して弧を畫きながら敵を並行戰に誘つたのである。またその一部はやや遲れて英軍主力に接近したのであるが、この時ロイテルは機會やよしと突擊の信號を揭げ、英艦隊の中央に迫り、これを痛擊したのであつた。英國艦隊この日の損害は、擊沈二十隻、捕獲六隻、兵員の死傷五千、捕虜三千に及び、和蘭側は僅かに沈沒四隻であつた。

斯くて、制海權は、全く和蘭側の掌握するところとなつたが、名將ロイテルはこの機に乘じ、更に敵を攻擊せんとして、一六六七年の夏、大擧してテームス河口に迫り、河口を遡つて英艦六十六隻を燒拂ひ、二隻を捕獲し、なほも進航してロンドン市を砲擊し、大いに英國側を惱ましたのであつた。

第三次蘭英戰爭

斯くの如く和蘭は、海戰に於て勝利を占めたにも拘らず、國内經濟疲弊の爲め、國内に停戰和平の希望多かりしため、一六六七年八月、ブレダに於て平和條約を締結した。しかもこの條約の條件は、前回同樣飽迄和蘭側に不利にして、大いに海戰の勝者たる面目を失したのである。然し英國としては、條約に於て和蘭を拘束しても、海上に於ては依然として和蘭の制壓を受け、第一、第二次戰爭の原因は少しも清算されなかつたのであつた。

かくて蘭英兩國の國交は年とともにまたまた惡化しつゝあつたが、一六七二年三月、英國艦隊がスミルナより歸國中の和蘭輸送船團を襲擊したことにより、またしても、交戰狀態に入り、四月七日遂に宣戰の布告をみるに至つたのである。この時フランス王ルイ十四世は英國側に加擔し、英佛聯合艦隊を以て和蘭を攻擊した。

ソールベーの海戰

英佛同盟側は、南北兩方面より同時に和蘭に迫り、これを一擧攻略せんとしたのであるが、この英佛聯合艦隊北方上陸の企圖を知つた和蘭は、直ちにデ・ロイテルをして敵聯合艦隊の合

同に先立ち、先づ英國艦隊を攻擊せしめんとした。然しその準備ならぬ内に英佛艦隊は逸早く合同を遂げ、六月七日に至り、英國海岸ソールベー沖に於て會戰を見るに至つたのであつた。

當時の兩軍勢力を見れば、英佛聯合艦隊は英側ヨーク公、佛側デスツリーの指揮下に、英艦四十五隻、佛艦二十六隻、計七十一隻、火船二十四隻、砲數五千百門に對し、和蘭艦隊は指揮官デ・ロイテルの下に、軍艦六十一隻、火船三十六隻、砲數四千四百八十餘門であつた。

戰は朝八時より夜九時に及び、大接戰の後遂に和蘭側の勝利となつた。蓋しこれ、蘭將ロイテルの巧妙な戰術と、佛艦隊の不徹底な態度とに因るものであつて、損害は英軍の四隻、死傷二千五百に對し、蘭軍は二隻、死傷二千に過ぎなかつた。

然しながら佛蘭西は、陸上に於ては、大擧して和蘭を壓迫し、向ふ所敵なき狀態なりしため、勢ひ、和蘭政府は海軍兵力を陸上作戰に移さざるを得ず、爲めに艦隊勢力は縮小の餘儀なきに至つた。然し、ロイテルは、よくこの難局を克服して、只管兵力の充實をはかり、訓練に努力し、一六七三年英佛聯合艦隊の攻擊をスコーネフエルトに於て擊退すること二回に及び、八月十九日、英佛艦隊がテキセル北方に碇泊中なるを知るや、敢然として急行、これに挑戰した。

これぞ海戰史上有名なテキセルの海戰である。

テキセルの海戰

この海戰に參加せる和蘭艦隊は軍艦七十五隻、火船二十二隻、ヨット十八隻で、これに對し英佛聯合艦隊は英側六十隻、佛側三十隻、計九十隻で、他に火船二十八隻、小艦運送船二十五隻の優勢であつた。

戰鬪は早朝横陣を以て向つたロイテルの攻擊によつて開始したが、彼は先づ部將バンカースの率ゐる前衞艦隊をして、敵先頭の佛艦隊三十隻に當らしめ、ロイテル自身は敵主力たるルブレヒトの艦隊を攻擊、後衞トロンプの艦隊をして敵後軍のスプラツグに當らしめ、こゝに戰は三ケ所に分れて行はれた。

この時、さきの四日海戰に於て專恣なる行動をとつたトロンプは、敵將スプラツグの艦隊と激戰すること三時間餘り、遂に敵を屠り、適時にロイテルと合併、バンカースもまた劣勢ながら、よく敵の攻擊に抵抗してロイテルの主力に合し、こゝに和蘭艦隊は全軍揃つて敵主力を猛擊し、遂に和蘭側の大勝利となつたのである。

當日の損害は、英軍十二隻大破、戰死二千、蘭軍は艦船の損失なく、戰死は英軍側の半數、從來の海戰に比して、艦船沈沒數が少いのは、兩軍ともに艦船の構造が進歩したことと、その戰法が所謂運動戰となつて、比較的遠距離で行はれたからであつた。

しかし、後世の史家をして、このテキセル海戰の重要さを說かしめた所以は、英國側をしてその上陸作戰を全然放棄せしめた點である。卽ち英佛兩國はこの敗戰によつて戰爭を嫌惡する

に至り、つひに一六七四年二月、第二次ウエストミンスター平和條約を締結するに至つたのである。然しながら、この第二次ウエストミンスター條約も、當時和蘭が佛軍によつて國土の大半を蹂躙され、國力疲弊の極にあつた爲め、媾和條約の內容に於ては、またしても英國の利するところとなつたのである。

蘭英戰爭はかくの如く第一、第二、第三次の二十三ケ年を通じて悉く海上戰に終始し、十七世紀に於ける世界政策の爭覇戰として、世界歷史に一大轉機を劃した戰爭であつたが、第二次ウエストミンスター條約以後、和蘭は、なほも、佛國艦隊を敵として、西印度、ビスケイ灣、地中海等に戰つたのであるが、一六七六年四月アゴスタの海戰に於て、蘭將ロイテル重傷を負ふて戰死するや、一六七六年六月バレルモ港に於て、英國艦隊の襲擊に逢ひ、遂に全滅の悲運に陷つたのであつた。

英佛戰爭

以上の如く英國は一六〇〇年代に於て强敵西班牙を屠り、一七〇〇年代に至り、和蘭の勢力を海上より驅逐したが、「海洋を支配するもの商業を支配し、商業を支配するもの世界を支配する」てふ鐵則を、その國策とする英國の、次ぎに執るべき手段は佛國海上勢力の排擊であつた。

而かも英國一流の老獪外交は、西班牙艦隊剿滅に際しては、和蘭と聯合して之に當り、和蘭勢力の擊破には佛國の援助を借りて、その目的を達したのであるが、佛國勢力の驅逐に於てもまた獨力を以てするを不可なりとし、當時漸く英國の頤使に甘んじつゝあつた和蘭と協同し、一六八八年より一六九七年に至るまで、屢〻海上に於て佛國艦隊と相戰つたのである。

當時、佛國艦隊はトールヴイユ提督の編成になる優秀艦隊にして、トールヴイユ提督自ら司令長官としてこれを指揮したため、一六九二年に至るまでは、寧ろ英蘭聯合艦隊より優勢であつた。以下英佛戰爭に於ける著名なる海戰を抄述すれば次の通りである。

ビーチーヘツトの海戰

この海戰に於て、兩艦隊は、ともに名將ロイテルの戰法を模倣したが、それはたゞロイテルの形をとりしのみにて、この名將の眞意を理解してゐなかつた。

即ち、ビーチーヘツト海戰は、一六九〇年七月十日に行はれ、戰は英將ヘルベートがロンドンよりの攻擊命令によつて、蘭艦隊を先鋒として向はしめ、その戰法はテキセルの海戰に於てロイテルが行つた如く攻擊し、後衛部隊もまた接戰を交へたのであるが、中央主力たる英艦隊の行動が餘りに消極的であつた爲め、先鋒の蘭艦隊は前衛佛艦隊の爲めに完全に包圍されて大損害を蒙り、漸く英艦隊主力が救援に赴いた時には、既に蘭艦隊の勢力はその半ばを減じ、英

主力自ら救援を要する狀態に逢着した。

されば、佛國艦隊は、その主力及び前衛ともに優勢を持し、終始敵を壓倒したのであるが、フランス王ルイ十四世は、自國軍艦に接近決戰を許さなかつた爲め、佛國艦隊は勝利を得ながら、充分なる戰果を擧げ得なかつた。當時は、敵味方とも、司令長官に戰鬪指揮の獨斷權がなかつたのである。

即ちこのビーチーヘツトの海戰は、その海戰の要諦たる「一大決戰」を回避した退嬰的海戰であつて、「拂はざるべからざる犧牲を拂はず、冒さざるべからざる危險を回避するときは、戰果を全うすること能はず」の戰訓を如實に證明した適例であつた。

その結果は、當然、全軍の士氣に影響した。そして、一六九二年六月、佛國艦隊は、ラ・フーグ附近に碇泊中、英國短艇隊の夜襲を受けて大敗し、爾來漸く佛國海上勢力の精神的退嬰となり、遂に英國の爲め打破される端緒となつたのである。

ツーロン沖の海戰

一七三九年より一七四八年に至る、墺國王位繼承戰爭中、英國は再び佛西兩國を敵として戰つた。

即ち英國艦隊は、通商破壞と封鎖とによつて、經濟的に兩國を惱ましたのであるが、この戰

役中に起つた一七四四年二月二十二日のツーロン沖の海戰は、偏狹なる形式戰法による海戰として知られてゐる。

この時、兩軍の兵力各々二十八隻、英國艦隊は提督メシューが指揮し、佛西聯合艦隊は佛將デ・クールが率ゐた。戰鬪は、兩軍艦隊の戰列未だ整はぬ内に、英指揮官メシュー、自ら敵の後衛たる西艦隊を攻擊するにはじまつたが、後衛の英將レストツクは、正規の戰列未だ整はざるを理由に、指揮官メシューの攻擊命令に從はず、爲めに英軍の不利を來たした。然るに一方聯合軍側もまた、その機をとらへんとせず、却つて戰鬪の中止を希望したといふ、不統一不活潑の戰鬪に終つたのである。

恐らくこの時に於て、レストツクが定石に拘はることなく、適宜最善の手段を構じて、メシューを支援すれば、その優勢に乘じて敵戰列の後衛を擊滅することが出來たと推察される。即ち偏狹なる形式に捉はれた海戰の好適例がこれであつた。

ミノルカの海戰

ツーロン沖海戰以後一七五六年から一七六三年に至るフレデリツク大王の七年戰役中、英國もまたこの七年間を佛國と戰ひ、一七五九年十一月ギベロンに於てホークの率ゐる英艦隊が佛本國艦隊を破り、一七六一年英提督ケツペルがビスケー灣に於て、佛艦隊を擊破し、一根據地

を獲得するに至つたのであるが、これに先だつて起つたのが英佛相戰ひしミノルカの海戰で、佛艦隊が地中海ミノルカ島の英艦隊を攻擊したのである。この海戰は、戰術上勝敗は決しなかつたが、後に至り英艦隊はジブラルターに退却を開始し、戰略的にみて佛國艦隊の勝利となつた。

マルチニツクの海戰

英佛兩國が海上權を續つて相爭ふうち、一七七五年より一七八五年に至る北米獨立戰爭が勃發し、この爲め英國はその最大の植民地を失つたのであるが、佛國及び西班牙はこの機會に乘じて暴戾なる英國の覇絆より脱せんとし、こゝに佛西兩國と英國の間に一大海戰が行はれた。

即ち、一七八〇年四月十七日のマルチニツクの海戰がそれであつて、ロドニー提督の率ゐる英國艦隊は、二十一隻、佛國艦隊はド・ギセンの下に二十三隻、英國側は、指揮官ロドニーの命令各艦に徹底しなかつた爲めに、作戰の齟齬を來たしたが、然し戰は結局英國側の勝利となり、佛艦隊は、英艦隊に比し約二倍の損害を受けた。

ドミニカの海戰

ドミニカの海戰は、北米獨立戰爭中、英佛兩國艦隊が戰つた海戰中の最大の戰鬪であり、一

七八二年四月十二日、西印度洋上に於て戰はれた。

この時兩國艦隊の勢力は、英艦隊はロドニー指揮の下に三十六隻、佛艦隊は三十隻を以つてド・グラスが率ゐてゐた。

戰鬪は頗る猛烈を極め、佛艦長八名の戰死をみた程であつた。開戰當初、兩軍艦隊は各縱形を保つて相對峙し、互に風上に出るべく努力したが、佛艦隊が遂に風上に至り、砲火を交へたのである。然しこの時俄かに風向が變じ、且つ風力微弱となつて、佛艦隊に不利となり、その戰列に間隙が生じた。これを見て英將ロドニーは、間髪、敵艦の間隙に向ひ猛然として突擊し、また、その後衛も續いて敵の間隙を突破したため、佛艦隊陣形は二つに中斷されるに至り、激戰の後、佛國旗艦は軍艦旗を降して降伏し、遂に英軍の勝利に歸したのであつた。

この戰爭の結果、佛國は極度に疲弊困憊し、また外交上の失敗其他の原因により、つひに革命を誘發したのであるが、革命後に於ける風雲兒ナポレオン一世の最大關心事は、依然として英國擊破にあつたので、英佛兩國の歷史的爭鬪は、尙も全十八世紀を通じ、海上に於て繼續された。

六月一日の海戰

一七九四年五月、佛國艦隊は、穀物滿載の大輸送船團を護衛して、カナダより本國沿岸に向

け航行中であつたが、これを擊滅すべく命令を受けた提督ホーの率ゐる英國艦隊は、五月二十九日に至り佛艦隊に接近、爾後兩艦隊は小競合ひを交へつゝ、所謂英國側をして「光輝ある六月一日の海戰」といはしめた當日となつたのである。

この戰鬪に參加した兩軍勢力は、ホー指揮下の英艦二十五隻、佛側はヴイラレーの率ゐる二十六隻で、初め兩艦隊は戰鬪縱陣を以つて相對峙し、戰列整然として風上にあつた英艦隊は、各艦個々に、佛艦隊戰列の全線に亙つて突破し、風下に出て接戰を行ひ、こゝに兩艦隊は舷々相摩す激戰を演じた。

然しこの時の佛艦隊は、戰に勝つよりも穀物輸送船團の安全を欲し、幸ひ戰鬪半ばにして、輸送船團は遁走したのであるが、この海戰は英艦隊の敵戰列突破により、戰術的勝利を得た。

謂ふならば、この六月一日の海戰は、舊時代の戰法を確守した海戰であつて、英提督はその突擊中に於ても、艦列の整頓に氣を配り、數回に亙つて、その信號を發したといはれる程であつた。

セント・ヴインセントの海戰

その後一七九六年に至り、西班牙は、英國に對する敵意よりして佛國と結んで英國に對したが、この時英傑ナポレオン一世の率ゐる佛國陸軍は、勝に乘じて伊太利に侵入し、この爲め英

國は地中海に於ける艦隊根據を失ふこととなつた。而して、英艦隊が再びこの地中海に出沒することの出來たのは、一七九七年二月十四日のセント・ヴインセントの海戰に於て西班牙艦隊を擊破したことによるのである。

その戰はリスボンの南方百海里地點のセント・ヴインセント岬附近に於て行はれたが、當日の兩軍勢力は、英側に於てジヨン・ジヤーヴイス指揮官の下に名將ネルソンがあり、軍艦十五隻の劣勢に對し、西班牙側はデ・コルドバの率ゐる軍艦二十七隻の優勢であつた。

會戰當初、西艦隊は前方に十隻、後方に十七隻と二群に分れて進航したが、戰列整はず、之に對する英艦隊は旗艦ビクトリーを中央に、縱陣を以て砲火を開き、英軍先頭艦は、西艦隊前後二列の間隙に味方艦隊を誘導、敵を完全に二分にし、次いで各艦は遂次敵の主力に立向つた。

この爲め、西艦隊の主力は反轉して北方に向つたが、かくとみるや、後列三番目にあつたネルソンは獨斷、戰列を離れ、北方に遁走せんとする敵に突進、その旗艦に猛擊を浴びせたのである。このネルソンの果敢なる突擊によつて、英艦隊は赫々たる勝利を獲得し、ネルソンまた後日の偉大をなす端緒となつたのである。

アブーカーの海戰

かくて英國艦隊は、再び地中海に於ける一部海上權を握るに至つたが、この時以來武名を擧

げたネルソンは、ツーロンの封鎖艦隊を指揮し、一七九八年の夏、ナポレオンが大輸送船團を率ゐて密かにこの封鎖線を突破、埃及に渡るに及び、ネルソンは直ちにこれを追跡、一七九八年八月一日、遂にアフリカ海岸アブーカーに假泊中の佛國艦隊を發見した。

この戰鬪に參加した英國艦隊十四隻、佛國艦隊十三隻、ネルソンの艦隊は縱隊となつて碇泊中の佛艦隊を左右兩面から襲擊、果敢なる攻擊の火蓋を切れば、佛艦隊も勇敢に應戰し、爲めに英艦數隻は大損傷を受けて漂流したため、夕暗の迫るとともに、一時、英艦隊は危機に瀕したのであつた。

然し、夜に入るや、戰鬪は英國に有利に展開し、結局佛國の敗北に歸し、ナポレオンは僅かに身をもつて佛國に逃れたのである。

トラフアルガーの海戰

當時和蘭は佛國革命政府の征服下にあり、佛國と聯合して、英國に對抗してゐたが、アブーカーの海戰に先立つ一七九七年十月十一日、カンバーダウンの海戰に於て一敗地に塗れ、到底佛國救援の力はなかつた。その後埃及より歸國したナポレオンは、英攻擊の爲め、百方手段を盡したが、その攻擊主隊たる佛國艦隊は、革命の餘波を受けて充分なる擴充强化を見ず、時代の英雄ナポレオンを以つてしても、意の如くならなかつた。

さりながら、佛國としては、英國を牽制する上からも、艦隊の活動は必須のことなりし爲め、その劣勢弱體をもつて、尙遠く西印度に策動し、また英佛海峽にも進出したのであつた。

海戰史上有名なトラフアルガーの海戰は、一八〇五年十月二十一日、かかる狀況の下に、佛國艦隊が地中海に向ふ途中、同じく地中海に向つて進航中の英國艦隊と遭遇し、遂に、再び起つ能はざる大打擊を受けるに至つたのである。

この時兩軍の勢力は、名提督ネルソンの率ゐる英側二十七隻に對し、佛側はヴイルヌーヴの指揮下に佛艦十八隻、西艦十五隻計三十三隻の聯合艦隊を以つて當り、ネルソンは開戰當初、二十七隻の軍艦を二個の縱列とし、各縱列はその航行隊形より直ちに戰鬪隊形となつて、何時でも敵に向ひ攻擊し得るやうに編成、しかも風下の縱列艦隊は風上の縱列艦隊に比し優勢であつたから、この風下にある英部將コリンウツドの艦隊をして、敵戰列の後部を擊滅せしむべく命令した。

而して風上の縱列艦隊はネルソン自ら率ゐ、殘餘敵艦の行動を阻止するとともに、敵中央主力、殊に敵旗艦に突擊する任務を執つたのである。

かくて戰鬪はネルソンの作戰通りに開始され、世紀の大激戰を交へたのであるが、この結果は、佛西聯合艦隊の大敗となり、ナポレオンの抱く世界制覇の大野望は、先づ海上戰に於て敢なく潰えたのであつた。

一方、勝者英國としても、この海戰に於て、ネルソンの戰死といふ貴重なる犧牲を拂つたが、しかしこの犧牲により、英國は年來の目的たる海上權を完全に獲得することが出來たのである。

即ち海上權掌握により、世界に雄飛せんことを大國策とした英國は、西班牙、和蘭、及びフランスを、順次、海上より驅逐し、またデンマーク艦隊をコペンハーゲンに急襲して擊滅、以て歐洲即ち全世界を意味する制海權を手中に收め、全海洋の警察權を掌握したのであつた。

ジユツトランドの海戰

海上に於ける最後の敵佛國を擊滅した英國は、一九一四年より一九一八年に至る第一次歐洲戰爭に於て、こゝにも老獪なる術策をめぐらした。即ち大戰後に於ける自己の世界的地位を維持せんとして、極力海上勢力たる艦船及び兵力人員の損失を避けることを建前とし、北海南部に於ける獨逸艦隊を敢て攻擊することなく、その有利なる地勢を利用して獨逸を封鎖したのである。これが爲め、獨逸國民はこの饑餓戰術に苦しめられ、これが覇絆を脫するために、是が非でも、對英決戰によつてこれを解決しなければならなかつた。

而して、獨逸にとつては、その決戰が早ければ早い程有利であつたので、獨逸巡洋戰艦戰隊

は屢ゝ英國海岸を襲ひ、これを砲擊して、英國との一戰を誘つたのである。時に一九一六年五月三十一日、つひに英獨艦隊の遭遇となり、こゝに、ジユツトランドの海戰が展開されたのである。

後世戰略史家によれば、このジユツトランドの海戰は、前、中、後の三期に分つことが出來、その前期に於ける戰は、獨側ヘツパーの率ゐる巡洋戰艦五隻と、ビアトリーの指揮する英國巡洋戰艦六隻及び快速戰艦の四隻との戰鬪であつて、十九世紀に入るとともに俄かに發達した海軍技術は、豪壯なる兩國艦隊主力に見られ、近世海戰史の一頁を飾つた、實に堂々たる海戰であつた。

戰は初頭から併航戰によつて行はれ、しかも優勢なる英國艦隊は、決死の獨逸劣勢艦隊に終始壓倒せられ、巡洋戰艦二隻を擊沈されて、獨艦隊の勝利とはなつたのであるが、中期に於ける戰鬪は、英艦隊の猛然たる反擊に對し、獨艦隊はこれを擊滅せんとし、双方の主力艦隊は死力を盡して戰つた。

ジユツトランド海戰の最も注目せられる所以もこゝにある。兩國艦隊の勢力は獨側主力艦隊は戰艦十六隻、巡洋戰艦五隻及び舊式戰艦六隻計二十七隻を提督シエーアが率ゐ、これに對する英側はジエリコーの指揮下に戰艦二十八隻の優勢を保ち、一舉獨艦隊の殲滅を期した。

かくて獨側は二十七隻の軍艦を長蛇の如き單縱陣として、先づ英艦隊の中央に對し直角的に

航進、その先頭の砲火に依つて始められたが、英艦隊は戰術上有利な態勢を占めて、これに砲火を集中したので、一度英艦隊の中央に突入した獨艦隊は再び一齊回頭してその戰列を正し、こゝにシエーア指揮官の斷然たる決心となり、巡洋戰艦戰隊の突擊と、水雷戰隊の襲擊を下命した。

この爲め英國艦隊はその戰列を亂し、或は小隊毎に、或は戰隊毎に回頭して、獨側の痛擊より避退するに至つた。即ち、この中期の主要戰鬪に於ても、英國艦隊の敗退を認められるのであるが、この時に於ける獨逸艦隊のとつた曲列一齊回頭及び巡洋戰艦戰隊並に水雷戰隊の集團攻擊は、日本海海戰に於ける、我が東郷司令長官の執つた敵前回頭とともに、海戰史上正に特筆に價ひするものである。

斯くして後期戰鬪は夜戰となつたが、戰術的に優れた獨艦隊はこの時直線針路をとり、敵の水雷戰隊と交戰、夜戰に於ける全艦隊の指揮、艦の操縱、砲火の指揮、または探照燈の使用等に、卓絕したる技倆を發揮した。かくの如くジユツトランドの海戰は、優勢なる艦隊を持つ英國側の戰術的敗退であつたことは何人にも認められながら、その英國が結局に於て獨逸艦隊殲滅の目的を達したのは、實にこれ英國の老獪なる術策に依るものである。

即ちその傳統と優越を誇る英國が、このジユツトランドの海戰に於て完全に獨逸艦隊を包圍しながら、尙且つ獨逸に打ち勝つことを得ず、しかも獨逸主力艦五隻を擊沈せりといふジエリ

コー提督の驚くべき虚僞の報告を、事實として公表し、これによつて獨逸國民の人心を動搖させ、また遂にこの宣傳によつて米國の參戰を促がし、辛うじてその年來の宿望を達し得たのであつた。

日本海海戰

日本海海戰の戰はれた日露戰爭が如何にして勃發したかは、第五編「明治海軍より大東亞海戰へ」に讓るとして、その世界海戰史上に占むる地位は、前述のジユツトランド海戰以前に於て行はれた丈けに、獨艦隊の曲列一齊回頭及び巡洋戰艦々隊、水雷戰隊の襲擊の果敢なる戰法に先鞭を附け、而も文字通り敵艦隊全滅の赫々たる大戰果を擧げたことは、これ實に近代海戰の精華として列强驚嘆のうちに、特筆大書されたものであつた。

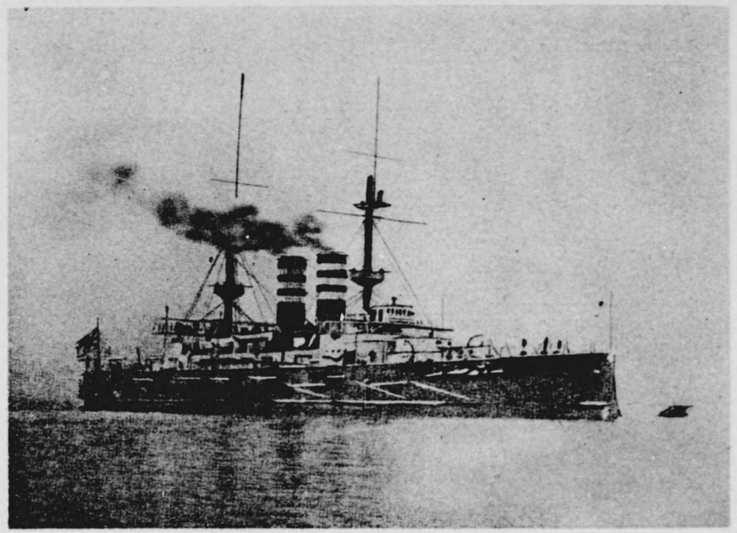
蓋し世界列强としては、日本艦隊が斯くまでの大戰果を獲得し得るとは、夢想だにしなかつたであらう。然らば日本海の海戰に於て、我が聯合艦隊が如何にして戰ひ、如何にしてその不滅の大戰果を獲得したか、以下これが詳細を、東郷聯合艦隊司令長官の大本營報告によつて知らう。

「東郷聯合艦隊司令長官報告」

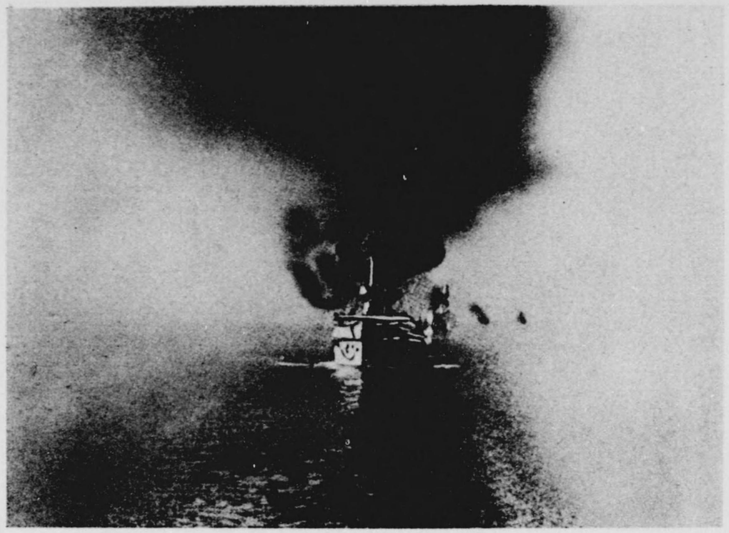
天佑ト神助ニ因リ、我聯合艦隊ハ五月二十七八日、敵ノ第二第三艦隊ト日本海ニ戰フテ遂ニ殆ント之ヲ撃滅スルコトヲ得タリ、始メ敵艦隊ノ南洋ニ出現スルヤ、上命ニ基キ當隊ハ豫メ之ヲ近海ニ迎撃スルノ計畫ヲ定メ、朝鮮海峽ニ全力ヲ集中シテ徐ニ敵ノ北上ヲ待チシカ、敵ハ一時安南沿岸ニ寄泊シタルノ後漸次北行シ來リシヲ以テ、其我近海ニ到達スヘキ數日前ヨリ豫定ノ如ク數隻ノ哨艦ヲ南方警戒線ニ配備シ、各戰列部隊ハ一切ノ戰備ヲ整ヘ直ニ出動シ得ル委勢ヲ持シテ各其根據ニ泊在セリ。

果然二十七日午前五時ニ至リ、南方哨艦ノ一隻信濃丸ノ無線電信ハ敵艦隊二〇二地點ニ見ユ、敵ハ東水道ニ向フモノノ如シト警報シ、全軍勇躍直ニ發動シ、各部隊ハ豫定ノ部署ニ準シテ對敵行動ヲ開始セリ、午前七時、内方警戒線ノ左翼哨艦タリシ和泉亦敵艦隊ヲ發見シテ、敵既ニ宇久島ノ北西二十五浬ノ地點ニ達シ北東ニ航進スルヲ報シ、巡洋艦隊（片岡中將直率）、東郷（正路）戰隊、續テ出羽戰隊モ午前十時、十一時ノ交、壹岐、對馬ノ間ニ於テ敵ト觸接シ、爾後沖ノ島附近ニ至ルマテ、此等ノ諸隊ハ時々敵ノ砲撃ヲ受ケシモ終始能ク之ト觸接ヲ保持シ、詳ニ時々刻々ノ敵情ヲ電報セシカハ、此ノ日海上濛氣深ク展望五浬以外ニ及ハサリシモ、數十浬ヲ敵影恰モ眼界ニ映スルカ如ク未タ敵ヲ見サル前既ニ敵ノ戰列部隊ハ其

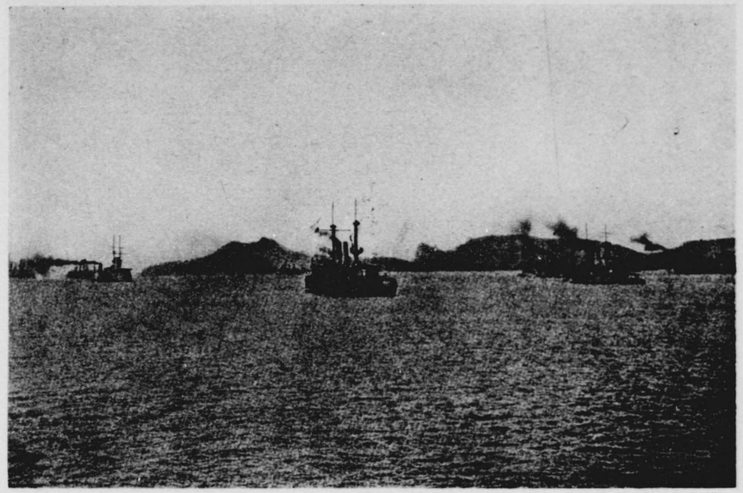
第二、第三艦隊ノ全力ニシテ特務艦約七隻ヲ伴フコト、敵ノ陣形ハ二列縱陣ニシテ其主力ハ右翼列ノ先頭ニ占位シ特務艦船ハ後尾ニ續行セルコト、又敵ノ速力ハ約十二節ニシテ尙北東ニ航進セルコト等ヲ知リ、本職ハ之ニ依リ、我主力ヲ以テ午後二時頃沖ノ島附近ニ敵ヲ迎ヘ、先ツ其左翼列先頭ヨリ擊破セントスル心算ヲ立ルヲ得タリ、主力隊(主戰艦隊)「東鄕大將直率」、裝甲巡洋艦隊「上村中將直率」、瓜生戰隊及各驅逐隊ハ、正午頃旣ニ沖ノ島北方約十海里ニ達シ、敵ノ左側ニ出ンカ爲メ更ニ西方ニ針路ヲ執リシカ、午後一時三十分頃出羽戰隊、巡洋艦隊及東鄕(正路)艦隊等モ敵ト觸接ヲ保チツヽ相前後シテ漸次ニ來リ合シ、同時四十五分ニ至リ正ニ我左舷南方數海里ニ始メテ敵影ヲ發見セリ、敵ハ豫期ノ如ク其右翼列ノ先頭ニ「ボロヂノ」型戰艦四隻ノ主力戰隊ヲ置キ、「ヲスラビヤ」「シソイベリキー」「ナワリン」「ナヒモフ」ヨリ成ル一隊左翼列ノ先頭ヲ占位シ、「ニコライ一世」外海防艦三隻ヨリ成ル一隊之ニ次キ、「ゼムチユーク」「イズムルード」ノ二艦ハ兩列ノ間ニ介在シテ前方ヲ警戒セルモノノ如ク、尙其後方濛氣ノ中ニ「オレグ」「アウロラ」以下二三等巡洋艦ノ一隊、「ドミトリドンスコイ」「ウラジミルモノマフ」其ノ他特務艦船等數浬ニ亙リテ連綿續航スルヲ仄ニ認ムルヲ得タリ、是ニ於テ全軍ニ戰鬪開始ヲ命シ、同時五十五分、視界內ニアル我全艦隊ニ對シ皇國ノ興廢此ノ一戰ニ在リ各員一層奮勵努力セヨノ信號ヲ揭揚セリ、而シテ主戰艦隊ハ、少時南西ニ向首シ敵ト反航通過スルト見セシカ、午後二時五分急ニ東ニ折レ、其正面



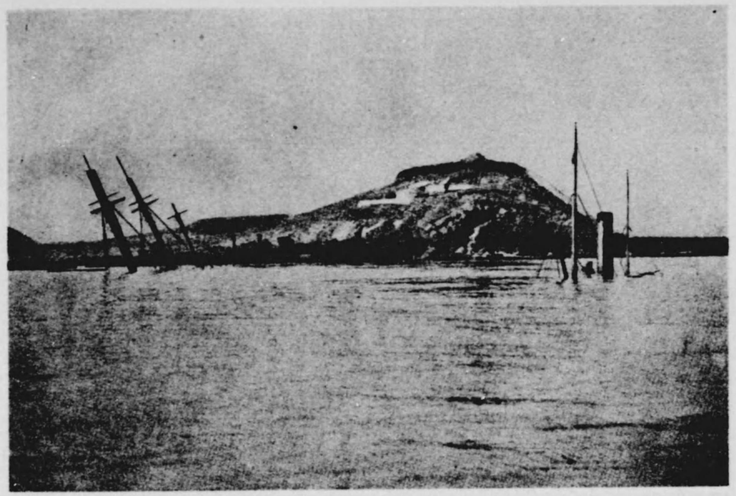
聯合艦隊旗艦　三　笠　〔日本海海戰〕



主力艦隊・敵艦邀撃に向ふ〔日本海海戰〕



我が聯合艦隊・根據地に集合〔日本海海戰〕



我が閉塞船旅順港口を閉塞〔日本海海戰〕

（五十二百　眞寫）

ヲ變シテ斜ニ敵ノ先頭ヲ壓迫シ、裝甲巡洋艦隊モ續航シテ其後ニ連リ、出羽戰隊、瓜生戰隊、巡洋艦隊及東郷(正路)戰隊ハ豫定戰策ニ準シ、孰レモ南下シテ敵ノ後尾ヲ衝ケリ、之ヲ當日戰鬪開始ノ際ニ於ケル彼我ノ態勢トス。

主力隊ノ戰況

敵ノ先頭部隊ハ主戰艦隊ノ壓迫ヲ受ケテ稍其右舷ニ轉舵シ、午後二時八分彼ヨリ砲火ヲ開始セシカ、我ハ暫ク之ニ耐エテ射距離六千米突ニ入ルニ及ビ、猛烈ニ敵ノ兩先頭艦ニ砲火ヲ集中セリ、敵ハ之カ爲メ益々東南ニ擊壓セラル、モノ、如ク、其左右兩列共ニ漸次東方ニ變針シ、自然ニ不規則ナル單縱陣ヲ形成シテ我ト併航ノ姿勢ヲ執リ、其左翼列ノ先頭艦タリシ「ヲスラビヤ」ノ如キハ須臾ニシテ擊破セラレ、大火災ヲ起シテ戰列ヨリ脫セリ、此時ニ當リ裝甲巡洋艦隊モ既ニ盡ク主戰艦隊ノ後方ニ列シ、我全隊ノ掩護砲火ハ射距離ノ短縮ト共ニ益々顯著ナル效果ヲ呈シ、敵ノ旗艦「クニヤージスワロフ」、二番艦「アレキサンドル三世」モ大火災ニ罹リ、戰列ヲ離レ、敵ノ陣形愈々亂レ後續ノ諸艦亦火災ニ罹レルモノ多ク、其騰煙西風ニ靡キテ忽チ海上一面ヲ蔽ヒ、濛氣ト共ニ全ク敵影ヲ包ミ、主戰艦隊ノ如キハ爲メニ一時射擊ヲ中止セルノ狀況ナリ、又我軍ニ於テモ各艦多少ノ損害ヲ蒙リ、淺間ノ如キハ後部水線ニ近ク三彈ヲ受ケテ舵機ヲ損シ、且ツ浸水甚シク、一時止ムヲ得ス列外ニ落伍セシカ、幾クモナク應急修理シテ再ヒ戰列ニ入レリ、是レ午後二時四十五分前後ニ於ケル彼我主力ノ戰

ノ朝潮ハ附近敵艦ヨリ猛射セラレ、共ニ一彈ヲ受ケテ一時危殆ニ陷リシモ幸ニシテ遂ニ無事ナルコトヲ得タリ、午後四時四十分ノ頃ニ至リ、敵ハ北方ニ血路ヲ開クヲ斷念セシニヤ、漸次南方ニ向ツテ遁走スルモノ、如ク、依テ我主隊ハ、裝甲巡洋艦隊ヲ先頭トシ、之ヲ追擊セシカ、少時シテ遂ニ敵影ヲ烟霧ノ中ニ失シ、南下スルコト約八浬、行ク々々我右方ニ離散彷徨セル敵ノ二等巡洋艦以下特務艦船等ヲ緩射シ、午後五時三十分主戰艦隊ハ、再ヒ針路ヲ北方ニ執リテ敵ノ主力ヲ索メ、裝甲巡洋艦隊ハ南西方ニ折レテ敵ノ巡洋艦ニ迫リ、爾後日沒ニ至ル迄、此兩戰隊ハ分離シテ各別ノ行動ヲ執リ、又相見ル能ハサリシ。

主戰艦隊ハ午後五時四十分頃、其左方近距離ニアリシ敵ノ特務艦「ウラル」ニ一擊ヲ加ヘテ直ニ之ヲ擊沈シ、尙北方ニ索敵シテ進航セル際、左舷艦首ニ當リ、敵主力ノ殘艦約六隻ノ一群カ北東ニ向ヒ遁走シツヽアルヲ發見シ、直ニ近ツキテ之ト併航戰ヲ開始シ、漸次敵ノ前方ニ出テテ其先頭ヲ擊壓セシカハ、敵ハ始メ北東ノ針路ヲ採リシモ次第ニ西方ニ屈折シ、遂ニハ北西ニ向針セルニ至レリ、此併航戰ハ午後六時ヨリ日沒迄連續シ、敵ハ大破ノ餘其砲力減少セルニ反シ、我沈着ナル射擊ハ益々其威力ヲ逞フシ、「アレキサンドル三世」ト見ヘタル敵艦ハ早ク列外ニ出テテ後方ニ落伍シ、先頭ニ占位セシ「ボロヂノ」型戰艦ハ午後六時四十分頃ヨリ大火災ヲ起シ、七時二十三分ニ至リ俄然爆烟ニ包マレテ瞬時ニシテ沈沒セリ、蓋シ火災ノ彈藥庫ニ及ヒタルナランカ、又當時南方ニ在テ敵ノ巡洋艦隊ヲ北方ニ追擊シツヽアリ

況ニシテ、勝敗ハ既ニ此間ニ決セリ。

我主力隊ハ如此敵ヲ南方ニ擊壓シ、煙霧ノ中敵影ヲ發見スル毎ニ緩徐ニ之ヲ砲擊シツヽ、午後五時頃ニハ既ニ敵ノ前路ニ出テ約南東ニ航進シアリシカ、敵ハ俄ニ北方ニ向首シ、我後尾ヲ回ハリテ北走セントスルカ如キヲ以テ、主戰艦隊ハ急ニ左十六點ニ一齊回頭シ、日進ヲ嚮導トシテ北西ニ向ヒ、裝甲巡洋艦隊モ共通跡ヲ過キタル後正面ニ變シテ之ニ續キ、再ヒ敵ヲ南方ニ擊壓シ、之ヲ猛射シ、午後三時七分敵艦「ゼムチユーグ」ハ裝甲巡洋艦隊ノ後方ニ突進シ來リシモ、遂ニ我砲火ニ因リ多大ノ損害ヲ蒙リ、既ニ戰鬪力ヲ失ヒタル「ヲスラビヤ」モ同時十分ニ沈沒シ、孤立セシ「クリヤージスワロフ」ハ益ミ大破シテ其一檣二煙突ヲ失ヒ、全艦火焰ニ包マレテ操縱スル能ハス、混亂セル爾餘ノ諸敵艦モ、更ニ多大ノ損害ヲ受ケツヽ、又其針路ヲ東方ニ採レリ、是ニ於テ主力艦隊モ亦一齊ニ右十六點ニ回頭シ、裝甲巡洋艦隊之ニ次キ遁レルヲ追テ益々敗敵ヲ掩擊シ、時々機ヲ見テ水雷發射ヲモ試ミ、午後四時四十五分ニ至ル迄、主隊ノ戰鬪ニ就テハ別ニ著シキ現象無ク、終始敵ヲ南方ニ壓シテ砲擊ヲ繼續シタルニ過キス、此間壯烈ノ事績トシテ特記スヘキハ、千早及廣瀨(順太郎)驅逐隊カ、午後三時四十分ノ頃、敵ノ廢艦「スワロフ」ニ對シ、勇敢ナル水雷攻擊ヲ敢行シタルコトニテ、前者ノ奏效ハ確實ナラサリシモ、後者ヨリ發セシ一水雷ハ敵艦ノ左舷後部ニ命中シ、須臾ニシテ艦體十度許リニ傾斜スルヲ見タリ、此ノ兩回ノ襲擊中、廣瀨驅逐隊ノ不知火及ヒ鈴木驅逐隊

シ裝甲巡洋艦隊ノ諸艦ハ、已ニ傾斜シテ進退自在ナラサル「ボロヂノ」型戰艦一隻カ、午後七時七分敵艦「ナヒモフ」ノ側ニ來リ遂ニ顚覆沈沒セルヲ目擊セリ、後日捕虜ノ言ニ依リ之レ卽チ「アレキサンドル三世」ニシテ、主戰艦隊ノ見タルモノハ「ボロヂノ」ナリシヲ知リ得タリ。

此時夕陽已ニ春キ、我カ驅逐隊、水雷艇隊ハ東南北ノ三面ヨリ漸次ニ敵ニ迫リ、已ニ襲擊準備ノ姿勢ヲ執レルヲ以テ、主戰艦隊ハ次第ニ敵ニ對スル壓迫ヲ弛メテ日沒（午後七時二十八分）ト共ニ東方ニ變針シ、同時ニ本職ハ龍田ヲシテ、全軍北航シテ明朝鬱陵島ニ集合スヘシト傳令セシメ、茲ニ當日ノ晝戰ヲ結了セリ。

出羽、瓜生戰隊、巡洋艦隊及東鄕（正路）戰隊の戰況

午後二時戰鬪開始ノ令下ニ出羽、瓜生戰隊、巡洋艦隊及東鄕戰隊ハ、何レモ我主力艦隊ト分離シ敵ヲ左舷ニ見テ反航南下シ、豫定戰策ニ準シテ敵ノ後尾ニ占位セル特務部隊及ヒ「オレグ」「アウロラ」「スウイートラナ」「アルマーズ」「ドミトリドンスコイ」「ウラジミルモノマフ」等ノ巡洋艦等ヲ脅威追擊セリ、出羽、瓜生戰隊ハ終始共同連繫シテ、午後二時四十五分ヨリ先ツ敵ノ巡洋艦隊ニ對シテ反抗戰ヲ開始シ暫時敵ノ後尾ヲ旋擊シテ其右方ニ出テ、更ニ併航戰ヲ試ミ、爾後優速力ヲ利用シ機宜我正面ヲ變シテ、或ハ敵ノ左ニ顯レ、又ハ其右ニ廻リ、攻擊ヲ持續スルコト約三十分ニシテ敵ノ後方部隊ハ漸次動搖潰亂シ、其特務艦船ノ

如キハ遂ニ右往左往シテ爲ス所ヲ知ラサルノ情態ニ陷レリ、此間午後三時ヲ過クルノ頃「アウロラ」ト見エタル敵艦單獨敵中ヨリ突進シ來ルモ、我カ猛射ニ多大ノ損傷ヲ負フテ擊退セラレ、又午後三時四十分頃突擊シ來リタル敵ノ驅逐艦三隻モ爲ス所ナクシテ擊攘セラレタリ。

出羽、瓜生戰隊協力攻擊ノ效果ハ、午後四時ノ交ニ及ンテ著シク發展シ、敵ノ後方部隊ハ全ク潰亂シテ個々分裂シ、其諸艦船皆多少ノ損害ヲ受ケタルモノノ如ク、特務艦船中ニハ既ニ操縱ノ自在ヲ缺クモノアルヲ見ルニ至レリ、瓜生艦隊ハ午後四時二十分頃三檣ニ烟突ヲ有スル敵ノ特務艦船一隻（或ハ「アナジ●ル」ナラン）カ一方ニ孤立スルヲ認メ、直ニ近テ之ヲ擊沈シ、尋テ四檣一烟突ノ特務艦船（或ハ「イルチツシエ」ナラン）ヲ猛射シテ殆ント之ヲ擊破セリ、此頃ヨリ巡洋艦隊、東鄕戰隊モ來リ加ハリ、出羽、瓜生戰隊ト協同シテ共ニ潰亂セル敵ノ巡洋艦及特務艦船ヲ掩擊シツ、アリシカ、午後四時四十分ノ頃北方ヨリ我主隊ニ擊壓セラレタル敵ノ戰艦（或ハ海防艦）四隻南下シ來リテ其巡洋艦ニ合力セシカハ、瓜生戰隊巡洋艦隊ノ如キハ少時近距離ニ於テ之ト對戰スルノ苦境ニ陷リ、孰モ多少ノ損害ヲ受ケシモ、幸ニ大ナラサルコトヲ得タリ。

是ヨリサキ出羽戰隊ノ旗艦笠置ハ、其左舷炭庫水線下ニ一彈ヲ蒙リシカ、爾來浸水漸ク增加シ、其應急修理ノ爲メ波靜カナル所ニ行クノ止ムヲ得サルニ至レリ、出羽司令官ハ自カラ笠

置、千歳ヲ率ヒ、麾下ノ他艦ハ之ヲ一時瓜生司令官ノ指揮下ニ屬セシメ、午後六時油谷灣ニ赴キ其將旗ヲ千歳ニ移シ夜ニ入リテ出港北行セシモ、笠置ハ修理ニ時間ヲ要シ遂ニ翌日ノ追擊ニ參加スル能ハサリシ。

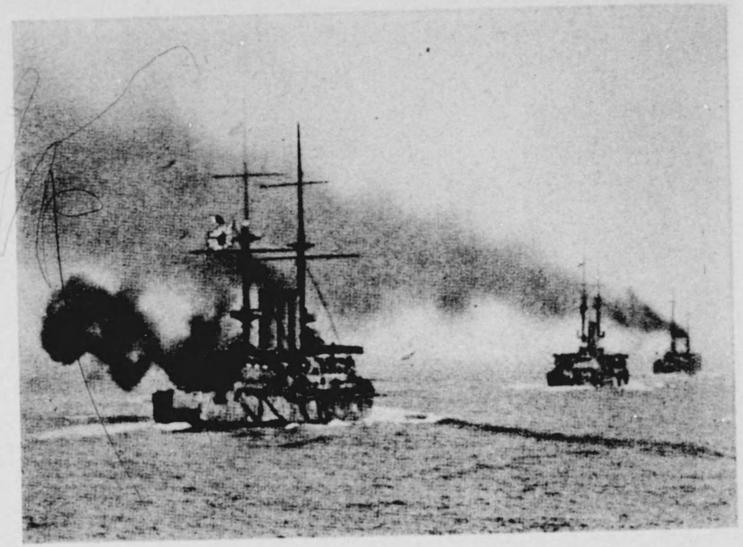
又瓜生戰隊ノ旗艦浪速モ後部水線ニ敵彈ヲ蒙リ、爲メニ午後五時十分頃同戰隊ハ一時避戰シテ其損所ノ應急修理ヲ爲セリ。

此時ニ當リ、敵ハ南北兩方面共ニ既ニ全軍潰亂滅裂ノ悲境ニ在リシヲ以テ、午後五時三十分ノ頃裝甲巡洋艦隊カ我主隊ト分離シテ此ノ方面ニ來リ、南方ヨリ敵ノ巡洋艦ヲ追擊スルト同時ニ、敵ハ群ヲ爲シテ悉ク北方ニ遁走シ瓜生戰隊 巡洋艦隊及東郷戰隊モ共ニ之ヲ追擊セシカ、其途上ニ於テ既ニ進退ノ自由ヲ失セル敵ノ廢艦「クニヤージスワロフ」及工作船「カムチヤトカ」ヲ發見シ、巡洋艦隊東郷戰隊ハ直ニ其擊滅ニ轉シテ、午後七時十分「カムチヤトカ」ヲ擊沈シ、尋テ巡洋艦隊ニ隨伴セル富士本水雷艇隊ハ突進シテ「クニヤージスワロフ」ヲ襲擊シ、同艦ハ尚ホ艦尾ノ小砲ヲ以テ最後ノ抵抗ヲ試ミシモ遂ニ我カ水雷二發ノ下ニ沈沒セリ、時午後七時二十分ナリ、幾ハクモナク此等ノ諸戰隊ハ鬱陵島集合ノ電令ニ接シ、何レモ戰ヲ止メテ北東ニ向針セリ。

各驅逐隊及水雷艇隊ノ戰況

二十七日ノ夜戰ハ、晝戰ノ終結後直ニ各驅逐隊及水雷艇隊ニ依リ猛烈果敢ニ開始セラレタリ、

此日朝來南西ノ强風浪ヲ揚クルコト高ク、水艇ノ操縱大ニ困難ナルヲ認メ、本職カ直率セル水雷艇隊ノ如キハ、晝戰開始ニ先立チ悉ク三浦灣ニ避泊セシ程ニシテ、夕刻ニ至リテ風較ミ和キシモ浪尙ホ靜マラス、洋中ノ水雷攻擊ハ我レニ不利尠カラサルノ狀況ナリシ、然モ各驅逐隊及艇隊ハ此一遇ノ時機ヲ失スルヲ恐レ、皆風濤ヲ冒シテ日沒前ニ來リ會シ、各々先ヲ爭フテ敵ニ當リ、藤本驅逐隊ハ北方ヨリ、矢島驅逐隊及河瀨艇隊ハ北東方向ヨリ敵主力ノ先頭ヲ壓シ、吉島驅逐隊ハ東方ヨリ、廣瀨(順太郎)驅逐隊ハ南東ヨリ其後尾ニ迫リ、福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)、青山、河田ノ艇隊等ハ南方ヨリ敵ノ主力部隊及其左後ニ併行セル巡洋艦ノ一群ニ追尾シ、日沒ノ頃次第ニ三面包圍ノ形勢ヲ爲セリ、敵ハ此勢威ニ屈シタルニヤ、日沒後倉皇南西ニ避ケ更ニ東方ニ變針シタルモノヽ如ク、午後八時十五分矢島驅逐隊カ第一擊ヲ敵主力艦隊ノ先頭ニ加ヘタルヲ始メトシテ、各驅逐隊水雷艇隊一時ニ突進シテ敵ノ周圍ニ蝟集シ、午後十一時頃ニ至ル迄ノ連續激烈ナル肉薄襲擊ヲ決行シタリ、敵ハ日沒ヨリ探照砲火ヲ以テ極力防戰セシモ遂ニ此攻擊ニ耐ヘス、其僚艦相失シテ四分五裂ノ情態トナリ各血路ヲ求メテ任意ニ運動セシカハ、我襲擊隊ノ追躡ト共ニ茲ニ一場ノ大混戰ヲ現出シ、少クモ敵ノ戰艦「シソイベリキ」裝甲巡洋艦「アドミラルナヒモフ」及ヒ「モノマフ」ノ三隻ハ、此間我カ水雷ニ罹リテ全ク其戰鬪航海力ヲ失ヒ、又我軍ニ於テモ福田艇隊ノ第六十九號艇(司令艇)青山艇隊ノ第三十四號艇(司令艇)及ヒ河田艇隊ノ第三十五號艇ノ三隻ハ襲擊ノ際敵



旅順出港の敵艦隊目がけ砲撃開始〔黄海海戰〕

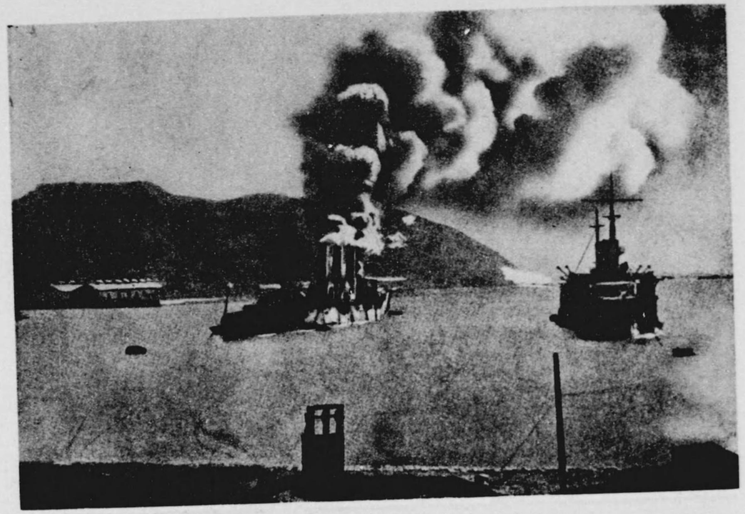
彈ノ爲メ擊沈セラレ、驅逐艦春雨、曉、雷、夕霧並ニ水雷艇鷲、第六十八號、第三十二號艇等ハ敵彈又ハ衝觸等ノ爲メニ多少ノ損害ヲ被リ、爾後一時戰鬪ニ參加シ難ク死傷モ又比較的尠シトセス、就中福田、青山及ヒ河田艇隊ノ死傷最モ多シ、但シ沈沒水雷艇三隻ノ乘員ハ友艇雁、第三十一號及ヒ第六十一號艇等ニ依リ救助收容セラレタリ。

後日捕虜ノ言ヲ聞クニ、當夜水雷攻擊ノ猛烈ナリシハ殆ント言語ニ絕シ、我カ艦艇連續肉薄シ來リシヲ以テ其應接ニ暇ナク、且其距離餘リ近キ爲メ備砲俯角ノ度ヲ過キ照準スル能ハサリシト云フ。

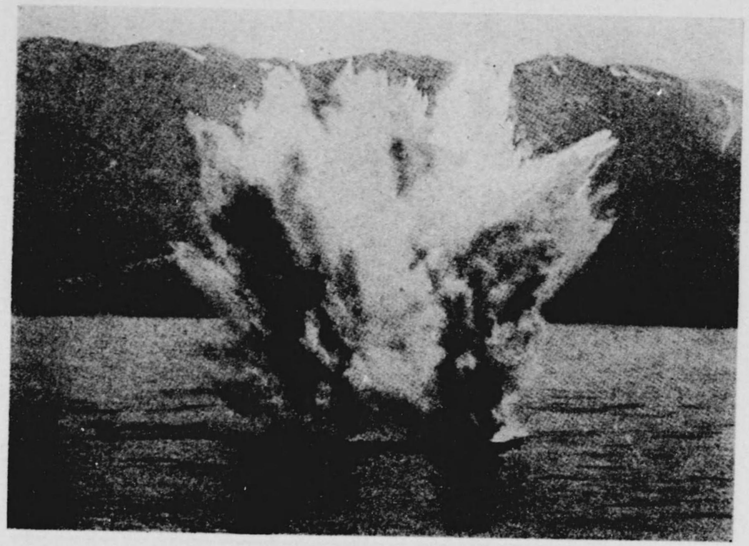
前記ノモノヽ外、鈴木(貫太郎)驅逐隊及ヒ白餘ノ水雷艇隊ハ當夜他方面ニ索敵セシカ、鈴木驅逐隊ハ二十八日午前二時ノ頃、韓崎ノ北東微東約二十七海里ノ地點ニテ敵艦二隻ノ北走スルヲ發見シテ直ニ之ヲ襲擊シ、其一隻ヲ轟沈セリ、後日生存捕虜ノ言ニ依レハ轟沈サレタル此敵艦ハ戰艦「ナワリン」ニシテ、同艦ハ兩舷ニ連續二發宛ノ水雷命中シ、少時ニシテ沈沒セリト云フ、自餘ノ諸艇隊ハ終夜各方面ヲ搜索セシモ遂ニ獲ル所ナカリシ。

二十八日ノ一般戰況

二十八日黎明、前日來ノ濛氣拭フカ如ク、主戰艦隊裝甲巡洋艦隊ハ既ニ鬱陵島ノ南方約二十海里ニ達シ、爾餘ノ戰隊並ニ前夜ノ襲擊ヲ果シタル各驅逐隊モ各航路ヲ異ニシテ、順次後方ヨリ集合ノ途上ニ在リ、午前五時二十分本職ハ敵ノ退路ヲ遮斷スル爲メ、麾下巡洋艦隊ヲ以



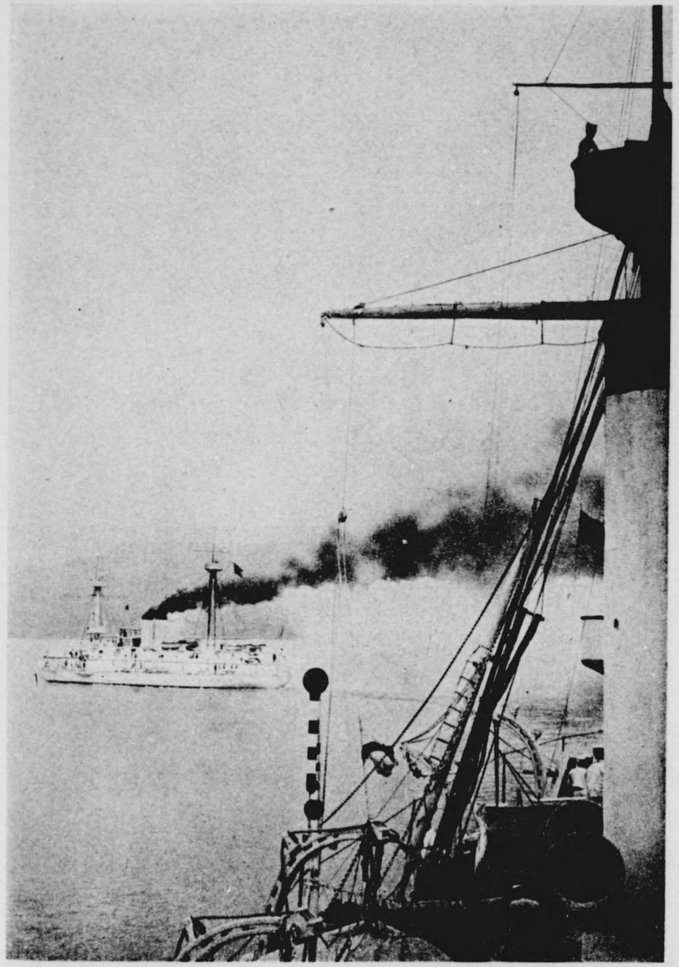
「ダエビボ」と「タラルバ」艦敵の下撃砲隊艦が我



〔戰海海黄〕破　爆　を　雷　機　る　せ　設　敷　の　敵

テ東西ニ捜索列ヲ張ラシメントスル際、後方約六十海里ニ占位シテ北進シツヽアリシ巡洋艦隊ハ、早クモ敵影ヲ發見シテ東方ニ當リ艦隊ノ煤烟數條アルヲ警報ス、幾何モナク同戰隊ハ敵ニ近ツキ復タ報シテ曰ク、敵ハ戰艦四隻（後ニ至リ二隻ハ海防艦ナルヲ知ル）、巡洋艦二隻ヨリナリ今北東ニ向針スト、是レ問ハスシテ殘敵ノ主力タルヤ瞭ナリ、此ニ於テ主戰艦隊巡洋艦隊ハ其針路ヲ反轉シ、漸次東方ニ向ヒテ敵ノ前路ヲ扼シ、東郷、瓜生戰隊亦巡洋艦隊ニ合シテ敵ノ後方ヲ抑ヘ、午前十時三十分頃竹島ノ南方約十八海里ノ地點ニ於テ全ク此敵ヲ包圍セリ、敵ハ則チ戰艦「ニコライ一世」「アリヨール」海防艦「ケネラル、アドミラル、アブラキシン」「アドミラル、セニヤービン」及ヒ巡洋艦「イズムルード」ノ五隻ニシテ、他ノ二隻ノ巡洋艦ハ遙カニ南方ニ後レテ當時其影ヲ失ス、固ヨリ敗餘ノ敵艦已ニ多大ノ損傷ヲ負ヘルノミナラス、我優勢ニ抵抗シ得ヘキニアラサレハ主戰艦隊裝甲巡洋艦隊カ先ツ砲火ヲ開クヤ須臾ニシテ敵艦隊司令官ネボカトフ少將ハ其部下ト共ニ降意ヲ表シ、本職ハ特ニ其將校以上ノ帶劍ヲ許シテ之ヲ受ケタリ、然ルニ敵艦「イズムルード」ノミハ降伏ニ先タチ其快速力ヲ以テ南方ニ遁レ、我カ東郷戰隊ニ遮ラレテ復タ東方ニ走レリ、此時油谷灣ヨリ歸航シタル千歳モ其途上ニ於テ敵ノ驅逐艦一隻ヲ擊沈シタル後此地ニ來リ會シ、直ニ轉シテ「イズムルード」ニ追尾セシカ遂ニ及ハスシテ之ヲ北方ニ逸セリ。

是ヨリサキ、瓜生戰隊カ北航ノ途上ニアルトキ、午前七時頃西方ニ一隻ノ敵影ヲ發見シ、音羽



軍艦扶桑（手前）と鎮遠

（寫眞　百二十九）

新高ノ一小隊ヲ有馬晉羽艦長ノ指揮下ニ之カ撃滅ノ爲メ分派セシカ、同隊ハ午前九時ニ至リテ漸ク敵ニ近接シ、其敵艦「スウエトラーナ」カ一驅逐艦ヲ伴ヘルモノナルヲ知リ、益々之ヲ追窮シ戰鬪約一時間ノ後午前十一時六分竹邊灣沖ニ於テ全ク「スウエトラーナ」ヲ撃沈シ、尙ホ新高ハ其時來會シタル驅逐艦叢雲ト共ニ、殘レル敵ノ驅逐艦「ブイストリー」ヲ追撃シ、午前十一時五十分遂ニ之ヲ竹邊灣北方約五海里ノ無名灣ニ擱坐破滅セシメタリ、而シテ右二敵艦ノ生存乘員ハ我特務艦亞米利加丸及ヒ春日丸ニ依リ悉ク救助收容セラレタリ。

敵ノ降伏ヲ受ケタル聯合艦隊ノ大部ハ、爾後尙ホ其地附近ニ漂泊シテ敵艦四隻ノ捕獲處分ニ從事シツヽアリシカ、午後三時頃南方ヨリ敵艦「アドミラル、ウシヤーコフ」ノ來ルヲ發見シ磐手、八雲ノ一隊ハ直ニ之ニ向ヒ、午後五時過キ其南走スルヲ追及シテ先ツ降伏ヲ勸告セシモ之ニ應セス、反テ彼ヨリ砲火ヲ開キシカハ、止ヲ得ス砲撃シテ遂ニ之ヲ撃沈シ、其生存者約三百名ヲ救助收容セリ、又驅逐艦漣、陽炎ハ午後三時三十分ノ頃、鬱陵島ノ南西約四十海里ニ於テ東方ヨリ遁走シ來ル敵驅逐艦二隻ヲ發見シ、極力之ヲ北西ニ追躡シ、午後四時四十五分追及シテ戰鬪ヲ開始セシニ、敵ノ後續驅逐艦ハ白旗ヲ掲ケテ降意ヲ表セリ、依テ漣ハ直ニ之ヲ捕獲セシニ、此驅逐艦ハ「ビエードウイ」ニシテ、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將及ヒ其幕僚ノ移乘シ居ルヲ知リ其乘員ト共ニ之ヲ捕虜トナセリ、尙ホ陽炎ハ他ノ驅逐艦ヲ追撃シテ午後六時三十分ニ及ヒシモ遂ニ之ヲ北方ニ逸セリ、又午後五時頃西方ニ索敵

シタル瓜生戰隊及矢島驅逐隊ハ、敵艦「ドミトリドンスコイ」ノ北走スルヲ發見シ、之ヲ追尾シテ午後七時鬱陵島ノ南約三十海里ニ至リシ頃、恰モ好シ竹邊灣方向ヨリ來會シツヽアリシ音羽、新高ノ一隊並ニ驅逐艦朝霧、白雲、吹雪等カ既ニ西方ヨリ敵ニ迫リテ砲撃ヲ開始シ瓜生戰隊ト共ニ之ヲ挾撃スルノ好位ヲ制シ左右相待テ日沒後マテ之ヲ猛撃殆ント敵ヲ撃破シ得タルモ、未タ撃沈スルニ至ラスシテ遂ニ夜ニ入リ其影ヲ失セリ、此攻撃中止ト共ニ吹雪及ヒ矢島驅逐隊等連續之ヲ襲撃シ、其效果不明ナリシモ翌朝ニ至リ「ドミトリドンスコイ」ハ鬱陵島ノ東南岸ニ漂ヒ遂ニ沈沒シタルヲ發見セリ、而シテ同島ニ上陸シタル其生存者ハ春日、吹雪等ニテ救助收容セラレタリ。

聯合艦隊ノ大部カ北方襲撃ノ戰果ヲ收ムルニ汲々タル際、南方前日ノ戰場ニ於テモ亦相應ノ殘獲アリタリ、此日早朝戰場掃除ノ任務ヲ持シテ出發シタル特務艦信濃丸、臺南丸及ヒ八幡丸ハ、韓崎ノ北東約三十海里ノ地點ニ於テ敵艦「シソイベリキー」カ、前夜ノ水雷攻撃ニ傷ツキ將サニ沈沒セントスルヲ發見シ、之カ捕獲ノ手續ヲ了シテ其乘員ヲ救助收容セリ、而シテ、該艦ハ午前十一時零五分終ニ沈沒セリ、又驅逐艦不知火、特務艦佐渡丸モ午前五時三十分頃、對馬琴崎ノ東方約五海里ニ於テ敵艦「アドミラルナヒモフ」カ沈沒ニ垂ントセルニ會シ、續テ又敵艦「ウラジミルモノマフ」カ著シク傾斜シテ其附近ニ來ルヲ發見シ、孰レモ佐渡丸ニテ捕獲處分ヲ爲セシカ、二艦共ニ大破シテ浸水甚タシク遂ニ其乘員ヲ救助シ得タル後

午前十時ノ交相前後シテ沈沒セリ、其時又敵ノ驅逐艦「グロムキー」モ此附近ニ來リシカ、遽カニ北方ニ遁逃セシヲ以テ、不知火ハ直ニ之ヲ追擊シテ蔚山沖ニ至リ午前十一時三十分頃水雷艇第六十三號ト協力攻擊シ、敵砲ノ沈默スルニ及ンテ之ヲ捕獲シ其乘員ヲ捕虜トセリ。

該艦亦大破シテ遂ニ午後零時四十三分ニ沈沒シタリ、其他麾下砲艦特務艦等ニテ戰後戰場附近ノ沿岸等ヲ搜索シテ救助收容シ得タル擊沈敵艦ノ乘員尠カラス、戰利艦五隻ノ捕虜ト合シテ其數殆ント六千ニ達ス。

以上ハ五月二十七日午後ヨリ二十八日午後ニ亙レル海戰ノ經過ニシテ、其後當隊ノ一部ハ尙ホ遠ク南方ニ敵ヲ搜索セシモ遂ニ又其隻影ヲ見ス、日本海ヲ通過セントセシ敵艦隊約三十八隻ニシテ、我擊滅又ハ捕獲ニ洩レタリト認ムルモノハ、巡洋艦、驅逐艦、及ヒ特務艦各數隻ニ過キス、而シテ此二日間ノ戰鬪ニ於テ我艦隊ノ失ヒタルモノアルモ、一トシテ今後ノ役務ニ支障アルモノナシ、又死傷ハ全軍ヲ通シ將校以下戰死百十六名、負傷五百三十八名ニシテ其細別ハ別ニ報告セシカ如シ、此對戰ニ於ケル敵ノ兵力我レト大差アルニ非ス、敵ノ將卒モ亦其祖國ノ爲メニ極力奮鬪シタルヲ認ム、然カモ我聯合艦隊カ克ク勝ヲ制シテ、前記ノ如キ奇蹟ヲ收メ得タルモノハ一ニ

天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ固ヨリ人爲ノ能クスヘキニ非ス、殊ニ我軍ノ損失死傷ノ僅少ナリシハ、歷代神靈ノ加護ニ依ルモノト信仰スルノ外ナク、嚮キニ敵ニ對シ勇進敢戰シタ

ル麾下將卒モ、皆此成果ヲ見ルニ及ンテ唯々感激ノ極言フ所ヲ知ラサルモノ、如シ。

大東亞海戰

日本海の海戰は前記東鄕司令長官の報告に見る如く、當時世界最大の强國露西亞の大艦隊を全滅し、以て列强海軍を瞠若たらしめたのであるが、今次大東亞戰爭に於ける海戰に至つては、これ實に近代海軍の全智全能を總動員して行はれたもの、その構想の雄大、規模の廣汎、戰果の甚大、正に前古未曾有、雄渾無比の大海戰たるを失はない。

即ち開戰劈頭、間髪をいれず、米國東亞侵攻の最大據點ハワイを强襲、一擧に敵太平洋艦隊主力及び航空兵力を殲滅し、一轉して、英國東洋艦隊主力をマレー沖に擊滅、更にエンダウ沖、ジヤバ沖の兩海戰に於て、敵西南太平洋聯合艦隊を捕捉殲滅し、逐次敵艦隊勢力を消滅せしめ、更にシンガポール、ポートダーウイン方面に激戰を展開して、こゝにも赫々たる戰果を獲得、更に、またバリ島沖海戰及びバタビヤ沖、スマトラ沖の兩海戰に於て、殘存米英蘭聯合艦隊を全滅せしむるに至り、我が無敵海軍の威容大東亞海を壓し、制海、制空の兩權を完握するに至つた。

而かも機至るや、印度洋大作戰の展開となり、セイロン島コロンボ及びツリンコマリを猛襲

し、敵の印度洋海軍勢力を撃滅し、曾つて七つの海を横行せる大英海軍をして寂として聲なからしめたのである。かくの如き廣大雄渾、善謀果斷なる海上作戰は史上實に類例なく、その世界海戰史上に占むる地位またおのづから明らかであるが、それが詳述は今後の研究及び主力決戰を待つて特筆しよう。

ハワイ海戰（昭和十六年十二月八日）

昭和十六年十二月八日未明、帝國海軍航空部隊のハワイ大空襲は決行された。

この日洋上は北東十七米突の强風吹き荒び、海面には濛々たる密雲低く垂れ籠めてゐたが洋上にありし我が海軍攻擊部隊に對し、敵根據地オアフ島攻擊の歷史的命令が下つた。航空編隊指揮官の實戰談によれば、「さすがに感激と昂奮とで全身が熱くなるのを覺えた」と云はれてゐるが、この時、甲板上に整列した全員の齊しく仰いだのは、かの三十六年前皇國の興廢を賭けた日本海海戰に於て、旗艦三笠の檣上高く揭げられたZ旗であつた。

つゞいて航空部隊指揮官の「各員粉骨碎身誓つてその任務を全うせよ」の訓示に、將兵の意氣は大いに揚り、東へ向つて驀進を續ける時、遂に進發命令は下つた。而して指揮官が「奇襲作戰に成功せり、全員突擊せよ」と下命するや、一機また一機、動搖する甲板を發し、上空に編隊を整へ、ハワイ目がけて急襲した。

我がハワイ大空襲は、かくの如くこの二大編隊の雷擊機を以て突入し、しかも大編隊は眞珠灣の正面を避け、その背後の山腹より、大膽極りなき低空飛行を敢行、强烈無比なる雷擊奇襲を展開したのであつた。

即ち指揮官談によれば、我が雷擊機大編隊は、朝霞の中に眠る眞珠灣を脚下にみるや、直ちに編隊を解き、各隊はその任務の相違によつて或は高度を高く、或は低く、全員決死の攻擊姿勢に移つたのであるが、この時、眞珠灣は未だ安眠より醒めず、整然たる兵舍、海岸に並んだ重油タンクも白く、しかも港内には米國太平洋艦隊主力艦が二列縱隊となつて投錨してゐたのである。

これぞ正に絕好の攻擊目標であつた。今ぞ、全員突擊の時至る。早くも我が雷擊機は、亂雲を切つて一直線に突入した。然しながら、眞珠灣は灣底淺く、灣口もまた狹く、編隊の雷擊は極めて困難な狀態にあつたので、我が雷擊隊は各々單機となつて突進、一發必中の魚雷を發射した。

この間、僅か三、四分、しかも敵の對空防禦砲火は未だ開かず、また戰鬪機の姿もない。奇襲作戰は完全に成功した。指揮官は、「われ奇襲に成功せり」の第一報を發した。

而かも我が空襲は愈よ熾烈を極め、雷擊機の攻擊に續いて急降下爆擊隊が眞一文字となつて突擊、敵飛行場及び地上飛行機を目標にこれを爆碎した、この時に至り漸く敵高射砲彈が我が

機體の周圍に炸裂し始めたが、沈着なる我が勇士等は砲彈炸裂の中にあつて、更に大型爆彈を投下した。

一方空中よりの攻擊にのみ氣を奪はれてゐる敵艦隊に對し、その時突如として、我が特別攻擊隊の奇襲作戰は開始され、轟然たる爆音とともに火柱天に冲した。恐らくこれ、敵戰艦アリゾナ型の火藥庫爆發なるべく、もろくも船體の下半分がけし飛ばされ、おびただしき重油をふき出してゐるのが目認された。これこそわが特別攻擊隊と雷擊機隊、急降下爆擊隊、戰鬪機隊との協同戰果の一つであつた。

即ち大本營發表（十二月八日）に曰く、「擊沈せるもの戰艦五隻、甲巡または乙巡二隻、給油船一隻計八隻。大破せるもの戰艦三隻、輕巡二隻、驅逐艦二隻計七隻。中破せるもの戰艦一隻、乙巡四隻計五隻。合計二十隻を擊沈破し、その他敵陸海軍航空兵力に與へた損害は、銃爆擊により炎上せしめたもの約四百五十機、擊墜せるもの十四機、計四百六十四機に及び、右の外擊破せるもの多數を算し、格納庫十六棟を炎上、二棟を破壞した。」

これに對し我が方の損害は僅かに飛行機二十九機、歸還せざる特別攻擊隊の特殊潛航艇五隻であつたことは、今更新しく說くを要すまい。

マレー沖海戰（昭和十六年十二月十日）

ハワイ海戰に於て米太平洋艦隊全主力を一擧に屠つた、我が海軍航空部隊が、これより二日後の十二月十日、マレー半島クワンタン沖に於て、更に傳統を誇る英國海軍が不沈戰艦として世界に誇示したプリンス・オブ・ウエールズ及びレパルスを强襲、必殺の攻擊精神をもつて、これを擊滅したことは、正に世界戰史を飾る壯絕の記錄である。

而もハワイ海戰がその電擊奇襲戰法により、作戰としての妙味を發揮したに對し、このマレー沖海戰は、不沈を誇る敵戰艦に對し、正面から戰鬪態勢を整へて雌雄を決した一戰なるが故に、我が海軍の實力が、英海軍に立ち勝つてゐることを實證したものである。

まさしくこれは、科學技術と精神力とを最高度に發揮した、海空立體戰の典型と云ふべきである。

即ち帝國海軍は、開戰劈頭より英國東洋艦隊特にその主力たるプリンス・オブ・ウエールズ及びレパルスの動靜を注視しつゝあつたのであるが、これよりさき、英國政府は時局の緊迫とともに東洋艦隊を充實强化すべく、主力艦を派遣することゝし、昭和十六年十二月二日、プリンス・オブ・ウエールズ(三萬五千トン)をシンガポールに着せしめ、八日我が電擊作戰が開始されるや、英東洋艦隊司令長官フイリツプはシンゴラ、コタバル方面に日本軍上陸の報を得て、直ちに出動命令を發し、こゝに旗艦プリンス・オブ・ウエールズはレパルス及び驅逐艦三隻と共にシンガポールを出港、針路を北方にとり、我が輸送船團を襲擊すべく進發したのである。

我が潛水艦がこれをアナンバス島北方に於て發見したのは、九日午後三時十五分であつた。この日荒天にして雲低く、海上各所に猛烈なるスコールがあつたが、わが潛水艦はこの惡條件のうちによく敵艦隊と接觸を保ちつゝあつたが、午後五時二十五分頃、惜しくも雨の爲め敵影を見失ふや、急遽これを全軍に通報した。洋上にあつてこれを受電した我が艦隊は、直ちに戰鬪配置についた。そして航空部隊の各隊は、魚雷爆彈を抱いて飛び立つた。

マレー沖海戰に赫々たる偉勳を樹てた我が航空隊將士の實戰談によれば、第一次出動の際に於て、

「この夜は生憎、月もない夜であつた。日沒までに僅か一時間半、敵を搜索するには困難なる狀況であつた。然し全機は皆懸命に、我が潛水艦が見失つたといふ地點を探して、南へ南へと進んだ。前方に大きな積亂雲がある。忽ち猛烈なスコールがあつた。その内日が暮れて暗くなつた。然し我々は遂に敵艦隊を發見することが出來なかつた。隊長の〝引返せ〟との命に、我々は涙を呑んで引返したのだ」

とある。

かくて空しく基地に歸つた海鷲達の眠られぬ夜が明けた。然るに十日午前三時四十分、我が潛水艦は再び敵艦を發見した。然しこの日もまた前日の積亂雲海上を去らず、幾何もなくして「敵主力艦との接觸を失ふ」との再電を受けた。

こゝに於て航空部隊は索敵隊を出動せしめることゝなり、更に午前八時十五分この索敵隊の後を追つて各部隊は、全機魚雷と爆彈を抱いて出發したのであるが、先發した我が索敵隊の數時間の努力は遂に酬いられ、〇〇少尉の操縱する三番機はその積亂雲の中より、敵主力艦を發見した。

三番機は下降した。同時に艦隊の防禦砲火が開かれた。三番機は、直ちに「午前十一時四十五分、敵主力艦見ゆ、北緯四度、東經百三度五十五分」と感激の無電を全機に發し、尙も敵艦隊と接觸を保ちつゝ、これを確認、午後零時五分、再び、「敵主力は驅逐艦三隻より成る直衛を配す、敵艦はキング・ジョージ型及びレバルス」と打電、爾後冷靜沈着に敵艦と接觸しながら、友機の誘導に努めた。

この三番機の報告により、先づ〇〇大尉の指揮する爆擊機〇〇機が、午後零時四十五分この地點に到達、〇〇の高度より爆擊の態勢を整へるや、下方海上にある敵艦隊の防禦砲火は猛然として開かれ、視界は忽ち彈煙に遮られたが、この中にあつて尙沈着なる我が編隊の、〇〇爆擊が一齊に敢行された。

我が必中の大型爆彈は、三萬二千トンの快速戰艦レバルスを目がけて集中した。濛々たる黑煙とともに、舷側からは數條の水煙が立上り、敵主力の序列は見苦しきばかり亂れ始めた。

このレバルス襲擊に續いて、わが海軍航空部隊が敵の不沈戰艦プリンス・オブ・ウエールズ

に對し、第一回の雷擊を敢行したのは、午後一時八分、〇〇少佐と〇〇大尉の指揮する〇〇機によつて開始された。

即ち〇〇機隊は索敵三番機よりの敵主力發見の通報に、急遽、通報地點に着到した。時既に敵主力の序列は亂れ、プリンス・オブ・ウエールズはその後方中央に、レバルスは我が爆擊によつて太い黑煙を吐いてゐた。時を移さず〇機と〇機は縱に分れて急降下突擊を決行した。

而かも敵艦隊五隻の防禦砲火は益々猛烈を極め、炸烈する高角砲二十五聯裝機銃、副砲等、敵の死力を盡す對空砲火は、驚くべき威力を以て我が突擊隊を包み、就中、プリンス・オブ・ウエールズの發射に至つては、同艦搭載の縱橫各五列に並べた二十五聯裝三基、二十聯裝一基、及び一キロ彈丸を毎分八百發以上を發射する八聯裝ポムポム機銃四十八基を合せ、一分間六萬發發射可能の防禦力を以て、われを防いだ。

しかし〇〇少佐と〇〇大尉の指揮する各機は、この驚くべき彈幕の中にあつて、正確無比なる攻擊を決行、早くも一番機の放つた空雷は見事プリンス・オブ・ウエールズに命中、またレバルスを襲つた一番機の魚雷も命中した。太い水柱を上げた敵の二主力艦は、恰も巨鯨傷を負つて狂ふが如くだつた。そしてウエールズは右方へ遁れ、レバルスは左方へ反轉した。それと見て、二番機は、左右より魚雷を猛射した。かくて午後一時二十二分、全機より發射された魚雷の數、ウエールズに〇發、レバルスに〇發である。

この間、僅々八分の死鬪であつた。而かも、〇〇大尉と〇〇中尉の率ゐる雷擊隊は、息もつかせず、猛然手負ひの二艦を强襲すれば、突如、プリンス・オブ・ウエールズは水煙もろとも四十五度に傾斜した。

然るにウエールズは不思議にもその傾斜より再び元の姿勢に立直り、依然白煙を吐くレバルスとともに、我が襲擊よりのがれんとした。

恰もよし、この二艦がシンガポール方面に向つて、必死の遁走を試みてゐた午後一時四十八分、更に新たなる攻擊隊が遙かアナンバス諸島より到達、敵に最後の止めをさすべく、凄烈なる第三回爆擊が開始された。

その時、既にレバルスの速力頓に落ち、ウエールズの後方二五〇〇米の海上に氣息奄々たる體であつたが、我が新手の攻擊隊來るとみるや、死力を盡して防禦砲火を開き、こゝに三たび壯絕なる海、空攻防の立體戰が展開された。しかしわが必殺の魚雷はつひにレバルスに火災を起さしめ、次第に舷を傾けてその最後を思はしめた。そしてこれをみて近寄り來つた敵驅逐艦が、わが魚雷により轟沈した時には、レバルスもその後部甲板を海水に浸し、軈て全く沈沒したのであつた。

然しプリンス・オブ・ウエールズのみは、その深傷にあへぎつゝも、我が猛擊に對し底知れぬ粘りをみせ、艦既に左に傾き、その中央部は火災を起し、速力も十乃至七に減じながら、尙も

北進を續けてゐた。

俄然マスト近く大爆發が起つた、黑煙濛々天に沖した。火藥庫の爆發だ。されど、プリンス・オブ・ウエールズはかくてもなほ態勢を崩さず、遲々たる航進を續け、敵驅逐艦一隻は健氣にもその後方百米に從つてゐる。

然し、軈てウエールズの速力は遽かに落ちた。驅逐艦が進んでその舷側に横付けになつた。その瞬間、突如轟然たる音響とともにさすがのウエールズも、三萬五千トンの巨體を海底に沈めたのであつた。

凄壯極りなきマレー沖の海戰は、戰艦レパルス及びプリンス・オブ・ウエールズと、その運命を共にした英東洋艦隊司令長官トマス・フイリツプ以下司令部幕僚の戰死によつて終熄し、こゝに帝國海軍は、開戰第三日にして、英國東洋艦隊主力全滅と云ふ驚異的戰果をあげたのであつた。

エンダウ沖海戰（昭和十七年一月二十七日）

エンダウ沖海戰の戰果もまた海戰史上特筆すべきものがあつた。

卽ちエンダウ沖海戰は、大本營發表（二十九日）にある如く、昭和十七年一月二十七日、帝國驅逐艦二隻は、「我が輸送船團攻擊を企圖してシンガポールより出擊せる驅逐艦サネツト及

びバンバイヤー二隻をマレー東岸エンダウ沖に發見、直ちに攻擊、茲に二對二の同等勢力の驅逐艦戰を展開」その堂々たる一騎討の決戰に於て、英驅逐艦サネツトを擊沈し、他の一艦バンバイヤーに火災を生ぜしめたのである。

大東亞戰開始以來、ハワイ及びマレー沖海戰等の各戰鬪は、いづれも世界を驚嘆せしむる大戰果であるが、それは航空部隊及び潛水艦の活躍によつてなされた。然るにエンダウ沖の海戰は、日英兩海軍の同等勢力を有する驅逐艦對驅逐艦の堂々たる砲戰であり、その砲力によつて勝敗を決したのである。こゝに特筆すべき意義がある。

本海戰に於て擊沈された英驅逐艦サネツトは、九百五十トン、四吋砲四門、二十一吋魚雷發射管四門を、また炎上遁走せるバンバイヤーは千九十トン、四吋砲四門、二十一吋魚雷發射管六門を裝備してゐた。由來、「見敵必戰」の戰法を豪語する英國海軍は、その實力に於てたしかに米國海軍に優ること衆目の見るところであるが、その英海軍に對し、二對二の同等勢力の驅逐艦戰を展開し、一を擊沈、一を炎上敗走せしめた帝國海軍砲術力の優秀性は、實に東郷元帥の遺訓たる「百發百中の一砲は、能く百發一中の砲百門に勝る」の精神を以て貫かれた訓練の賜であつて、しかも我れに一彈一片の被害もなかりしは、その實力の差、格段なることを示したものである。

ジヤバ沖海戰（昭和十七年二月四日）

ジヤバ沖海戰はハワイ、マレー沖兩海戰と同樣、我が海軍航空部隊の猛襲により、蘭印艦隊主力を殲滅、これにより大東亞海の制海權及び制空權を完握し、以て皇軍の南方第二段階作戰を極めて有利に導いた海戰である。

即ち皇軍のマニラ占領によつて、その基地を喪失した米國亞細亞艦隊は、遙か南方に遁走して蘭印艦隊と合し、ジヤバ島を據點として秘かに蠢動の機を狙つてゐた。帝國海軍航空部隊は本海戰前日の昭和十七年二月三日、ジヤバ島の敵主要航空基地スラバヤ、マラン等に大空襲を敢行、敵機八十五機を撃破し、更にその鋭鋒をゆるめず、索敵出動した。果然、同海上を遊弋しつゝある米蘭聯合艦隊の大艦列を發見するや、大本營發表（二月六日）の如く「二月四日驅逐艦數隻を伴ふ敵艦隊主力をジヤバ海カンゲアン島南方三十浬上に發見、機を逸せずこれに猛攻を加へ」たのである。

これら敵聯合艦隊は、開戰以來帝國海軍の攻撃を恐れ、全くその行衛を晦しつゝあつたもので、發見と同時にこの好餌を得た我が海鷲は、猛然とこの大艦列めがけて殺到し、敵全艦が必死の防空砲火を吐きつゝ、三十餘節の快速を利して遁走せんとするに對し、海鷲獨自の强烈果敢なる猛撃を加へ、遂に蘭巡ジヤバ型一隻を瞬時にして轟沈、續いてトロンプを撃沈せしめ、

更にジヤバ型一隻、トロンプ型一隻及び米甲巡オーガスタの三艦を大破、この外五千トン級敵船一隻をも撃沈する大戰果をあげたのであつた。

この戰果につき大本營發表は、終始その堅持せる愼重正確なる報道方針の下に、轟沈及び大破後沈沒以外の敵二艦の蒙つた損害を「中破」と公表、またその二月六日の發表に對し、

「ジヤバ沖海戰において撃沈と傳へられたるヒユーストン型一隻はオーガスタの撃沈なりしこと判明せり」「ジヤバ沖海戰において大破間もなく沈沒と發表せるデ・ロイテルはトロンプなりしが如し」

と三月三日これを訂正し、飽迄我が戰果發表の正確を期したのである。戰前同方面の和蘭艦隊の兵力は、乙級巡洋艦四、五隻を以てその主力としたに過ぎなかつたから、このジヤバ沖海戰の大戰果により、和蘭艦隊主力はこゝに事實上殆ど潰滅するに至つたわけである。

かくて帝國海軍は大東亞海の全水域及び全空域をその掌中に收めつゝ、殊に敵が最後の據點と恃むジヤバ島に痛烈無比なる攻撃を加へ、今や濠洲及び印度に對する有力なる出撃態勢を整へるに至つたのである。而かも、この間、我が無敵海軍の活躍は瞬時も休むことなく、その餘喘を保ちつゝある殘存米英蘭聯合艦隊の掃蕩に出撃、本海戰の翌日更にジヤバ沖に於て英大型驅逐艦一隻を撃沈、二月十日及び十四日にはシンガポール方面に於て英輕巡洋艦アレスーサ型一隻及び英特設巡洋艦一隻を撃沈（又は大破）蘭巡洋艦一隻、英驅逐艦一隻を撃破し、また十

九日にはポートダーウインに於て、濠洲驅逐艦三隻、同特設巡洋艦一隻を撃沈、同驅逐艦一隻を大破する等、相ついで赫々たる戰果を加へ、更に二十日のバリ島沖海戰に至り、またしても偉大なる戰果を獲得した。

バリ島沖海戰（昭和十七年二月二十日）

バリ島沖の海戰は、二月十九日午前八時より二十日午後二時に至る三十時間に亙る戰鬪であり、今次戰爭最初の本格的海戰であつた。

即ちこれは我が驅逐艦四隻を以つて、敵驅逐艦四隻を撃沈、一隻を大破した上、更に大型巡洋艦二隻にも大損傷を與へたのである。

昭和十七年二月十九日午前零時、我が四隻の驅逐艦は〇隻の輸送船を護送してバリ島〇〇地點に投錨した。午前八時に至り、敵爆撃隊が我が頭上〇米突の上空に來るを發見、直ちに我が驅逐艦隊は一齊に砲門を開いて猛烈なる對空戰を開始し、少時してこの第一回の敵空襲を撃退した。

然しジヤバ島の防衛を最後の抵抗線と頼む、敵爆撃編隊の攻撃は、最初より頗る猛烈を極め、しかも我が航空兵力の援助なきを見て、敵は、更に二回、三回と來襲、その都度我が撃退に遭ふや、回を重ねる毎に新手の航空兵力を加へ、八回、九回目の空襲を續行してその攻撃をゆる

めなかつた。

恐らく今次戰爭開始以來この時まで、これ程執拗を極めた敵の積極的爆撃はあるまい。我が方は、この優勢なる敵爆撃編隊の連續爆撃に對し、夕刻に至るまで果敢なる應戰を續け、遂に十回目の敵爆撃を完全に撃退、敵の目的を無效ならしめたのであつた。然るに、この執拗なる敵空襲を退けた次の瞬間、我が護送船團に襲ひ來つたものは、殘存敵艦隊の襲撃である。すなはち翌二十日午前零時「ジヤバ型巡洋艦二隻見ゆ」との無電が、僚艦より齎らされた。我が驅逐艦四隻は直ちに決戰の準備を整へた。

軈て、敵は我が前面に現はれた。しかしそれは、通報にありしジヤバ型巡洋艦ではなく、三隻の敵驅逐艦であり、こゝに四對三の砲戰を展開したが、一彈忽ち敵艦に命中し、初彈命中の幸先を切つて射ち出す我が二齊射、三齊射の集中に、遂に敵艦は沈沒、一瞬にして海底に沒した。僚艦の末路を眼のあたりに見た他の二隻は、この時俄かに針路を變へて逃走せんとしたが、我が驅逐艦二隻は全速を以つてこれを追撃、午前一時、再び我が猛烈なる砲撃が開始されたのである。

この砲撃戰は〇〇の近距離に於て行はれた爲め、敵艦の應戰振りが、手にとるやうに觀取されたといふが、「初彈近」「第二彈遠」と叫ぶ我が觀測手の聲とともに、次に發射された第三彈は、敵艦深く炸裂し、更に僚艦より射ち出した巨彈は、時を同じうして逃げ惑ふ他の一艦に命

中、巨彈を喰つて悶え狂ふ二隻の敵艦は、刻々その艦體を傾けて、遂にバリ島沖の海底深くその姿を沒し去つたのであつた。

かくして、僅か一時間の間に敵驅逐艦三隻を擊沈せる、我が方は、最初の通報にありし敵巡洋艦二隻の出現を待つたのであるが、この時既に敵巡二隻は形勢不利とみて逃走の最中であつた。こゝに於て全速追擊の命令が發せられた。午前三時、全速追擊中の我が驅逐艦二隻は、その左方遙かに四本煙突の敵艦影を發見、直ちに砲擊を開始すれば、敵もまたこれに對し熾烈なる應戰の砲門を開き、凄まじき砲擊の應酬は、敵探照燈のふりそゝぐ深夜、凄絶を極めた。かくする内、彼我の距離〇〇となるや、我が驅逐艦は好機至れりとして、必中の魚雷を發射、目標の彼方に起る鈍い轟音を艦全體に感じた時、敵艦左舷より濛々たる黑煙があがつた。

而かもこの魚雷命中とともに、いままで降り注いでゐた敵彈もハタととまり、黑煙に包まれた敵艦は次第に我が視界から遠ざかつた。

しかしこの二隻は、間もなく發見された。この時我が方の採つた戰法は、低く頭上をかすめる夥しき敵彈の中を、默々として、しかも全速力で敵艦に肉迫、壯烈なる捨身の戰法で、その距離〇〇に迫るや、突如として發射された魚雷は、見事敵の心臟部に命中、期せずして全艦萬歲の聲が湧き上つたのであつた。

一方〇〇輸送を護送する友軍に別れた我が二隻の驅逐艦は、遙かに殷々たる砲聲を耳にする

や、全速を以てその地點に至り、午前三時半、前方遙かに浮ぶ敵巡洋艦一隻及び二隻の驅逐艦を發見、時を移さず第一彈を發射すれば、次ぎの瞬間早くも敵驅逐艦の中央煙突に火柱上り、見るまに沈沒、更に僚艦の巨彈も他の驅逐艦に命中して炸裂、また次ぎの一彈は敵巡洋艦に命中し、煙幕の中に火炎の冲するを確認した。

スラバヤ沖、バタビヤ沖兩海戰（昭和十七年二月二十七日、三月一日）

エンダウ沖海戰、ジヤバ沖、バリ島沖の海戰等に於て次ぎ〳〵と米英蘭聯合艦隊勢力を擊滅し、敵が企圖せる海上ゲリラ戰を完封した帝國海軍は、更に二月二十七日、三月一日のスラバヤ沖、バタビヤ沖兩海戰に於てその殘存せる敵聯合艦隊を殲滅した。

而して、スラバヤ沖、バタビヤ沖兩海戰は、水上、水中、空中の三方面より行はれた初めての立體海戰であつて、その戰術は、我が巡洋艦戰隊とこれに策應する水雷戰隊との晝間砲戰と、水雷戰隊の晝間肉薄の雷砲擊、更に好機を捉へての潛水艦の攻擊及び航空部隊の猛攻とによるもの、正に近代海戰の眞髓を發揮したものである。卽ち、ジヤバ島攻略の我が陸軍部隊輸送船團を邀擊せんとする、西南太平洋米英蘭聯合艦隊並に米英本國よりの增援部隊に對するわが方の海戰であり、戰史上最も困難とされてゐる輸送船團海上護送の大任務を果した功績に於て、特筆さるべきものであつた。

二月二十七日夜、ジヤバ島敵前上陸部隊を滿載する輸送船團は、帝國艦隊に護衛されて、バタビヤ沖にさしかゝつた。果然、大型巡洋艦二隻、輕巡洋艦一隻及び驅逐艦二隻より成る敵艦隊の出現により、われは直ちに輸送船團を一時待避せしめ、同時に砲撃を開始した。そして黎明とともに我が海鷲も、これに參加した。更にまた我が潛水艦隊もこれに協力、敵艦に肉薄した。彼我數十隻の艦艇は洋上に入り亂れ、空には海鷲の亂舞あり、水に潛艦の威力を競ふ、正に近代立體海戰の展開である。而して二十八日晝間となるや、海戰は我が方の勝利に歸し、敵巡洋艦三隻、驅逐艦六隻を撃沈、巡洋艦四隻を大破したのである。

しかも意氣軒昂たる我が方は、尙も引續き殘敵を索めて出動、三月一日午前十一時に至り、ジヤバ島北岸クラガン北方の沖合に於て敗殘の敵艦隊を發見、躊躇なくこれに猛撃を加へ、ここにまたバタビヤ沖海戰を展開した。

既にして、前日の敗戰に意氣沮喪せる敵艦隊は、戰意更になく、最初より煙幕を張つて只管逃走せんとしたが、我れは海鷲の協力下に、集中砲火を浴びせ、これを海底の藻屑と葬り去つたのであつた。

大本營發表（三月三日）は、その戰果を左の如く述べてゐる。

撃沈せる敵艦隊主力

米甲巡ヒューストン、英甲巡エクゼター、濠乙巡パース、濠乙巡ホバート（轟沈）、蘭乙巡デ・ロイテル、蘭乙巡ジヤバ

その他撃沈せるもの

潛水艦七隻、驅逐艦八隻（うち二隻は大損傷擱坐）砲艦一隻、掃海艇一隻

即ち、撃沈せる敵軍艦の總數實に二十一隻、この中には去る二月四日のジヤバ沖海戰に大破せりと思はれた米舊亜細亜艦隊旗艦ヒューストン及び蘭印艦隊旗艦デ・ロイテルがあつた。

印度洋作戰（昭和十七年四月五日—四月九日）

敵が最後の據點と恃むジヤバ島に對し、痛烈無比なる攻撃を加へ、殊にスラバヤ沖、バタビヤ沖兩海戰に於て敵聯合艦隊を潰滅した帝國海軍は、かくて大東亞海の全水域及び全空域を完全に掌握、こゝに濠洲及び印度に對する有力なる出撃態勢を整へるに至つたが、果然三月二日、我が海軍はその艦艇を印度洋に進出させ、ジヤバ島チラチヤツプ沖に於て、更に英驅逐艦ストロングホールド及び米砲艦アセヴルを撃沈し、敗殘の敵艦艇に最後の止めを刺し、いよいよ印度に壓力を加へ得る態勢を確立し得た。

こゝに於て、四月五日、わが方は、印度洋上にある英最大の軍事據點セイロン島コロンボ軍港に攻撃の火蓋を切つた。而して、これより同九日に至る五日間に於て、印度洋上の英海軍及び航空兵力の主力を撃滅した。

帝國海軍部隊の四月五日より同九日に至る戰況並に綜合戰果をみれば、

コロンボ方面（四月五日）

我が海軍航空部隊はセイロン島コロンボを急襲、その重要軍事施設數ケ所を大破炎上せしめ更に敵航空兵力に對する攻擊は猛烈を極め、スピットフアイヤー、ハリケーン、スオードフイツシユ、デフアイアント等敵機五十七機を擊墜、また港内にある敵船舶十六隻を擊破するとともに、飛行機格納庫三棟、修理工場一棟を大破炎上、附近洋上に於て敵大型飛行艇ビー・ワイ二機及びアルバコア一機を擊墜した。

コロンボ方面洋上（四月五日）

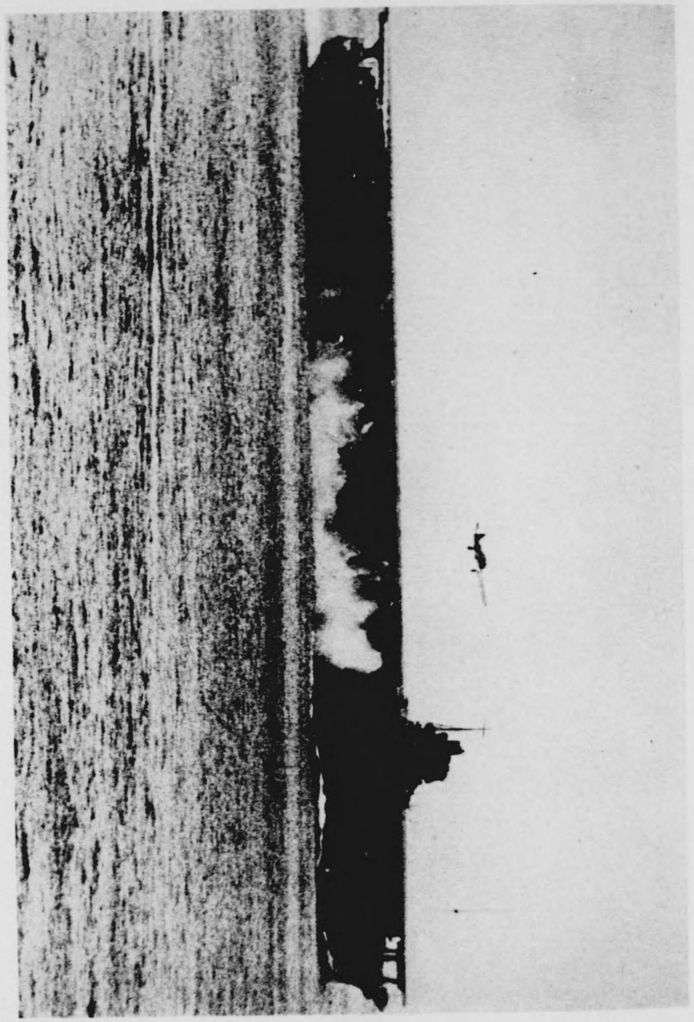
セイロン島南方三百數十海里の洋上に於て、全速を以て避退中の英甲級巡洋艦ロンドン型一隻及びコンウオール型一隻を發見した我が航空部隊は、直ちにこれを猛襲して忽ち兩艦を擊沈した。

ベンガル灣方面（四月五日）

コロンボ方面の攻擊に呼應してベンガル灣に進攻した部隊は、同方面を航行中の英國船二十一隻（約十四萬トン）を擊沈、七隻（約四萬トン）を大破した。

印度東岸方面（四月五日）

印度東岸の英國重要軍事據點ビザガパタム、コカナダ等を奇襲した海軍部隊は、同地所在の



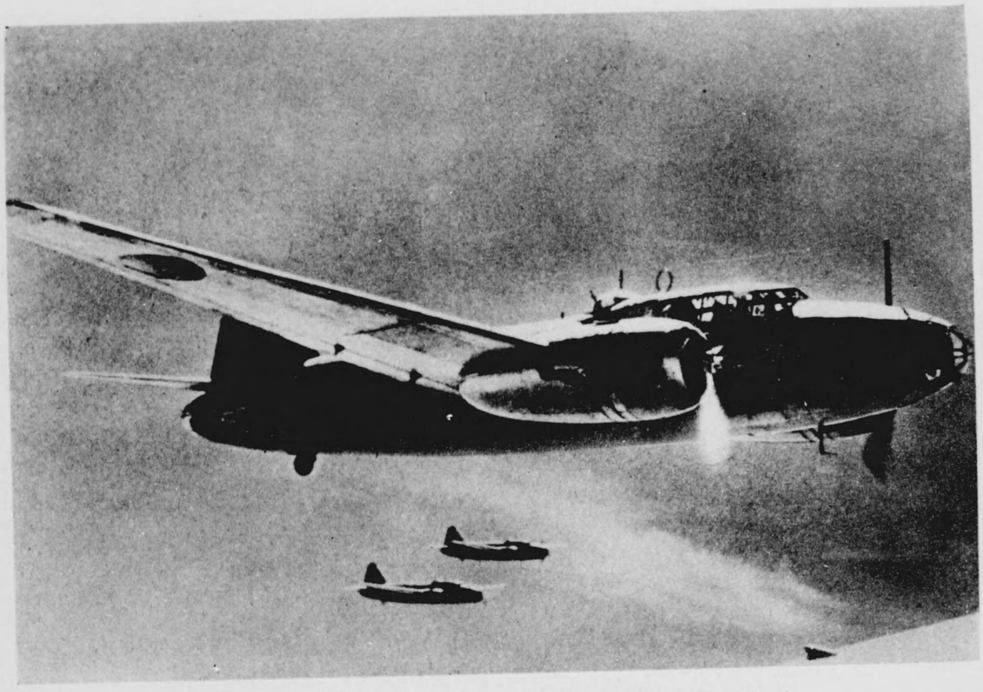
〔戰海イワハ〕つ　立　び　飛　機　陸　軍　一　分

（寫眞　百三十）

〔戰海イワハ〕場行飛軍陸ーライホ潤珠眞の下攻猛が我

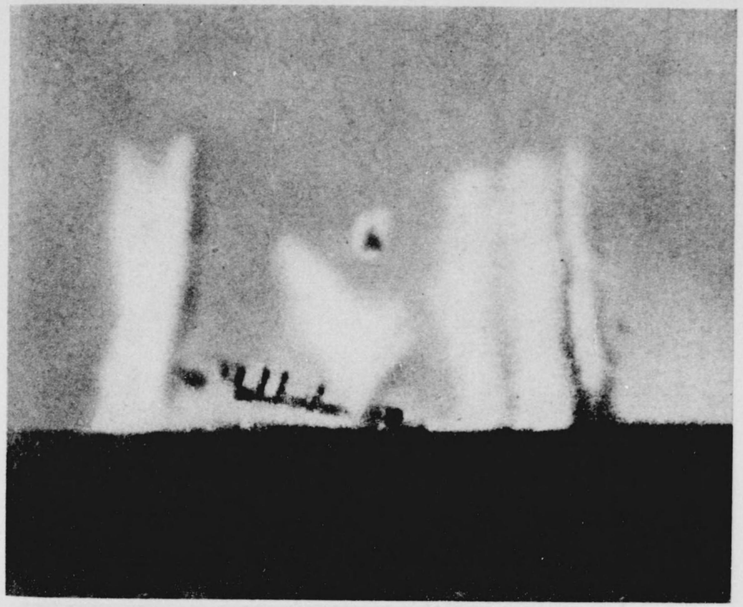
〔戰海イワハ〕場行飛軍陸ムカツヒは方下　るを包に麓黑に艇群艦の内灣・機戰樣ホわの空上潤珠眞

大傾斜遁走せんとするプリンス・オヴ・ウエールズ　左方黒煙を吐くはレパルスと驅逐艦〔マレー沖海戰〕

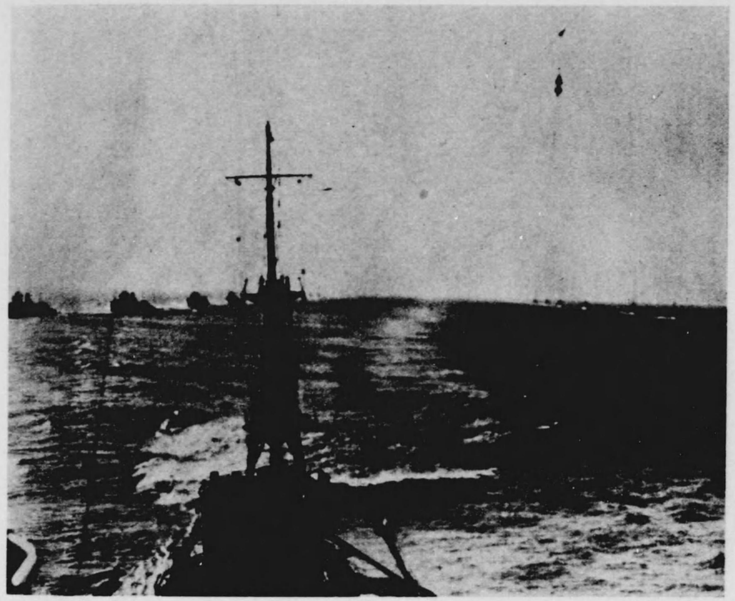


インド洋上に鵬翼を張る海軍新鋭攻擊機〔インド洋作戰〕

敵艦隊攻撃に向ふ帝國海軍〇〇航空部隊



〔戰海沖ヤバラス〕すとんせ沈撃にさま・中命に艦逐驅米彈巨



艦艦○○○に出動

船舶及び諸軍事施設に大損害を與へた。

ツリンコマリ方面（四月九日）

コロンボとともにセイロン島の二大軍港たるツリンコマリを強襲した我が航空部隊は、激烈なる空中戰を演じハリケーン、ブレネム、スーパーマリン等四十一機を撃墜、四機を地上炎上し、更に英乙級巡洋艦リアンダー型一隻を大破、敵船大型二隻、小型一隻を撃沈、また海軍工廠、大型飛行機格納庫二棟、その他火藥庫、兵舍、油槽群等の重要軍事施設を爆破、特にその飛行場施設に對し猛爆を浴びせこれを潰滅した。

ツリンコマリ方面洋上（四月九日）

我が航空部隊は、ツリンコマリ東南方の洋上に於て南下中の敵航空母艦ハーミス及び驅逐艦一隻を發見、直ちにこれを猛襲して撃沈、また他の一隊は附近を航行中の敵船四隻を撃沈、更に同方面作戰に於て、スピットファイヤー、ブレネム等の敵機十五機を撃墜した。

尙、本作戰中帝國潛水艦は、敵船七隻を撃沈、一隻を大破した。

而かもこの作戰中、ロンドン型及びコンウオール型の兩甲級巡洋艦は、我が新作戰展開を察知し、遁走につとめたが、我が海鷲は之をセイロン島南方三百數十海里の遠距離にまで追撃捕捉し、つひに之を海底に葬り去つたのである。また航空母艦ハーミスは、ハーミス自身搭載機を一齊離板せしめ、我れを邀撃する機會を充分に持ちながら、これまた卑劣にもセイロン島東

方に南下逃走せんとしつゝあつたのを、我が海鷲が發見、これを擊沈したもので、英海軍の傳統的精神と誇號する見敵必戰の面目はこれを以て微塵に打ちくだかるゝに至つた。

かくてセイロン島を中心とする英國の印度洋海軍力は、こゝに殆ど潰滅し、印度洋の制海、制空權は我が掌中に歸したのである。

結　語

大東亞戰爭は、日清、日露の兩役と同樣、文字通り大日本帝國自衛のためであつた。それ以上でもなければ、それ以下でもなく、徹頭徹尾、帝國存立の爲め、自衛の爲め、やむを得ずして立ち上つた戰爭であつた。

而して、日清、日露兩役に於ける戰鬪が、共に海戰にその火蓋を切つて、充分の戰果をあげてゐると同じく、大東亞戰爭もまた、ハワイ海戰、マレー沖海戰等の緒戰に於て、戰史未曾有の大戰果をあげたのである。之を今日までの世界海戰に見るとき、緒戰の大勝によつてその戰爭の大勢を左右したと云ふほどの海戰は、海戰史上ひとり帝國海軍のみがなし得たもの、今次の緒戰たるハワイ、マレー沖兩海戰にあげたわが方の戰果ほど、戰爭大勢を支配した緒戰の戰勝は、未だかつてない。ハワイ、マレー沖兩海戰は、この意味に於て世界戰史乃至世界海戰史上まつたく獨自のものである。

勿論、航空の發達せる今日及び今後の海戰にあつては、必然の結果として、その緒戰が、飛行機により開始されるとはいへ、今次、ハワイ、マレー沖兩海戰は、緒戰の一擊、忽ち西南太平洋の廣大なる海面を制壓したのは云ふまでもなく、その制空、制海兩權を完全に獲得し、而してこれありしために、その後の戰爭行動——敵空襲の完封、通商破壞作戰の潰滅、軍團の輸送、上陸戡定作戰の進捗等、縱橫無盡の活躍をほしいまゝになし得たのである。

これを要するに、大東亞海戰は、作戰海域の廣大なる點に於て、その作戰戰略の雄大なる點に於て、戰史未曾有の地位を占むるに充分であるが、その最大なる特徵は、何と云つても、緒戰二海戰が戰爭全體に及ぼした影響である、戰爭全體を左右したことである。

第四編　海上權力と國家の消長

神武天皇の舟師

大日本帝國の大理想たる「八紘一宇」の大使命は　神武天皇の御即位に際し

「上ハ則チ乾靈國ヲ授クルノ德ニ答ヘ下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メン然シテ後ニ六合ヲ兼ネ以テ都ヲ開キ八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲スコト亦可ナラスヤ」

との御宣言による。卽ち四面環海、海國日本の存立はその大陸を繞る大洋を我が御稜威のもとに管制しなければ、これを完全に達成し能はないとの大意に外ならない。

抑〻吾等の祖國、大八洲は、久遠の昔　天祖が修理固成經營し給ひし所、大小二千有餘の島嶼亞細亞大陸の東岸に沿ふて、碁布粟散し、帶の如く北東より南西に連り、こゝに秀麗の山河あり、一君萬民の日本國家は永遠の大生命を護持して、寶祚の彌榮、天壤とともに窮まりなく國運向上の一路は、悠遠の未來に通じてゐる。

天祖が國土をこゝに、渺茫たる蒼溟のさなかに選定し給へる意義は洵に深遠といはねばならぬ。その天意の在るところ、大日本帝國は、久遠の昔から、悠遠の未來に亙つて海洋國家であり、吾等また永遠に海洋民族、海洋國民たるの運命に置かれてゐるのである。

太古のことは邈乎としてこれを詳にする由もないが、いま吾等は、國史を通じて日本國家及

び日本民族が、海洋國家として、また海洋民族として生々發展し、繁榮の一路を辿つたことを知るとき、吾等は、こゝに海洋國、海洋國民たることを讃仰し、誇りとせねばならぬ。

素より海洋帝國日本の今日あるは、海國日本を創造し給へる天意の深遠なるに據るとはいへまたわが祖先が、よく我が國の海洋國家たるの本質を自覺し、國家の經營に當つた結果に外ならない。いまや隆盛一路、大東亜に君臨する大日本帝國の繁榮は、一に大御稜威の四海に洽き賜であると同時に、わが祖先の生々躍々たる海洋精神の發揚によること、蓋し何人もこれを首肯するであろう。

謂ふならば、海國日本は、海國民族の海洋精神に興隆したのであるが、それと同時に、その海洋精神の振否が、直ちに海軍力の消長に影響し、延いては國運の盛衰に反映せる事を知るべきである。

まことに、建國以來二千六百二年、我が國運盛衰の歷史は、即ち我が海軍力消長の歷史であつた。この一事は海洋國日本の現在及び永遠の將來に亙つて、不動の眞理たるを失はぬ。

神武天皇の御東征はその最初である。

神武天皇の舟師による御東征は、上古、九州南東部日向の一角から、海路により出發せられた。　天皇御東征の舟師は、船舶の一大集團から成つてゐたと見るべく、畏くも　天皇はそれに搭乘し給ひ、將卒を御直率遊ばされ、先づ南海及び瀨戸内海の海上權を掌握、次いで御發航

の日より數年の歲月を經て浪速に達し給ふた。而してこゝより大和に進みて長髓彦の賊軍を討ち給ふたが、地の利を得ず苦戰に陷られしため、軍を還し、浪速より更に舟師を率ゐて、南海熊野に上陸せられ、嶮路賊軍の背後を衝いて大捷を博し給ひ、遂に大和に攻入り、こゝに大和建國の大業を成就し給ふたのである。

この　天皇の舟師による背面迂回の作戰こそは、大和山中の決戰場裡、かの金鵄の靈驗とともに、我が建國史上の偉勳である。もとより當時の舟師と、今日の海軍とを同日に談ずることは出來ぬが、「天皇の舟師」は即ち「天皇の海軍」であり、皇國建軍の淵源は實にこゝに存するのである。

斯くて　天皇の舟師による作戰は、萬世を照らす偉勳として輝いた。吾等はこの御偉業を偲び奉るとき、無限の感銘と、不拔の信念とを喚び起さずにゐられぬのである。

神武天皇の舟師による御東征こそは、まさに帝國海軍の濫觴である。

崇神天皇の辨韓援助

神武建國の鴻業成りてより十代を經て、皇紀五百七十年、崇神天皇の御代に至り、皇國の治績大いにあがり、かの四道將軍の異族鎭定によつて、皇威は遠く邊境にまで及んだ。而かもこ

の頃我が國と支那大陸との交通は相當頻繁となり、また大和朝廷の力も充實したるため、內に充つれば自ら外に向ふ自然の法則は、このとき漸く海外發展の氣運となつて國內に動きつゝあつた。

こゝに至り　天皇は十七年七月、「船者天下之要用也、今海邊之民、由レ無レ船以甚苦二歩道運一、其令二諸國一俾レ造二船舶一、各十月始造二船舶一」（日本書紀）と造船の詔を下し給ひ、その擡頭する國外發展の氣運を大いに奬勵せられ、斯くて皇威は愈よ國內に洽く、國光は海を越えて輝き渡つたのであるが、天皇の六十五年、偶ゝ、朝鮮の辨韓地方が、その隣國新羅、百濟の挾擊をうけ、援助を我が國に求め來つたので　天皇は直ちに鹽乘津彥（海軍提督）を遣はして、新羅を制壓、同地方の難を救はしめ給ふた。

この結果そこに任那國が新たに誕生して、我が國に入貢隷屬し、嬰て同地に任那日本府が創設せられ、これを統治するに至つた。これこそ我が國が政治的に海外に發展した嚆矢であり、その大陸政策の第一歩は、實に海軍力によつて踏み出だされたのである。

斯くて任那國の統治に伴ひ、朝鮮半島における我が勢力を維持伸張せんとするには、必然に、朝鮮海峽を我が御稜威のもとにおくことが必要となつた。當時朝鮮半島に對する我が交通路としては、北陸及び山陰地方から、隱岐島、鬱陵島を經由するものと、九州地方から壹岐、對馬を經て半島南部に達するものとの二つがあり、後者は半島に臨む交通路として最も好適至便で

あつたが、同地はいまだ平定ならず、叛服常なき九州の豪族熊襲の占有するところであつた。それに加へて、朝鮮半島は、我が國に隷屬した任那國を除き、他の新羅、百濟、高麗の各國は多分に支那（周、殷、燕、秦、漢等）との交渉が繁く、中にも新羅の威勢最も强大であつて、その暴威の赴くところ、我が九州の豪族熊襲を秘かに指嗾して、同地方の治安を屢々妨害するとともに、任那國に對しても侵略の機會をねらひつゝあつた。

故に朝鮮海峽の制海權を得んとするには、先づ九州の統治卽ち熊襲征討が先決問題であつた。卽ち　景行天皇をはじめ奉り、日本武尊　仲哀天皇　神功皇后、相繼いで熊襲征討の師を進め給ふたのである。

神功皇后の三韓征伐

仲哀天皇の二年、熊襲また背反したるを以て、同九年（皇紀八百六十年）　天皇は神功皇后と共に熊襲征討の軍を親ら率ゐられ、海路九州に進駐遊ばされたのであるが、この年二月二日天皇は軍中に崩御遊ばされた。神功皇后は、士氣の沮喪せんことを懼れ給ひ　天皇の喪を秘して穴門豐浦宮に密葬し奉り、こゝに軍を蹶起せしめ、吉備鴨別をして熊襲に當らしめ、御自らは男裝して群臣を率ゐ給ひ、更に熊襲背後の勢力たる新羅親征を宣せられ、諸國に令して船舶

を徴集し、兵を練り軍をすぐつて、同年十月愈よ三韓征伐の大壯擧を敢行あらせられた。これ我が海外大遠征の最初であり、さきの任那國統治を大陸發展の嚆矢とすれば、これはまた大陸經營の本格的第一着手ともいふべきである。

皇后は出征に當つて、軍紀振肅の令を宣し給ひ、

「金鼓節なく、旌旗錯亂すれば、卽ち士卒整はず。財を貪り、私を懷けば內顧必ず敵のため虜れなん。その敵少くとも輕んずること勿れ、敵强くとも屈することなかれ、卽ち奸暴なるは聽すること勿れ、自服するは殺すこと勿れ。遂に戰勝たば必ず賞有らひ、背走せば自ら罪有り」

と荒海遠征の士氣を鼓舞、その陣中の戒律を嚴にし給ふた。さればこそ皇后統率の我が三軍は、威容整然、軍規は一絲も亂れず、武威天を壓し、堂々九州より對馬を經て新羅に直進、朝鮮近海の制海權を完握し、日ならずして新羅南岸に到着した。このとき、我が舟師（艦隊）の帆檣林立して、金鼓天を震ひ、旌旗整然として空を蔽ふた。卽ち、新羅王愕然としてそのなすところを知らず、戰意頓に喪失して俄かに臣下の禮をとり、「太陽西に出で、洛東江の流逆となり、河石昇つて星辰となるも、決して春秋の朝貢を闕き、臣禮を失はざるべき」ことを誓つた。最强國新羅すでに降る。次いで高麗、百濟二國も到底勝算なしとして、我が軍門に投降し、親征僅かに二ケ月にしてこゝに三韓を平定したのである。

斯くて朝鮮半島は全く我が國に隷屬し、任那日本府は三韓統治にその勢威を振つたが、海を

越えてこれを完全に統御するには、勢ひ陸海軍の大整備が絕對不可缺の要件となつた。而して威勢中外に輝くところ應仁天皇の御代には、陸の精兵の多きは勿論、海に無數の軍船舶あり、その水夫もまた萬を以つて算ふるに至り、更に大和朝廷に海人部の創設あつて、皇子大山守命をその總裁と仰ぎ、吉備海直、紀井海直、但馬海直、播馬海直、阿波海直、靑海首、韓海部首（歸化海人部）等の海軍職制も制定されて、こゝに海の備へは完備された。

任那日本府の滅亡

さりながら、神功皇后の三韓征伐以後、半島はなほ叛亂繁く、隨つて、これが平定のため天智天皇の御代に至るまで十七回の遠征をみ、半島に於ける我が國の勢力は、我が海軍力の消長を反映して一張一弛を繰返した。卽ち　欽明天皇の二十三年（皇紀千二百二十二年）新羅は朝鮮半島制覇の野望を滿さんがため、我が任那日本府を攻め、次いで　推古天皇の八年（皇紀千二百六十年）に再び任那國を攻擊した。

こゝに於て　天皇は、任那を救援のため、萬餘の兵をして新羅征討に向はしめ給ひ、軍は、その五城を攻略した。新羅その威に懼れ六城を割いて降服し、毎年の朝貢を誓つた。然し我軍が現地を引き上げるや、彼は、再度任那を侵略するに至つた。しかも　天智天皇の第一年（皇

紀千三百二十二年）三月、百濟の失地回復ならず、高麗また唐、新羅の聯合軍に攻撃され、援を我が國に請ふたので　天皇は先づ援軍の一部隊を先遣し、更に五月、大將阿倍比羅夫をして船師百七十艘を率ゐて赴援せしめ、我が國の人質たりし百濟王弟豐璋を百濟に送還し、これを即位せしめたのである。

天皇は、その後に於ても、ひたすら、任那國の回復を企圖あらせられ、武器、船舶を整備し翌二年上野稚子、間人大蓋、阿倍比羅夫を將として二萬七千の兵を朝鮮に出師し、新羅征討に赴かしめられた。然るに當時國内に於ては大陸文化の浸潤により、我が國民は、漸くその質實剛健、尚武の氣風を喪ひつゝあり、しかも蘇我氏政權を恣にして内政は紊亂し、ひいて國力の減退を招來するのやむなき情勢にあつた。内政亂れて外交の振ふ筈なく、この國民的氣魄の喪失と共に、我が海外發展頓挫の日が近づきつゝあつたのである。

白村江の敗戰

即ち　天智天皇の三年（皇紀千三百二十三年）八月、白村江（現在の錦江の河口）の二回に亙る敗戰がそれであり、百濟救援の爲め半島に急航した我が船師は、唐、新羅の聯合軍と白村江に戰ひ、唐の提督劉仁軌の率ゐる戰船百七十艘と合戰したが、利あらず、更にその翌日これを

攻撃したが、我が軍船は唐軍の戰船に左右より挾撃されて敗れ、こゝに我が水軍史上唯一の敗戰記錄を殘したのである。これを支那の戰史は「倭兵と白江に遇ふ、四戰皆捷ちその舟四百艘を焚き、烟炎天を灼く、海水皆赤し」と誇り、我が日本書紀も「官軍敗績し、水に赴きて死するもの衆し」と叙してゐる。

而して、白村江の敗戰は、當時のわが海軍力を全く喪失せしめた。隨つて、我が邊疆は、唐の水軍來襲に脅え、一度び海に對する自信を失つた當時の我が國は、或は對馬、壹岐及び韓海沿岸の兵力配備に、或はその烽燧施設等の防禦にのみ力を致し、筑前、筑後、長門の沿岸に、水城を築くといふ憂ふべき有樣であつた。而して　天智天皇の七年（皇紀千三百二十八年）新羅は遂に朝鮮半島を統一し、我國は半島經營より後退するのやむなきに至り、こゝにまた唐及び新羅の侮りを受くるに至つた。當時、我が國風一般の惰弱は、具眼硬骨の士の主張する新羅膺懲論に耳を傾けるものがなかつたのである。

惠美押勝の外征計畫

その後　淳仁天皇の御代に至り、宰相藤原仲麻呂（惠美押勝）、再び半島經營の政策を行はんとして、水軍整備計畫を樹て、天平三年（皇紀千四百十九年）六月、海陸の兵を九州太宰府

に集合練兵し、更に同年九月、軍船五百隻の建造令を發し、これを北海道八九、山陰道一四五、山陽道一六一、南海道一〇五隻に割當て、三年以内に竣工すべしと命じ、また東海、南海及び西海の節度使をして軍船兵士等を管轄せしめたのである。

その水軍編成と軍備擴充計畫を見れば、次ぎの如くである。

東海＝節度使藤原朝狩。所管は遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、安房、上總、常陸、上野、武藏、下野等の十二ヶ國。船一五一隻。兵士一五、七〇〇人、子弟七八人、水手七、五二〇人（右の内肥前の二、四〇〇人及び對馬の二〇〇人を含む）

南海＝節度使百濟敬福。所管は紀伊、阿波、伊豫、土佐、播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防等の十二ヶ國。船一二一隻。兵一二、五〇〇人、子弟六二人、水手四、九二〇人

西海＝節度使吉備眞備。所管は筑前、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後、日向、大隅、薩摩の九ヶ國。船一二一隻。兵士一二、五〇〇人、子弟六二人、水手四、九二〇人

斯くして幾何もなく軍船三百九十三隻、兵士四萬七百人、水手一萬七千三百八十人の水師準備がなり、陸海の兵制も確立して、始めて官設海軍の形態を備へ、將に外征の壯擧を決行せんとしたのであるが、不幸、國内の旱魃による經濟的破綻と奸逆弓削道鏡の政治的進出とによつて、折角の壯擧もつひに頓挫した。押勝、この時道鏡を除かんとして却つて誅せられ、雄圖惜しくも水泡に歸したのであつた。

爾來約四百年間、我が國に海軍力なく、國内上下を通じ滔々として大陸文化に耽溺し、古來傳統の海洋精神並に尚武の精神を喪失し、平將門及び藤原純友の亂等國内に叛亂相つぎ、しかも渤海國、新羅、刀伊賊等の外寇また頻りに來り、その都度善戰善防よく外敵を擊攘し得たのであるが、進んで外敵を攻むるの氣概なく、徒らに海岸線の防備にのみ沒頭してゐる有樣であつた。

斯くて、世は平安朝より源平兩氏の鬪爭時代を經て、元寇國難の時代に至るのであるが、この元寇の役こそ、天が我が國民の頭上に一大鐵槌を加へたものであり、海洋日本國民にとつて正に好箇の一大試錬であつた。

元寇の國難

土御門天皇の建武二年（皇紀千八百六十六年）大陸蒙古に不世出の英雄成吉思汗出現し、その威勢は孫、忽必烈に至る五代の間に西方歐洲を席卷してその大部を併呑し、南方の金、宋を攻略、東方にあつては高麗を征服して、旭日昇天の勢を極め、餘勢更に海を越えて我が國に迫り來つた。

即ち元の忽必烈は先づ戰はずして我が國を征服せんとし、使者をして國書を太宰府に齎らし

めた。時に　龜山天皇の文永五年（皇紀千九百二十八年）正月であつたが、文辭傲慢無禮を極めしため、われは返書を與へず使者を放逐した。しかも元使の來ること續いて二度、時の執權北條時宗は、西國沿岸の防備を固め、陸の精兵をすぐつて集結せしめ、元軍の來るに備へたが、如何せん、海軍力なき韓海一帶の海上權は、あげて元及び高麗の制壓にあり、我が軍船は僅かに沿岸防備用たる小船三百隻ありしに過ぎなかつた。

しかるに、文永十一年十月三日、元軍二萬五千の兵は、高麗軍八千を含め、大船九百餘隻に分乘して、慶元及び釜山附近の合浦より出動し、我が對馬、壹岐を侵掠殺戮して、肥前の平戸、鷹島、松浦方面に迫り、更に博多灣に來襲して能古島を占領、十月十九日筑前今津に上陸して海陸兩面より博多に殺倒した。

我が陸の精兵十萬八千、よく善防善戰して、わづかに元軍破竹の侵略を阻止し得たが、この夜俄かに强風起り、爲めに元軍の溺死するもの一萬三千五百を算へ、その軍船二百隻は海底に沒して、元軍をして一先づ退却の餘儀なきに至らしめた。これを文永の役といふが、この役には海戰なく、韓海の制海權は依然として元の手にあり、戰ひは所謂長期化した。

越えて建治元年（皇紀千九百三十五年）四月、再度元の使者來り、またしても傲慢非禮なる國書を手交したため、執權時宗怒つて使者を龍の口に斬り、最早元の暴戾默視し難しとして、元討伐の積極的外征計畫を樹て、陸の軍備を强化するとともに、一方軍船を充足整備して水手

梶取を徵集、これが演練をほどこした。然しこの外征計畫は、內政上の困難より、遂に實行を見るに至らなかつたものゝ、時宗のこの軍備擴充の積極方針は、當時滔々たりし文弱の氣風を一掃して、海洋國民本來の尙武精神に目醒めしめ、次ぎに來る大國難、弘安の役に重大なる役目を果すことゝなつたのである。

卽ち弘安四年（皇紀千九百四十一年）六月、飽迄我が國征服の野望に燃える忽必烈は、先遣部隊として東路軍を派し、戰船九百、兵四萬に武威を誇示して、我が筑前宗像沖に到着、次いで博多灣に進攻して、忽ち志賀島、能古島を占領した。しかし、文永の役より七ケ年の日子は、我が國の戰備を大いに强化し、海軍力も相當に整備してゐた。

されば元軍再び來るの聲に、我が將士は奮ひ起ち、河野通有、通時等水軍の猛將は、よく輕舟を驅つて敵大船を奇襲、晝夜をわかたず壯烈無比なる接舷戰法を決行して、大いに敵を惱ました。この我が水軍奇襲部隊の活躍は、元軍の上陸作戰を困難ならしめ、止むなく彼は鷹島を根據として、范文虎の率ゐる江南軍の來會を待ちつゝ、荏苒日を空しうしなければならなかつた。

斯かる內、范文虎の本隊は、戰船三千五百に兵十萬を滿載して到着、相合して大擧猛襲に移らんとしたのであるが、この時七月晦日夜半より大風にはかに起り、敵戰船ことごとく破損沈沒して、敵兵の溺死するもの數知れず、わが水軍の勇戰また壯絕を極め、遂に海上、敵の片影